



第四章 情報活用能力の抜本的向上と 質の高い探究的な学びの実現

(論点整理 P47～61関係)

（１）情報活用能力の抜本的向上

（論点整理 P48～54関係）

情報活用能力とは（学習指導要領解説より）

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 第3章 教育課程の編成及び実施 ※中、高も同旨

第2節 教育課程の編成

2 教科等横断的な視点に立った資質・能力

（1）学習の基盤となる資質・能力

イ 情報活用能力

情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成が重要となる。また、情報技術は人々の生活にますます身近なものとなっていくと考えられるが、そうした情報技術を手段として学習や日常生活に活用できるようにしていくことも重要となる。

情報活用能力をより具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。

情報活用能力の重視は国際的潮流にも合致 OECDラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030より

- (略)自らが持つ可能性を発揮できる方向へ進むために、生徒は学びの中核的な基盤を持っていないことが判明しています。
- 2030 年に必要とされる主要な知識、スキル、態度及び価値は読み書き能力やニューメラシー（数学活用能力・数学的リテラシー）に限らず、データ・リテラシー（データ活用・解析能力）やデジタル・リテラシー（デジタル機器・機能活用能力）、心身の健康管理、それから社会情動的スキルも含まれます。
- これらは 21 世紀で活躍するために欠かせない基礎能力であり、人間の知性を支える重要な側面であるとますます認識されています。

【出所】OECD Learning Compass 2030 仮訳より作成

社会課題と情報技術

**仮想空間と現実空間の高度な融合で人間中心の社会を目指す。
社会の隅々にデジタル技術。よき創り手、賢い使い手を育てる必要**

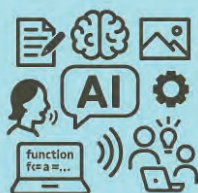


2040年代、情報技術は更に進展することが予想される 情報活用能力は多様な個人の思いや願い、意思を具現化するチャンスにも繋がる

身の周りにある多くのものに 情報技術が活用されている



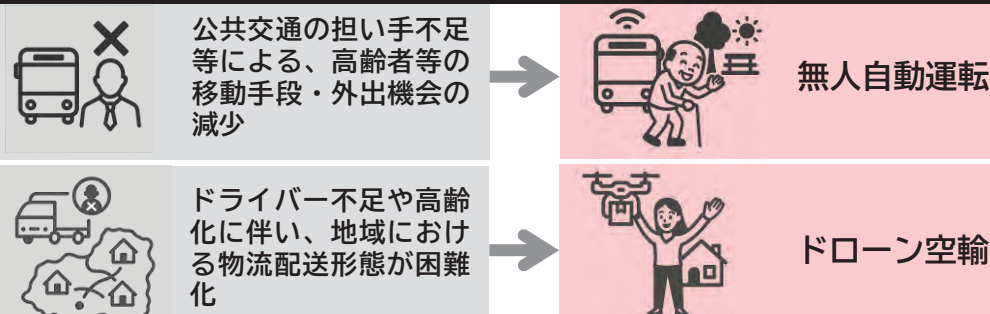
これらは、情報技術が活用されていることを感じさせないほど身近なものとなっている



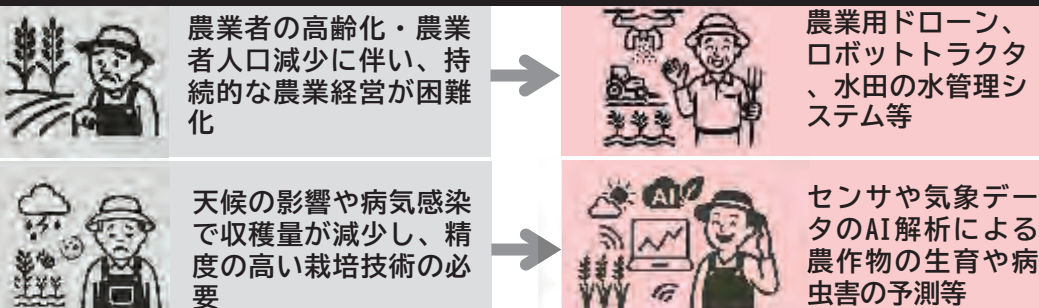
さらに、生成 AIが急速に社会に普及している。文章の素案作成やイメージの生成、語学学習における利活用、プログラミングコードの生成、ブレインストーミングの壁打ち相手としての利活用、既存のサービスへの生成 AI の機能の搭載など、様々な利活用が広まっている

実社会における課題解決には 情報技術の利活用が不可欠

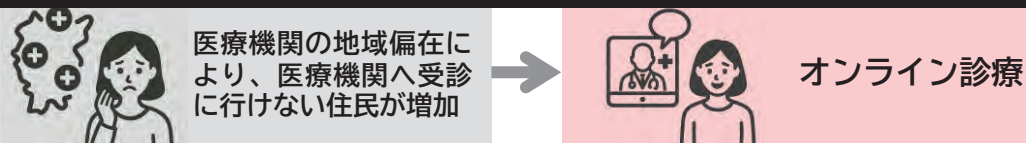
例1 地方における移動手段、物流の課題の解決



例2 農業における高齢化・農業者人口減少の課題の解決



例3 地方における医療の課題の解決



情報技術が認知や行動に与えるリスク

① 子供たちは常時ネット接続の環境に

● 青少年のインターネットの利用時間の1日平均

小学生 中学生 高校生
約3時間44分 約5時間2分 約6時間19分

○インターネットを利用すると回答した青少年の平均利用時間は、前年と比べ約5分増加し、約5時間2分。
○目的ごとの平均利用時間は趣味・娯楽が最も多く、約3時間1分。

● 子供専用のスマホ保有率

小学生	中学生	高校生
72.0%	95.3%	99.1%
(0.0%)	(2.6%)	(3.9%)

(2010年度)※

● 青少年の健康面への懸念

✓ 最も多いのは「インターネットにのめりこんで勉強に集中できなかったり、睡眠不足になったりしたことがある」(24.6%)

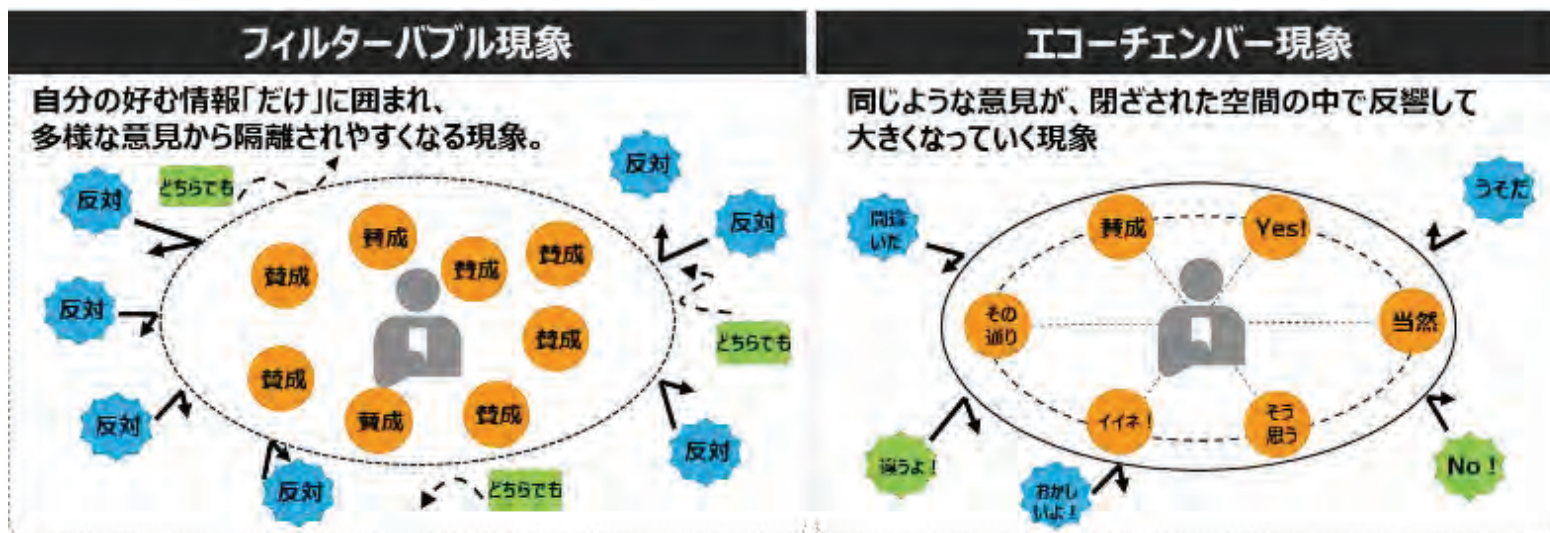
(出典) 令和6年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」報告書 令和7年3月こども家庭庁
※ 平成22年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」結果について(概要) 平成23年2月 内閣府
平成26年度より調査方法等を変更したため、平成25年度以前の調査結果を直接比較ができないことに留意。「小学生」の調査対象は、満10歳以上。

② フィルターバブル、エコーチェンバーの影響

● 検索結果やSNS等で表示されている情報がパーソナライズされていることへの認識

- ✓ 日本は「知っている」(44.7%)、他の対象国(80%~90%)と比べて大幅に低い
- ✓ 理解が不足していると情報を正しく評価できず、社会生活で誤った判断を下す危険

(出所) 情報通信白書令和5年度版



③ 偽・誤情報の認識率が他国より低い

SNSやブログなどで偽情報・誤情報だと思う情報を見かける頻度

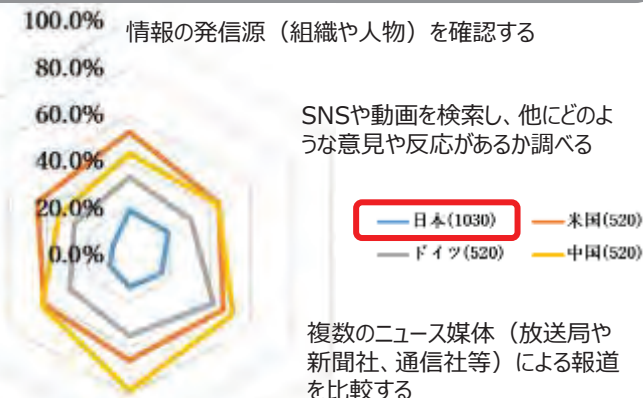
	ほとんどない (%)	そもそも何が偽情報・誤情報なのかが分からない (%)
日本	15.3	14.5
アメリカ	4.5	1.3
イギリス	7.3	1.9
フランス	8.7	3.3
韓国	7.9	1.1

出所：総務省「令和4年度 国内外における偽・誤情報に関する意識調査」より作成

④ ネット情報の信頼性、確認の割合 いずれの方法も他国より大幅に低い

その他の方法で真偽を確認する

専門家やファクトチェック機関による検証結果を確認する

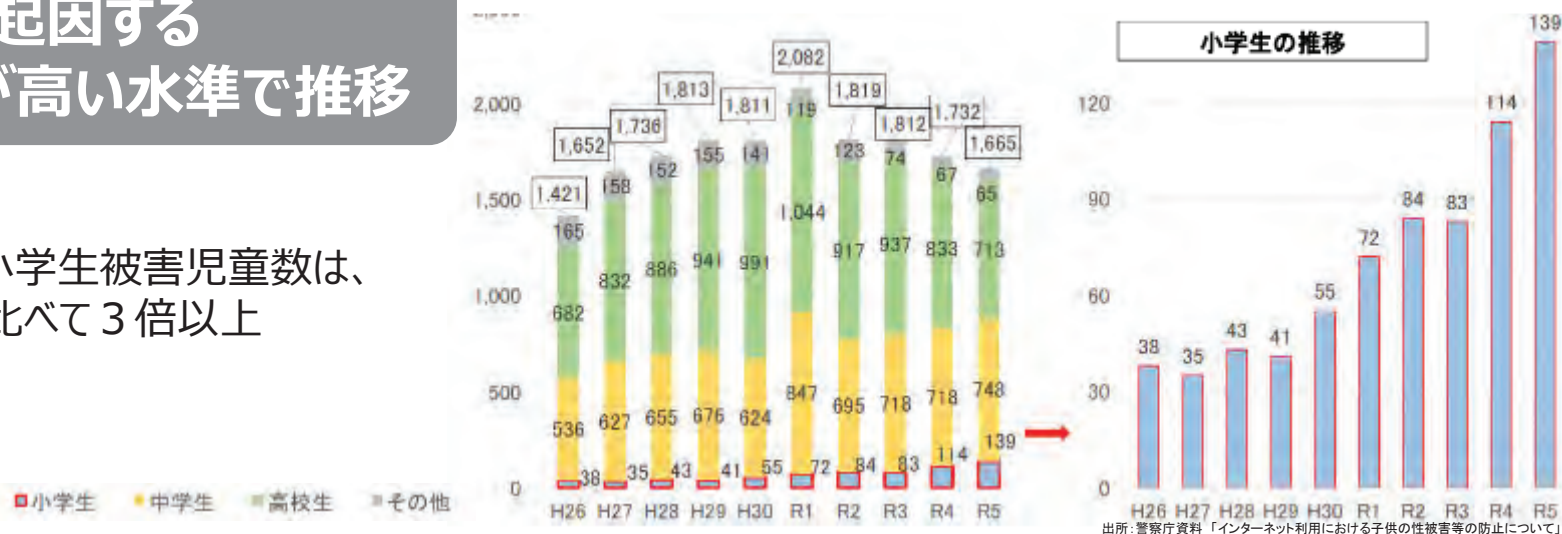


政府等が公表する公的な情報を確認する

(出典)総務省「国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究の請負成果報告書」(2024(令和6)年3月)

⑤ SNS等に起因する 児童の被害が高い水準で推移

✓令和5年の小学生被害児童数は、平成26年に比べて3倍以上

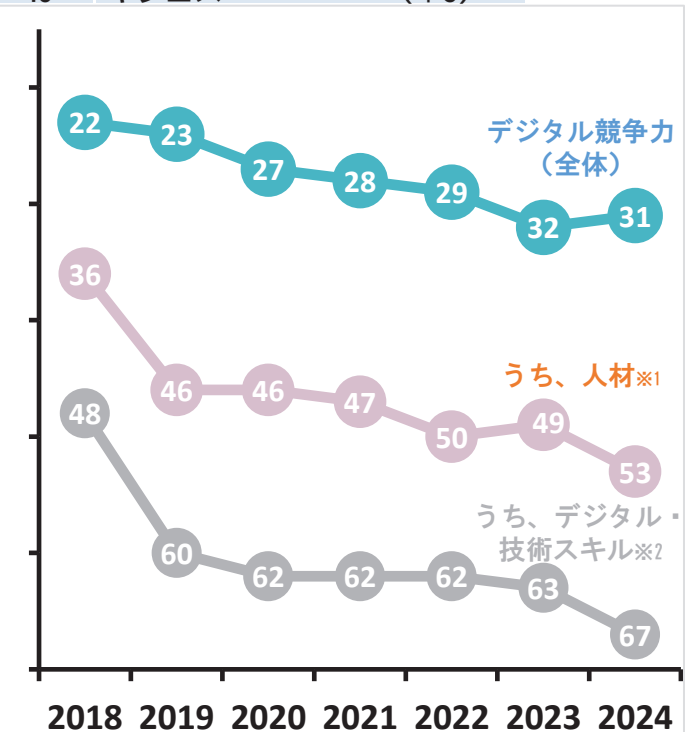


負の側面が生じる仕組みを理解し、適切に対応できる力が必要
情報技術をより適切に活用する力にも繋がる

デジタル競争力と人材育成

日本のデジタル競争力は31位。
人材のスコア、デジタルスキルのスコアが低い

順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	シンガポール (↑2)	23	ドイツ (0)	45	クウェート (↓4)
2	スイス (↑3)	24	エストニア (↓6)	46	クロアチア (↓2)
3	デンマーク (↑1)	25	オーストリア (↓3)	47	ルーマニア (↑1)
4	米国 (↓3)	26	カタール (↑3)	48	キプロス (↑3)
5	スウェーデン (↑2)	27	サウジアラビア (↑3)		
6	韓国 (0)	28	スペイン (↑3)		
7	香港 (↑3)	29	ルクセンブルク (↓3)		
8	オランダ (↓6)	30	バーレーン (↑8)		
9	台湾 (0)	31	日本 (↑1)		
10	ノルウェー (↑4)	32	チェコ共和国 (↓8)		
11	UAE (↑1)	33	ニュージーランド (↓8)		
12	フィンランド (↓4)	34	カザフスタン (0)		
13	カナダ (↓2)	35	ポルトガル (↑1)		
14	中国 (↑5)	36	マレーシア (↓3)		
15	オーストラリア (↑1)	37	タイ (↓2)		
16	イスラエル (↓3)	38	ラトビア (↑2)		
17	アイルランド (↑4)	39	ポーランド (0)		
18	英国 (↑2)	40	イタリア (↑3)		
19	アイスランド (↓2)	41	スロベニア (↓4)		
20	フランス (↑7)	42	チリ (0)		
21	ベルギー (↓6)	43	インドネシア (↑2)		
22	リトアニア (↑6)	44	プエルトリコ (0)		



括弧内は前年度との比較。(出所) IMD「World Digital Competitiveness Ranking」(2024)より作成。

(経年比較グラフの出所) <https://www.imd.org/centers/wcc/world-competitiveness-center/rankings/world-digital-competitiveness-ranking/>

デジタル競争力：知識（人材（デジタル・技術スキル含む））、テクノロジー、将来に向けた環境整備の3領域から構成され、計54の指標に基づき算出

※1 人材：PISAの数学的リテラシーの評価、シニアマネージャーの国際経験、外国人高度人材に対する魅力、デジタル・技術スキルの利用可能性、留学生の流動性（受入数と派遣数）等から算出されたデータを総合的に評価

※2 デジタル・技術スキル：自然科学分野の大卒者の割合、科学技術職雇用者の割合から算出されたデータを総合的に評価

デジタル人材育成関連施策の全体像(2025年時点)

小学校

中学校

高校

大学・高専

社会人

リテラシーレベル

応用基礎レベル

学習指導要領の改訂 & GIGAスクール構想

プログラミング教育の必修化
2020年度～

プログラミング教育等の充実
〔技術・家庭科（技術分野）〕
2021年度～

「情報Ⅰ」の必修化
2022年度～

目標：100万人/年^{※1}
（高校卒業者、小中学生全員）

「情報Ⅱ」の開設推進
2022年度～

DXハイスクール

「情報Ⅱ」等を開設する高校等を支援
R7年度採択校のうち、情報Ⅱ等^{※2}を
既開設：842校
開設予定：727校

デジタル課外活動の促進

プログラミング大会、ロボコン大会の拡充。デジタル課外活動への参加を促進

大学入学共通テスト「情報Ⅰ」追加2025年度

数理・データサイエンス・AI教育の推進等

認定制度の創設

①リテラシーレベル
認定校数493校（R6年度8月時点）

目標：50万人/年^{※1}
（高専・大学卒業者全員）

②応用基礎レベル
認定校数166校（R6年度8月時点）

目標：25万人/年^{※1}
（高専・大学生の50%）

➤ コンソーシアム活動を通じた普及・展開

約3,000億円の基金を創設
（2022年度補正予算）

成長分野（デジタル等）への学部転換等を強力に支援
学部再編等による特定成長分野への転換等：採択校数 126校（R5・6年度）
高度情報専門人材の確保に向けた機能強化：採択校数 89校（R5・6年度）

リ・スキリングによる能力向上支援

デジタル分野などの認定講座拡充

専門実践教育訓練等の受講に補助金を支出

デジタルスキル標準
生成AIの影響を踏まえた改訂を実施（R6年7月）

DX推進人材の量の確保状況について「大幅に不足している」と回答した企業の割合^{※3}
日本：49.6%
米国：3.3%

※3 出所「DX動向2024」独立行政法人情報処理推進機構

※1 AI戦略2019（令和元年6月：統合イノベーション戦略推進会議決定）における目標値

※2 「情報Ⅱ等」・情報Ⅱ
・数理・データサイエンス・AIの活用を前提とした実践的な学校設定教科・科目及び総合的な探究の時間
・情報Ⅱの内容を含むことにより指導内容を充実させた職業系の教科・科目

各公表資料等を参考に文部科学省作成

情報活用能力調査の結果（未だ十分とは言えない）

政府のKPI

小学校の**レベル3以下**の割合をR8年までに**20%以下**に
 中学校の**レベル5以下**の割合をR8年までに**20%以下**に

現状49.9%

現状57.1%

レベル9 【例】複数条件のもと、複数の検索・選択をして、主張の根拠を見つけることができる

レベル5 【例】目的に応じて、情報を図、表、グラフに示すことができる

レベル3 【例】複数条件で情報を選び、特徴で分類できる

レベル1 【例】簡単なグラフ・表から読み取り、比較できる

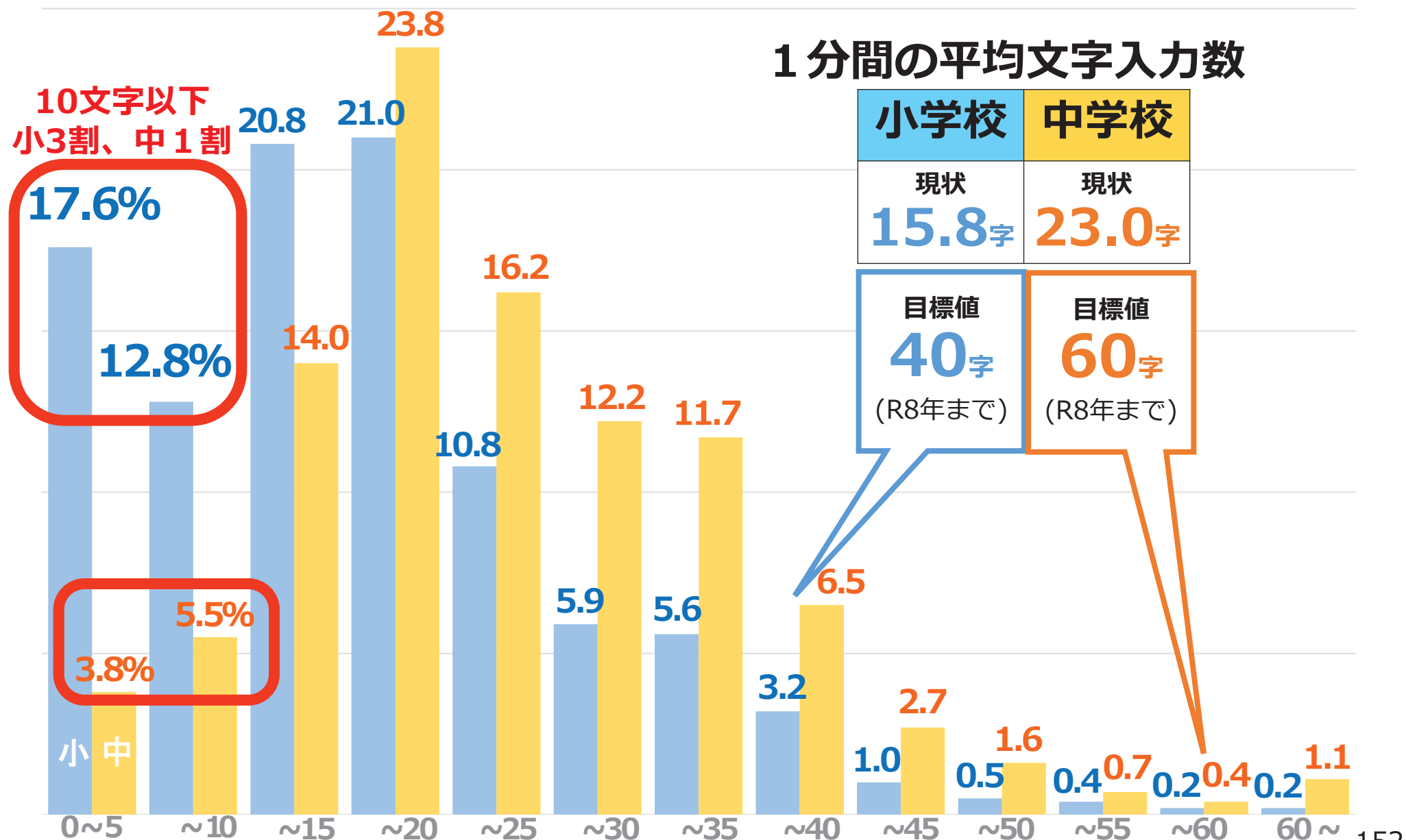
レベル	各レベルの児童生徒の割合		
レベル9 (669点以上～)	中	1.9%	
	小	0.1%	
レベル8 (622点～669点)	中	5.9%	
	小	0.4%	
レベル7 (572点～622点)	中	13.1%	
	小	1.8%	
レベル6 (524点～572点)	中	21.9%	
	小	6.4%	
レベル5 (480点～524点)	中	24.9%	
	小	15.6%	
レベル4 (417点～480点)	中	17.8%	
	小	25.8%	
レベル3 (381点～417点)	中	9.2%	
	小	23.6%	
レベル2 (329点～381点)	中	3.9%	
	小	15.9%	
レベル1 (～329点未満)	中	1.3%	
	小	10.4%	

【グラフの出所】令和3年度情報活用能力調査（文部科学省）結果より作成（（※）調査問題には、①基本的な端末操作等、②問題解決・探究における情報活用、③プログラミング、④情報モラル・セキュリティの観点が含まれている）。ここでは、問題・解決・探究に特に資すると思われる情報活用能力の側面を例示して記載。

【KPIの出所】「教育DXに係る当面のKPI（令和6年4月22日 デジタル行財政改革会議）」

情報技術を使う力が十分ではない (タイピング文字入力)

情活調査



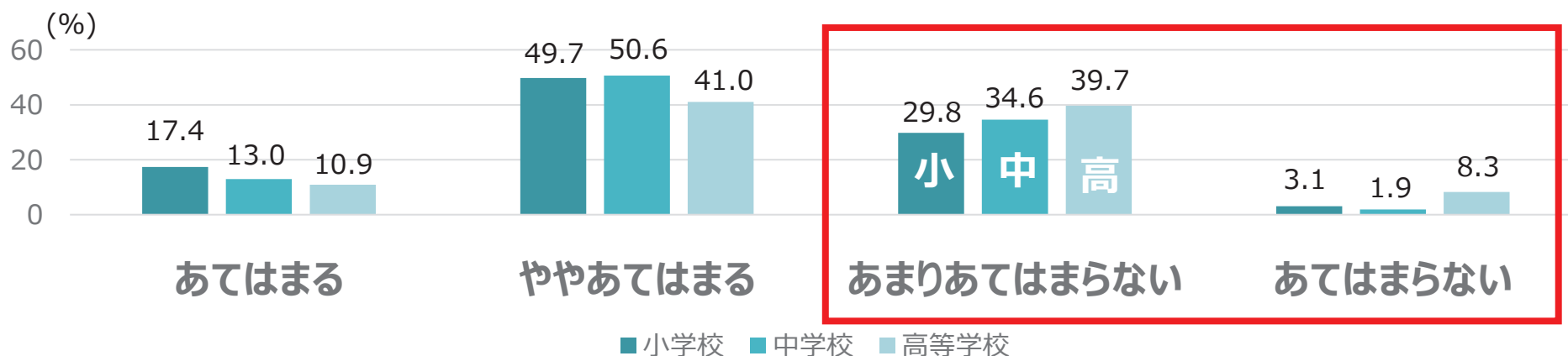
【グラフ出所】令和3年度情報活用能力調査（文部科学省）結果より作成。【目標値出所】「教育DXに係る当面のKPI（R6.4.22デジタル行政改革会議）」

3～4割の学校は 情報活用能力の系統性を意識していない

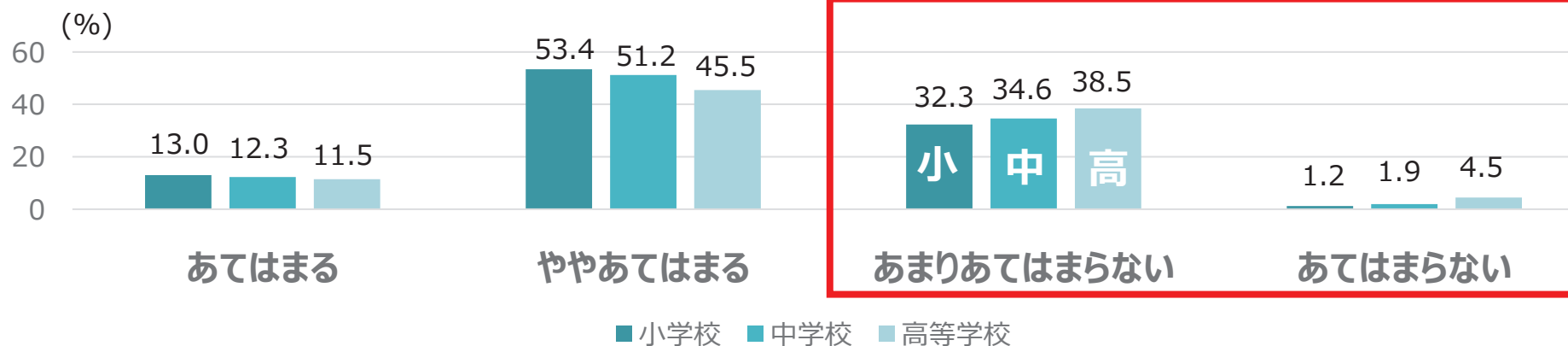
情活調査

【出所】令和3年度情報活用能力調査（文部科学省）結果より作成

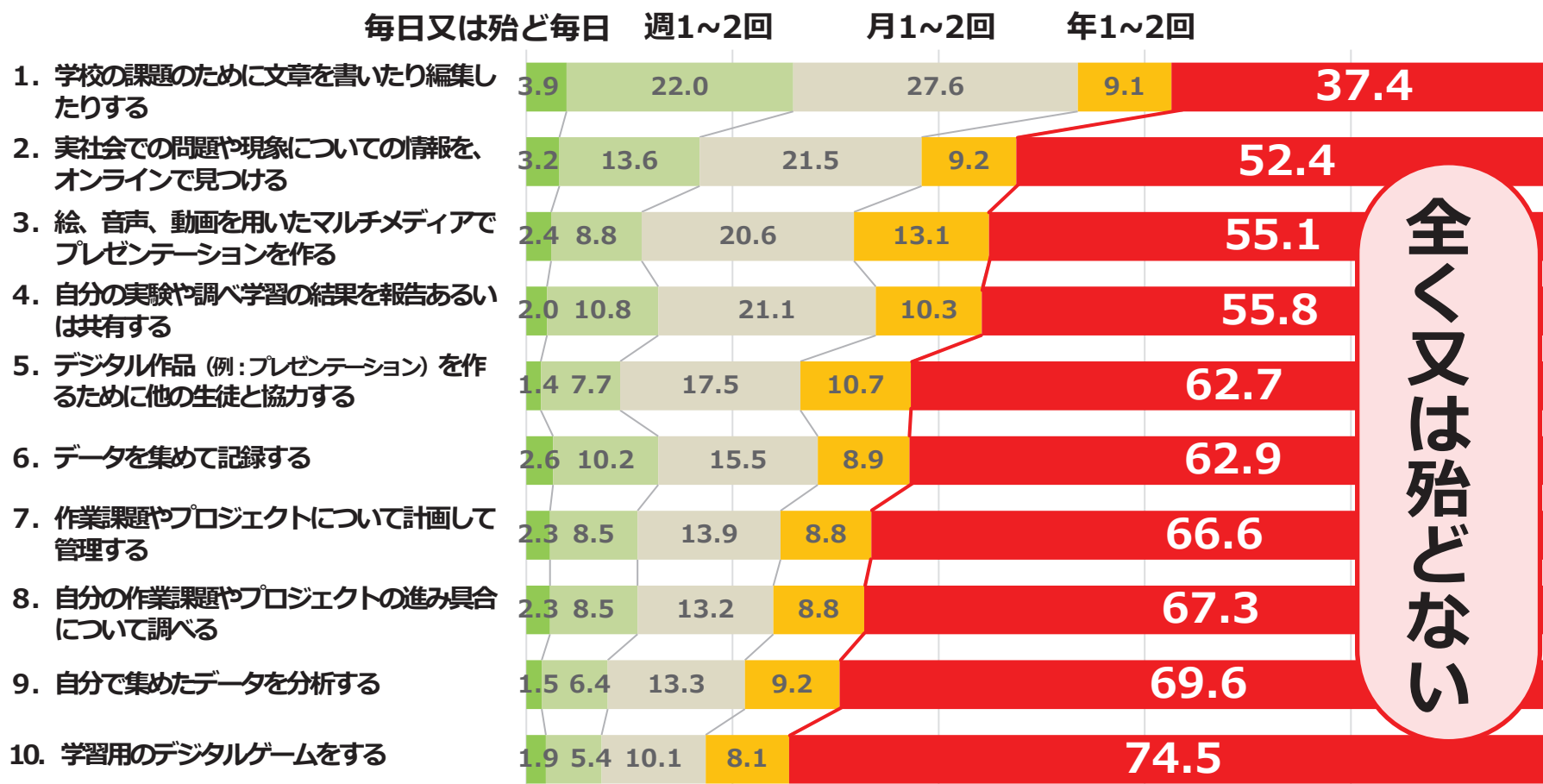
◆情報活用能力を教科等横断的・系統的な視点で育成する教育課程が編成されている。



◆教員は、情報活用能力の系統性（既習要素や、今後学ぶ要素との関連）を意識して授業を行っている。



ICTを用いた探究型の教育の頻度 OECD最下位



全く又は殆どない



上記10項目を指標化して比較すると…

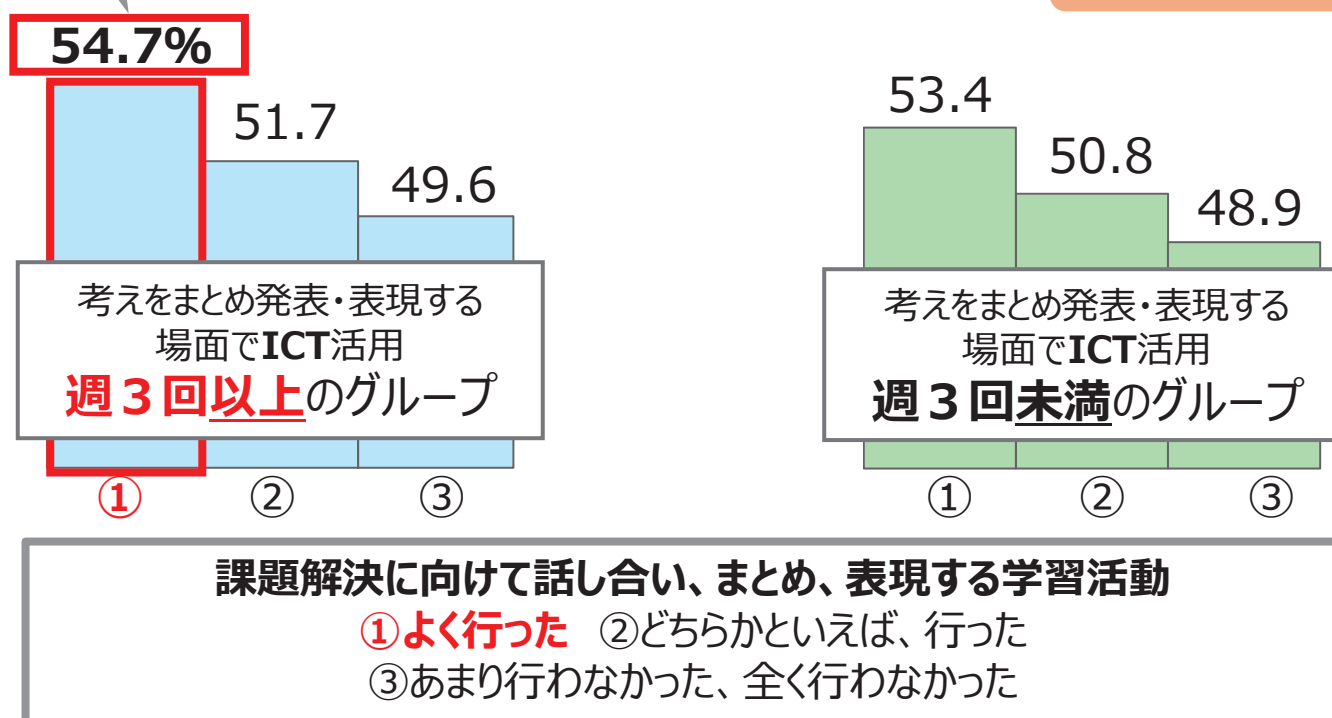
※ ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

OECD平均	0.01
日本 (29/29位)	-0.82

- 課題解決に向けて話し合い、まとめ、表現する学習活動
- 考えをまとめ、発表・表現する場面でICTを活用すること

➡ 両方取り組んだ学校は各教科の正答率が高い

R6学調（中・数学）

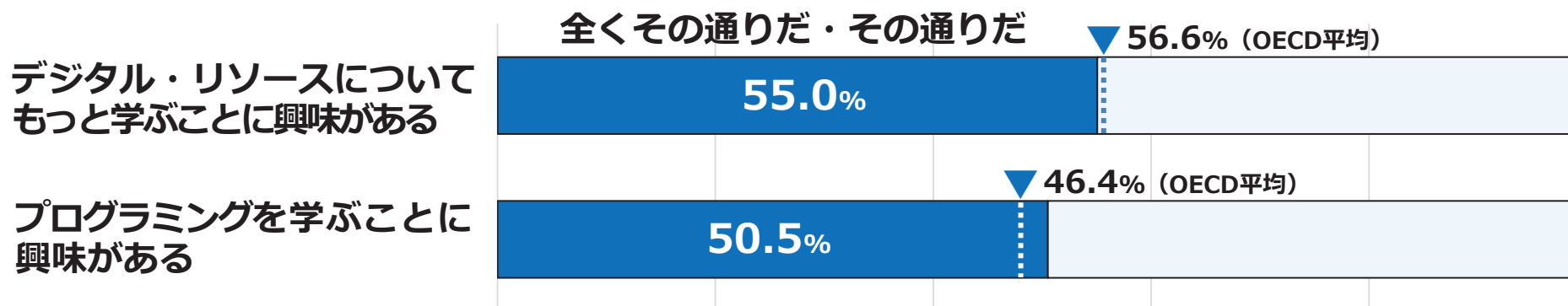


探究的な学習の過程において情報技術を活用することは一定の効果がある
 しかし、活用頻度は国際的に見るとかなり少ない

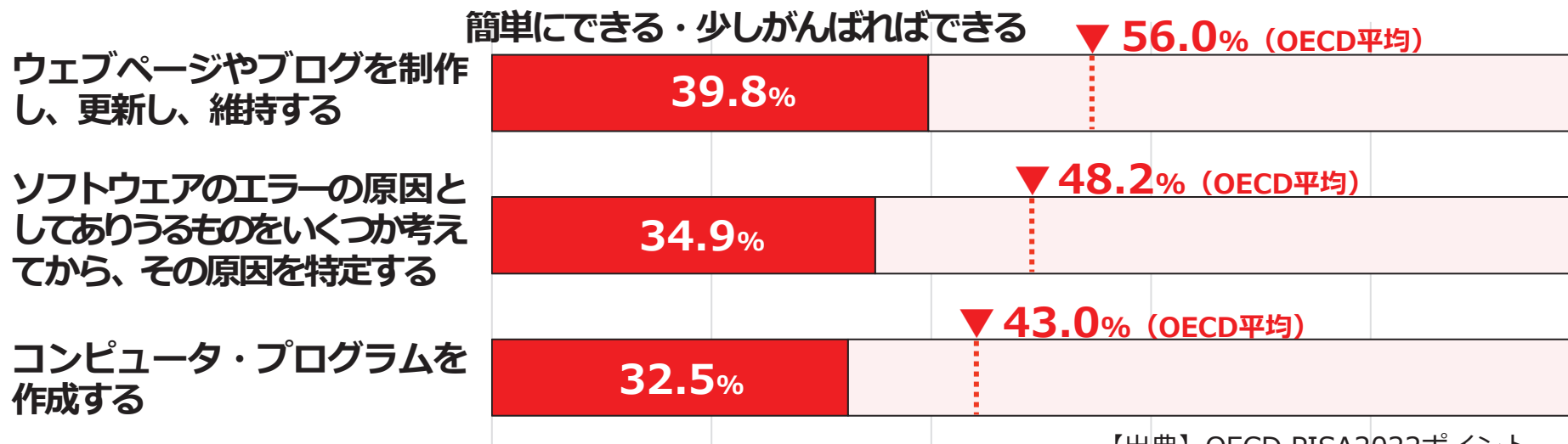
コンピュータやプログラミングへの興味・関心は OECD平均並みだが、自己効力感が低い

PISA2022

コンピュータ・プログラミングへの興味・関心



デジタル・コンピテンシーに対する自己効力感



3. 情報教育の国際比較

情報教育の国際比較（小学校）

内容 国名 教科等名	日本	アメリカ (ミシシッピ州)	イギリス	オーストラリア	韓国	台湾
	(情報教育を専ら行う 教科等はない)	Computer Science	Computing	Digital Technologies	情報	資訊科技
情報技術の活用	△	○	◎	○	○	○
情報技術の適切な取 り扱い（情報モラル、 メディアリテラシー、セ キュリティ等）	△	○	◎	◎	○	○
情報技術の特性の 理解（プログラミング コンピュータやネット ワークの仕組み等）	△	◎	◎	◎	○	△
備考 (指導時数など)	各教科等の特性 に応じた学習活 動を通して育成	週1時間（年間 36時間）を指導	週1時間程度とい う調査結果	週1～2時数程 度（州ごとに決 定）	実科の一部として 5、6年生で34 時数以上指導	「資訊科技」単体で の時間はないが、定 められた内容を、各 教科等の学習を通じ て指導

※日本産業技術教育学会、諸外国の技術教育・情報教育 at a glance (2025.3.31) 等を参考に、以下の観点から文部科学省で作成

◎：必修科目として明確に位置づけられ、体系的・重点的に扱われている

○：必修科目または関連科目の中で、一定程度の学習が行われている

△：関連科目の中で触れられている、または一部の学校で扱われている可能性がある

×：資料からは明確に読み取れない、またはほとんど扱われていない

情報教育の国際比較（中学校）

国名 教科等名		日本	アメリカ (ミシシッピ州)	イギリス	オーストラリア	韓国	台湾
内容		技術・家庭 (技術分野)	Computer Science	Computing	Digital Technologies	情報	資訊科技
情報技術の活用		△	○	◎	○	○	○
情報技術の適切な 取り扱い（情報モラル、 メディアリテラシー、セ キュリティ等）		○	○	◎	◎	◎	◎
情報 技術 の 特 性 の 理 解	コンピュータや ネットワーク の仕組み	○	○	○	○	◎	◎
	プログラミング	○	○	◎	◎	◎	◎
	データ活用	△	○	○	◎	○	◎
備考 (指導時数など)		3年間で約22.9 時数指導	3教科より1つ以上 を履修。高校卒業単 位として前倒し取得 する場合、年間140 時間で指導	週45分程度とい う調査結果	週1～2時数程 度（州ごとに決 定）	3年間で68時数 以上指導	生活科技と合わ せ週2時数、その うち半分の時数 で指導

※日本産業技術教育学会、諸外国の技術教育・情報教育 at a glance (2025.3.31) 等を参考に、以下の観点から文部科学省で作成

◎：必修科目として明確に位置づけられ、体系的・重点的に扱われている

○：必修科目または関連科目の中で、一定程度の学習が行われている

△：関連科目の中で触れられている、または一部の学校で扱われている可能性がある

×：資料からは明確に読み取れない、またはほとんど扱われていない



●研究の経緯

小学校での情報活用能力の育成には、発達段階に応じた指導内容が不明瞭である、急速にデジタル技術が進展する社会に対応するための内容が不十分である、といった課題があると考え。そこで、情報技術や情報社会に注目して内容を編成した**新教科「小学校情報科」**を設定し、その学びの充実を図る教育課程の開発を試みた。

●「小学校情報科」の目標と内容

【目標】情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報や情報技術などを用いて問題の発見・解決などを行う実践的・体験的な活動を通して、情報を科学的に理解し、よりよく活用したり情報社会に参画したりするための資質・能力の基礎を育成することを目指す。

【内容】

「小学校情報科」内容領域		領域ごとの指導事項（令和6年8月版）
A コンピュータを活用した問題解決	端末を活用した情報の収集・整理・分析の方法やプログラミングによる問題解決について取り扱う。	・課題や目的に応じた情報手段の適切な活用 ・データの種類、構造や特性 ・自分の意図したことをコンピュータで実現するために手順の分解や表現・構造化をすること ・目的や条件に応じた最適な手順の組み合わせ ・センサを用いた簡単な計測と制御 ・目的に応じた適切なメディアの変換・編集・選択 ・情報を伝える上で、分かりやすく効率よく伝えるための理論とその方法 等
B 情報技術の仕組み	情報技術についての基礎的な仕組みについて取り扱う。	・入出力装置などのハードウェアと、アプリケーションやOSなどのソフトウェアが一体となってコンピュータが構成されていること ・コンピュータは相互に接続されデータを送受信することにより、単体で使うよりも大きな力を発揮すること ・通信の安全を実現するセキュリティ技術の存在とその考え方 等 ・アナログとデジタルの概念
C 情報社会とのかかわり	情報社会を構成する一員としての行動とその影響について取り扱う。	・生活や社会におけるコンピュータ適用の有効性や可能性、そのメリットとデメリット、リスク ・持続可能な情報社会のあり方 等

学習の基盤としての寄与が大きい領域

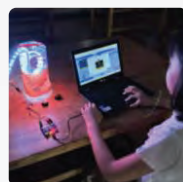
教科ならではの学びが色濃く表れる領域

情報や情報技術についての科学的な理解を積み重ねるカリキュラム

「B 情報技術の仕組み」を通して科学的な理解を積み重ねることで

- 実現したい問題解決が多様化・高度化し、それを支えるプログラムを構築しようとする
- コンピュータ活用による問題解決意欲や、情報社会における責任ある態度が向上する

「小学校情報科」の単元例



6年「AIって何だろう」
画像認識AIによるプログラミングや、生成AIの体験を通じて、AIの仕組みや特徴を理解する

5年「インタラクティブアート」
音や動きに反応して光るアート作品の制作を通して、センサの特性やプログラムとの関係を学ぶ

4年「よりよく動かそう」
ロボットを使ったコンテストを通して、ハードウェアとソフトウェアに着目し問題解決に向かう

2年「どうつながっているのかな」
インターネットにつながりやすい場所を調べたり、クラウドで遊んだりしてコンピュータ同士のつながりに体験的に気付く

1年「えをうごかそう」
プログラミングの基本要素（順次・反復）や、コンピュータの特性（自動性・正確性・高速性）を実践的に学ぶ

情報や情報技術についての科学的な理解の積み重ね

低学年
遊ぶ・気付く

中学年
使う・捉える

高学年
生かす・理解する

実践的・体験的な活動を通して知識・技能や概念を獲得できるよう
探究的な単元構成を展開

育成された デジタル化社会で生きる資質・能力の例

- ・ 作品や情報の権利を尊重しようとする
- ・ コンピュータやプログラムを、問題解決に生かそうとする
- ・ 身の回りの情報技術へ適用して考える
- ・ プログラムやコンピュータの働きを人と比較して捉える

「小学校情報科」の学びに関する児童の声

- プログラムやコンピュータの働きに関するもの
「プログラミングでは命令した通りにミスなく動く」
「人間ができない速さで何回も繰り返せる」
- 情報技術の仕組みと自身の行動を結び付けたもの
「インターネットは、いろいろな場所や人とつながっているからこそ、どのように行動すればよいか分かった」
「ロボットが思い通りに動かなかったときにどこが悪いのかということを調べて改良する力が大切」
- 身の回りのコンピュータへの視点の広がりを自覚したもの
「身の回りのもの（自動ドアなど）を見て、どのような仕組みなのかを考えるようになった」

情報や情報技術についての科学的な理解を積み重ねる効果と探究的な学びの充実

「B 情報技術の仕組み」を学ぶことで、

- ① A コンピュータを活用した問題解決や、C 情報社会とのかかわりについての学びが充実
- ② 探究のプロセスを個別・協働でスムーズに回したり、質を向上させたりすることにつながる

育成された 教科を問わず探究的な学びを支える基盤となる資質・能力

- ・ 目的に応じてコンピュータの活用を検討し、調査方法や表現を柔軟に選択する
- ・ 効率的に情報を収集し、再構成したり相手に応じて伝え方を工夫したりする
- ・ 情報セキュリティの必要性を自覚し、自他の安全を守ろうとする
- ・ 相互参照しながら学びを確かめたり、履歴を残したりしながら学習を調整する

内容領域Bを学んだことで
発揮された子供の姿の例

問題を解決できるよう、ハードウェアとソフトウェア（プログラム）の両面について工夫・改善を行った

6年「卒業制作」
これまでの学びを生かして、身近な問題解決を行う

センサの特性やAIの特徴を基に方法を選択したり、センサに関する閾値やAIのモデルを調整しながら問題解決に取り組んだ

つながったコンピュータの中にない情報は検索できないことや、同じ文字を見つけて素早く情報を取り出せることを捉えた

4年「検索の仕組み」
検索の方法やウェブサイトの読み方に加え、インターネット上の情報の特性等を学ぶ

3年「アカウントって何だろう」
アカウントの取り扱いやクラウド上での操作を体験し、その仕組みを理解した上での安全な取扱いを考える

クラウドやサーバに関する体験的な気付きを想起しながら、アカウントとクラウドのつながりや、アカウントを守る必要性を捉えた

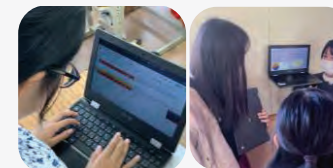
3年「学習ゲームで遊ぼう」
高学年が作った学習ゲームで遊び、コンテンツの制作者の存在を捉えて著作権について考えたり、建設的なフィードバックを行う社会的な価値を考える

5年「考えようスクリーンタイム」
自身のICT機器の使い方や使用時間を可視化しながら、健康との関連を理解してよりよい付き合い方を考える

「使い続けたい仕組み」プログラムの働きによって実現されていることを理解し、自分の経験と関連付けて考えた

生成AIの回答に対して、AIがモデルを基に判断していることを想起し、検索との使い分けや、生成内容を確認するの必要性を理解した

6年「AIってなんだろう」
生成AIの仕組みや特徴を探りながら、新しいテクノロジーとどのように関わっていくかを考える



「小学校情報科」の学びの積み重ね

(主にA領域)
(主にC領域)

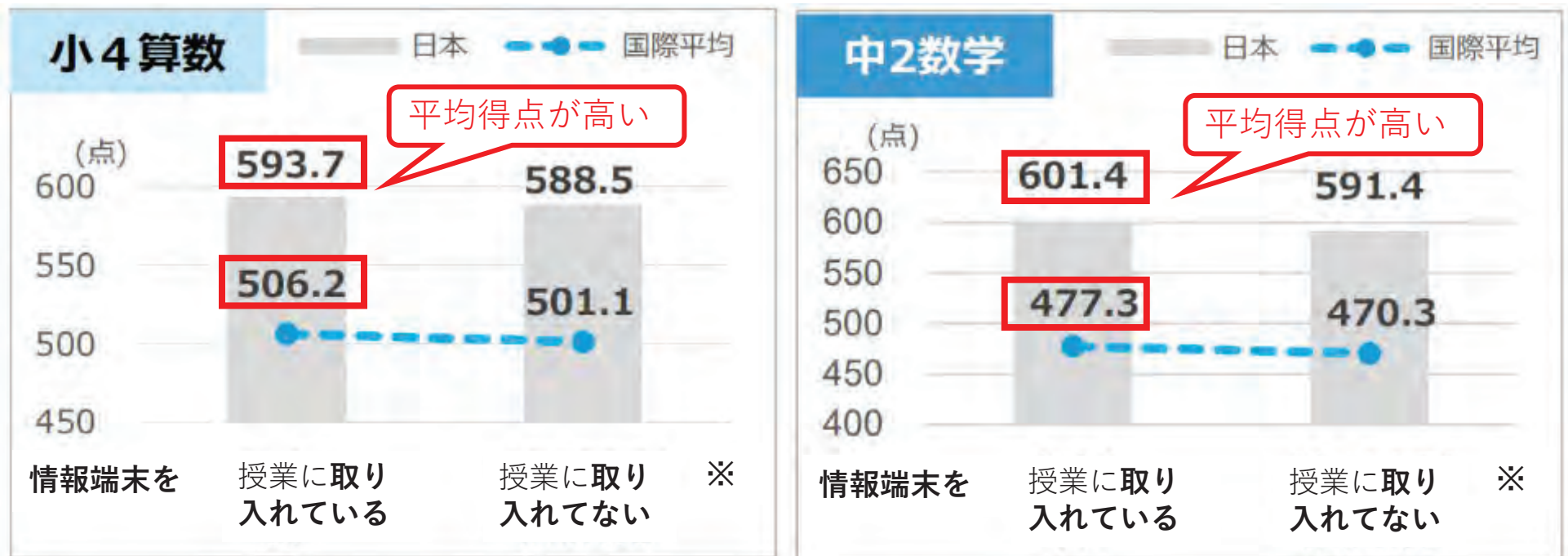
今後の研究の方向性

- ・ 「小学校情報科」の指導事項を精査し、各教科等とのつながりを整理
- ・ 中学校との円滑で効果的な接続について検討

教育におけるICT活用の効果（1／2）

情報端末を取り入れた授業を受けている子供ほど平均得点が高い

TIMSS2022



※本資料では、質問・回答項目を意識的な表現に変更している。

実際の質問・回答項目は以下のとおり。

質問「情報端末を児童生徒の学習改善に使う方法が分からないため、情報端末を授業に取り入れられないでいる」

回答「まったくない」（上記では「授業に取り入れている」に変更）

「まあまあある」／「非常にある」（上記では「授業に取り入れていない」に変更）

教育におけるICT活用の効果（2／2）

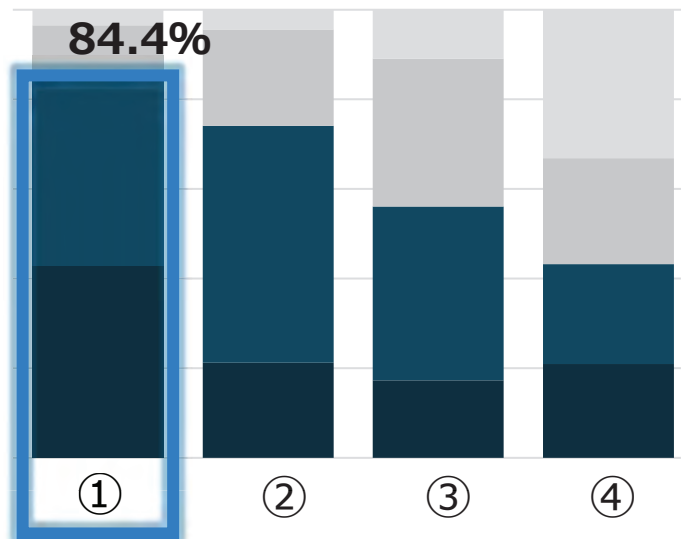
ICTは考えを共有・比較しやすいと思う子供ほど自分と違う意見を考えることは楽しいと回答

R6学調

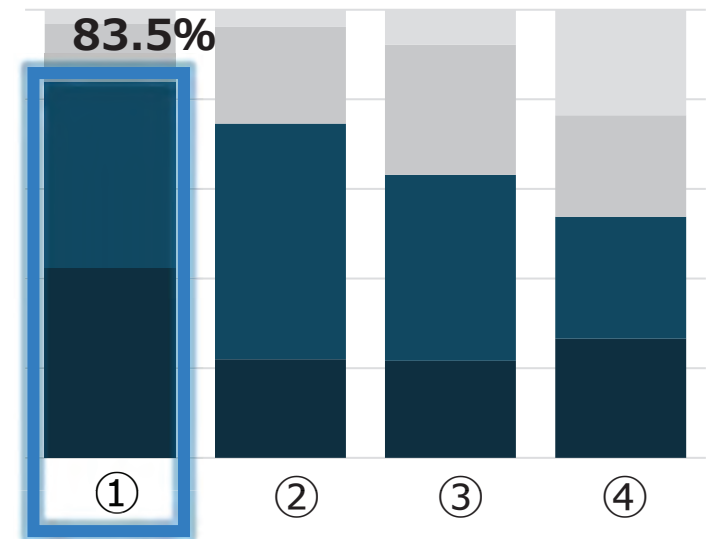
自分と違う意見
について考える
のは楽しいと思
いますか

- 当てはまる
- どちらかといえば、
当てはまる
- どちらかといえば、
当てはまらない
- 当てはまらない

小学校



中学校



ICT機器を活用することで、友達と考えを共有したり比べたり
しやすくなると思いますか。

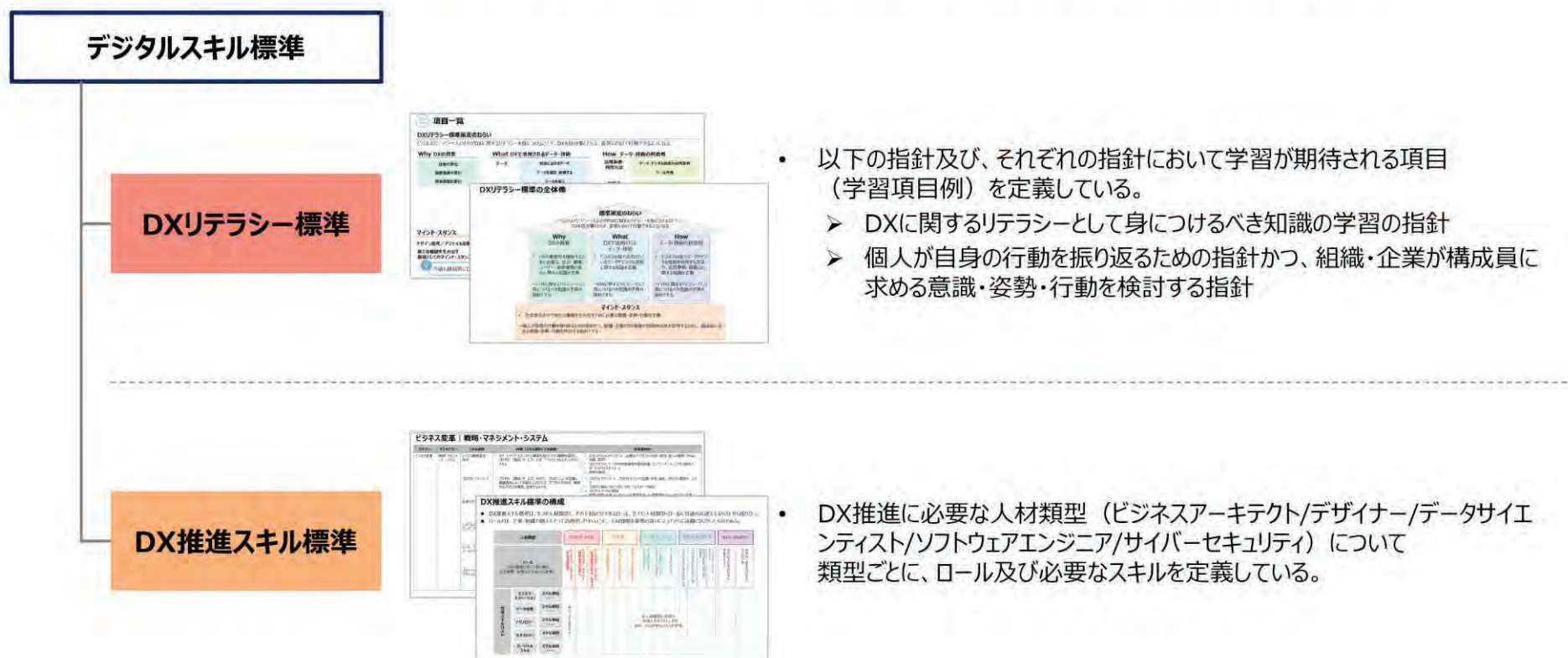
- ① とてもそう思う ② そう思う ③ あまりそう思わない ④ そう思わない

「デジタルスキル標準」について

- DXの素養や専門性を持った人材の不足を踏まえ、経済産業省が主催する「デジタル時代の人材政策に関する検討会」において、令和4年12月に、個人の学習や企業の人材確保・育成の指針である「デジタルスキル標準（DSS）」ver.1.0を取りまとめ、同省が随時更新を行っている（最新はver.1.2（令和6年7月））。

デジタルスキル標準の構成

- デジタルスキル標準は「DXリテラシー標準」と「DX推進スキル標準」の2つの標準で構成され、前者はすべてのビジネスパーソンに向けた指針及びそれに応じた学習項目例を定義し、後者はDXを推進する人材の役割（ロール）及び必要なスキルを定義している。



出典：「デジタルスキル標準 ver.1.2 <改定後概要版>」

諸外国の義務教育段階における情報教育に関する主な教育内容（1／3）

		オーストラリア	英国（イングランド）	フィンランド	フランス
カリキュラム名		Digital Technologies	Computing	A.Mathmatics、B.Craft、C.ICT competence (L5)	A.Mathematics、B.Science and Technology、C.Technology
主な教育内容	Y11以上	- 義務教育はY10まで - Digital Technologies (Y9-10)は選択科目	- コンピュータサイエンスとデジタルメディア - 分析・問題解決・計算的思考 - テクノロジーと安全性	6歳から18歳までが義務教育	6歳から16歳までが義務教育 - リセ（高校）ではDigital Sciences and Technology、Mathematics、Digital and Computer Science等のカリキュラムに含まれる。
	Y10				
	Y9				
	Y8	- ネットワークとデータセキュリティ - バイナリによるデータ表現 - データ分析と視覚化 - アルゴリズムの設計と検証 - プロジェクト管理とオンライン協働	- 計算抽象化の設計・使用・評価 - アルゴリズムと計算論的思考 - モジュール型プログラムの設計と開発、データ構造活用 - ブール論理とバイナリ計算 - ハードウェアとソフトウェアの要素 - デジタル成果物の制作、修正 - 安全で責任ある技術利用	- A.問題解決のためのアルゴリズム的思考の習得 - B.組み込みシステムを活用し製品設計や製造にプログラミングを応用 - C.ICTの社会での役割と、持続可能な社会におけるインパクト - C.デジタルコンテンツ制作 - C.情報セキュリティと倫理	- A.データ収集、管理、視覚化 - A.アルゴリズムとプログラミング、変数、イベント、順序、ループ等 - A.プログラムの実行、デバッグ - C.ネットワークと通信プロトコル - C.組み込みシステムと制御プログラム - C.センサーと信号処理
	Y7				
	Y6	- デジタルシステムとネットワーク - データの視覚化と活用 - ユーザーインターフェースの設計 - 順序、分岐、反復を含むアルゴリズムの設計、修正、実行	- プログラムの設計、作成、デバッグ、問題分解と解決 - 順序、条件分岐、繰り返し - 変数と入出力 - 論理的推論とアルゴリズムのエラー修正 - コンピュータネットワークとインターネット - 検索技術の活用 - デジタル機器でソフトウェア活用 - 情報モラルと責任ある技術利用	- A.ビジュアルプログラミング - A.問題解決のためのアルゴリズム的思考の習得 - A.データの収集、整理、視覚化 - B.ロボティクスや自動化のプログラムされた行動の実践 - C.ICTの様々な教科や学習活動での活用 - C.複数の情報源の検索と検索結果の批判的評価 - C.マルチメディアコンテンツ制作	- A.データの整理、管理、視覚化 - A.ロボットや画面上のキャラクターの動きをプログラム - B.データストレージ、アルゴリズムの概念、プログラム可能なオブジェクト - B.ネットワークとデジタルツールの活用
	Y5				
	Y4	- デジタルシステムと周辺機器 - データの多様な表現 - アルゴリズムと問題解決 - ビジュアルプログラミングと分岐 - 倫理的・社会的プロトコルの適用	- プログラムの設計、作成、デバッグ - 論理的推論 - デジタルコンテンツの作成、整理、保存、操作、取り出し - 情報モラル	- A.アルゴリズム思考の育成と問題解決へのプログラミングの適用 - A.データの収集、視覚化と解釈 - C.ICTスキルの学習と実践 - C.情報検索と創造的な活用 - C.安全なICT利用と健康管理	- A.データの整理、管理、視覚化 - A.ロボットや画面上のキャラクターの動きをプログラム
	Y3				
	Y2	- デジタルシステムの構成（ハードウェアとソフトウェア構成） - データの収集・探索・整理、デジタルシステムを用いた創造的提示 - アルゴリズムの作成と実行 - 安全な情報システムの活用			
	Y1				

※斜線は義務教育でない場合、または義務教育であっても情報教育に関する内容が含まれているカリキュラムがない場合や必修ではない場合。

※複数カリキュラムで横断的に情報教育に関する内容が含まれる場合は、A、Bなどを付し、カリキュラムとその教育内容の対応がつくようにした。

（麗澤大学・小田理代氏作成資料）

諸外国の義務教育段階における情報教育に関する主な教育内容（2／3）

		香港	韓国	ニュージーランド	ポーランド
カリキュラム名		A. Technology(General Studies)、B.Technology	A.実科、B.情報科	Technology	Information
主な教育内容	Y11以上	- 初等・中等教育の12年間で義務教育 - 高校はTechnologyが5つの選択科目となる。	6歳から15歳までが義務教育 - 高校の情報科は選択科目	6歳から16歳までが義務教育	・アルゴリズムを応用した問題解決 ・プログラムにより問題解決(入出力、算術、論理式、条件、反復、関数、変数、配列) ・ネットワークの構造と通信モデル ・情報モラルと法的遵守（ネット倫理、著作権） ・ウェブサイトの設計・制作（HTML、CSS、動的要素）
	Y10			・比較演算子や論理演算子、変数を使用した入出力、順序、選択、反復を含むプログラム開発 ・プログラムの文章化 ・HCI ヒューリスティクスを考慮したプログラム開発	
	Y9	B.デジタル署名やデータセキュリティなどのITの利用に関する問題	B. 論理的問題解決でのアルゴリズムの重要性、アルゴリズムの設計 B.プログラミング言語の特性と開発環境の理解	・問題の分解とアルゴリズムの設計 ・論理的思考を用いてプログラムの挙動を予測 ・プログラミングとデバッグ（入出力・順次・反復） ・データの二進数表現（ビット）	・アルゴリズムによる問題解決 ・プログラムの設計、作成、テスト(入出力、算術、論理式、条件、反復、関数、変数、配列) ・ドキュメント/プレゼンテーション作成 ・情報倫理とセキュリティ
	Y8	B.情報技術が日常生活に及ぼす影響	B. 様々な形式のデータを入力、処理、出力するプログラム制作 B. コンピュータシステムの構成と相互関係		
	Y7	B.情報処理および情報処理ツール	B. センサーを活用した処理/制御	・アルゴリズムの作成とデバッグ ・シーケンスを含むプログラム作成 ・エンドユーザを意識した設計 ・デジタルコンテンツの作成・管理・共有(Y5-8) ・デジタルデバイスの社会への影響(Y5-8) ・人が果たす制御の役割(Y5-8)	・日常生活の問題解決のためにアルゴリズムを設計、記述 ・ビジュアルプログラミング言語の設計、作成、記述 ・基本アプリケーションの活用（文書、表計算、プレゼンテーション） ・データプライバシーと知的財産権の尊重
	Y6	A.科学技術の応用における安全対策を認識 A.情報技術の健康的、安全、適切な使用の重要性を理解 A. メディアとソーシャルメディアの影響の認識	A. 手続き的思考による問題解決 A.プログラミングツールの活用 A. サイバー依存防止と個人情報保護の理解		
	Y5	A. メディアとソーシャルメディアの影響の認識	A.センサーを搭載したロボット制作		
	Y4	A.知的財産権の尊重とプライバシー保護			
	Y3	A.日常生活の問題解決に科学技術が活用されていることを認識 A.情報を入手し、保管し、仕分けることの重要性の理解 A.情報技術の安全な利用の認識 A.知的財産権の認識		・アルゴリズム的思考 ・簡単なデバッグ ・デジタルコンテンツの開発、操作、保存、取得、共有（Y1-4） ・デジタルデバイスとその用途の認識（Y1-4） ・デジタルデバイスがコンテンツを保存し、後で取り出すこと（Y1-4）	・問題解決によるアルゴリズム発見 ・単一コマンドや順序が含まれるビジュアルプログラミング ・コンピュータとデジタル機器の操作とソフトウェアの関係 ・インターネットにおける適切な行動と情報モラル ・インターネットセキュリティと著作権
	Y2	A. ITを活用したコミュニケーションへの関心の醸成			
Y1					

※斜線は義務教育でない場合、または義務教育であっても情報教育に関する内容が含まれているカリキュラムがない場合や必修ではない場合。
 ※複数カリキュラムで横断的に情報教育に関する内容が含まれる場合は、A、Bなどを付し、カリキュラムとその教育内容の対応がつくようにした。

（麗澤大学・小田理代氏作成資料）

諸外国の義務教育段階における情報教育に関する主な教育内容（3／3）

		ポルトガル	スウェーデン
カリキュラム名		ICT（1から4年まではクロスカリキュラム）	A.Mathmatics、 B.Technology、C.Civics
主な教育内容	Y11以上	6歳から18歳までが義務教育 12年生のComputer Applications Bは選択科目	義務教育はY9まで
	Y10		
	Y9	- 新興技術の社会的影響（VR、AR、AI） - モバイルデバイスの安全な利用	A. 異なるプログラミング環境でのプログラミング A. 数学的問題解決のためのプログラミングにおいて、アルゴリズムを作成、テスト、改善する方法 C.情報モラルと倫理的、法的責任 C.メディアの役割
	Y8	- デジタルアプリとインターネットの安全な利用 - デジタルコンテンツのアクセシビリティ	B. 通信・情報技術ソリューション B. システムの制御と調整のための技術的ソリューション
	Y7	- オペレーティングシステムとセキュリティの理解 - 著作権の遵守(画像、音、動画)	
	Y6	- プログラミング環境を活用してロボットとやりとりする - 情報モラルと責任ある情報利用	A.二進数とデジタル技術への応用 A.アルゴリズムの作成とビジュアルプログラミング C.情報の評価と出所の確認（批判的思考） C. 情報モラルと法的責任
	Y5	- ICTの社会的と日常生活の影響 - アルゴリズムの理解と作成	B. コンピュータの構成要素 B. プログラミングによる制御
	Y4	- 情報モラルとメディアリテラシー - デジタル機器の安全な利用 - オンライン調査と情報検索スキル	A. ステップバイステップの指示を作成、記述、実行 B. コンピュータの構成要素（入力、出力、記憶装置） B. プログラミングによる制御 B. テクノロジーを利用する際の安全性（電気の扱い、インターネット上の各種サービス）
	Y3	- 収集した情報の評価と検証 - コラボレーションが可能なメディアやアプリケーションの特定	
	Y2	問題解決のための簡単なアルゴリズム作成	
	Y1	問題解決のための具体的な物体のプログラミング	

※斜線は義務教育でない場合、または義務教育であっても情報教育に関する内容が含まれているカリキュラムがない場合や必修ではない場合。
 ※複数カリキュラムで横断的に情報教育に関する内容が含まれる場合は、A、Bなどを付し、カリキュラムとその教育内容の対応がつくようにした。

（麗澤大学・小田理代氏作成資料）

中学校技術・家庭科（技術分野）の指導体制の一層の充実について

令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度	令和12年度	令和13年度
2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031

実態調査
令和4年3月

61/61
自治体が策定

自治体別公表
▲改善プラン策定

指導体制改善計画



中学校技術・家庭科（技術分野）

指導体制

令和5年
省令改正

「技術」に関する教科
専門の科目区分
6科目→4科目

免許法認定講習等の推進
技術科免許取得可能大学の増加促進

周知

複数校指導の手引き (R3.3~)
https://www.mext.go.jp/content/2022_0324-mxt_kouhou02-000021514_1.pdf

複数校指導の在り方を検討・推進し指導の充実

遠隔教育特例校制度の活用

制度改正（文部科学大臣による指定を廃止）後の「教科・科目充実型」の遠隔授業の推進

コンテンツ

中学校技術分野 D情報の技術 プログラミング実践動画 アーカイブ配信



NHK for School への協力

プログラミング教育ポータルサイト (R2.12~)

プログラミング教育ポータル 更新・再整理



https://www.mext.go.jp/miraino_manabi/

全国教員研修プラットフォーム (R6.4~)

情報教育・プログラミング教育に関するオンライン研修動画 アーカイブ配信

周知

次世代の教育情報化推進事業 (R2.3~)

プログラミング教育実践事例集



https://www.mext.go.jp/content/20200403-mxt_jogai01-000006333_001.pdf

周知

技術分野研修用教材 (R3.3~)

技術分野「D 情報の技術」研修用教材



https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00617.html

研修

小・中プログラミング実践研修会（オンライン） アーカイブ配信

【文科省後援】全国選抜小学生プログラミング大会
【文科省共催】全国中学生創造ものづくり教育フェアプログラミングコンテスト
【文科省共催】全国中学生創造ものづくり教育フェアロボットコンテスト

プログラミングに関連するコンテストの文部科学省後援・共催の推進



情報処理学会教員研修 都道府県教委に参加を推奨

オンデマンド開催

文部科学省主催集中研修（R7夏季）技術担当教員、プログラミング担当教員、情報教育担当者 アーカイブ配信



産業・情報技術等指導者養成事業

指導主事、中学校等（特別支援学校の高等部、中等部を含む）で産業教育を担当する教諭
※受講費用自己負担

<https://www.nits.go.jp/training/003/001.html>

高等学校情報科の専門性・指導力向上の取組について

(R7.4.22 現在)

令和2～3年度

令和4年度

令和5年度

令和6年度

情報処理学会 MOOC 教材の無料公開 R2.7～ ※文部科学省作成協力・広報支援

文部科学省作成 「情報Ⅰ」 H31.3～ 「情報Ⅱ」教員研修用教材 R2.3～



文部科学省作成 「情報」実践事例集



情報科特設ページ

随時情報更新

- ★情報Ⅰ等 実践事例追加(R7.3)
- ★情報Ⅰ・Ⅱ 事例資料・紹介動画等追加

高校 情報科 検索

情報処理学会
教員研修(R4)

オンデマンド開催

情報処理学会
教員研修(R5)

情報処理学会
教員研修(R6)

※国の予算補助、都道府県教委に参加を推奨

授業実践事例 随時事例更新

授業力向上

- ・解説動画等の作成・公開
- ・NHK高校講座「情報Ⅰ」(文部科学省協力)

指導力
授業力UP↑



専門性の向上

- ・研修会開催(情報処理学会と連携)
- ・MOOC等研修公開

学習機会の保障

- ・アーカイブ配信等により、いつでも学習可
- ・繰り返し視聴可

学校DX戦略アドバイザー事業



情報科の優れた指導力を有する教師による支援
専門性が高く指導力が高い情報科教師や指導主事等を、国のアドバイザーとして登録。教育委員会からの依頼により、授業等に関する相談や学校指導訪問、研修会講師を実施。

生徒も視聴可

情報Ⅰ
授業・解説動画



アーカイブ配信

優れた指導力を有する教師が、プログラミング、データサイエンス等情報Ⅰを解説。15分程度 計21本

情報Ⅰ学習会

アーカイブ配信

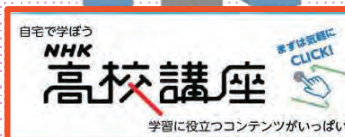


情報Ⅱ授業・解説動画

アーカイブ配信

情報Ⅱ学習会

アーカイブ配信



NHK高校講座「情報Ⅰ」

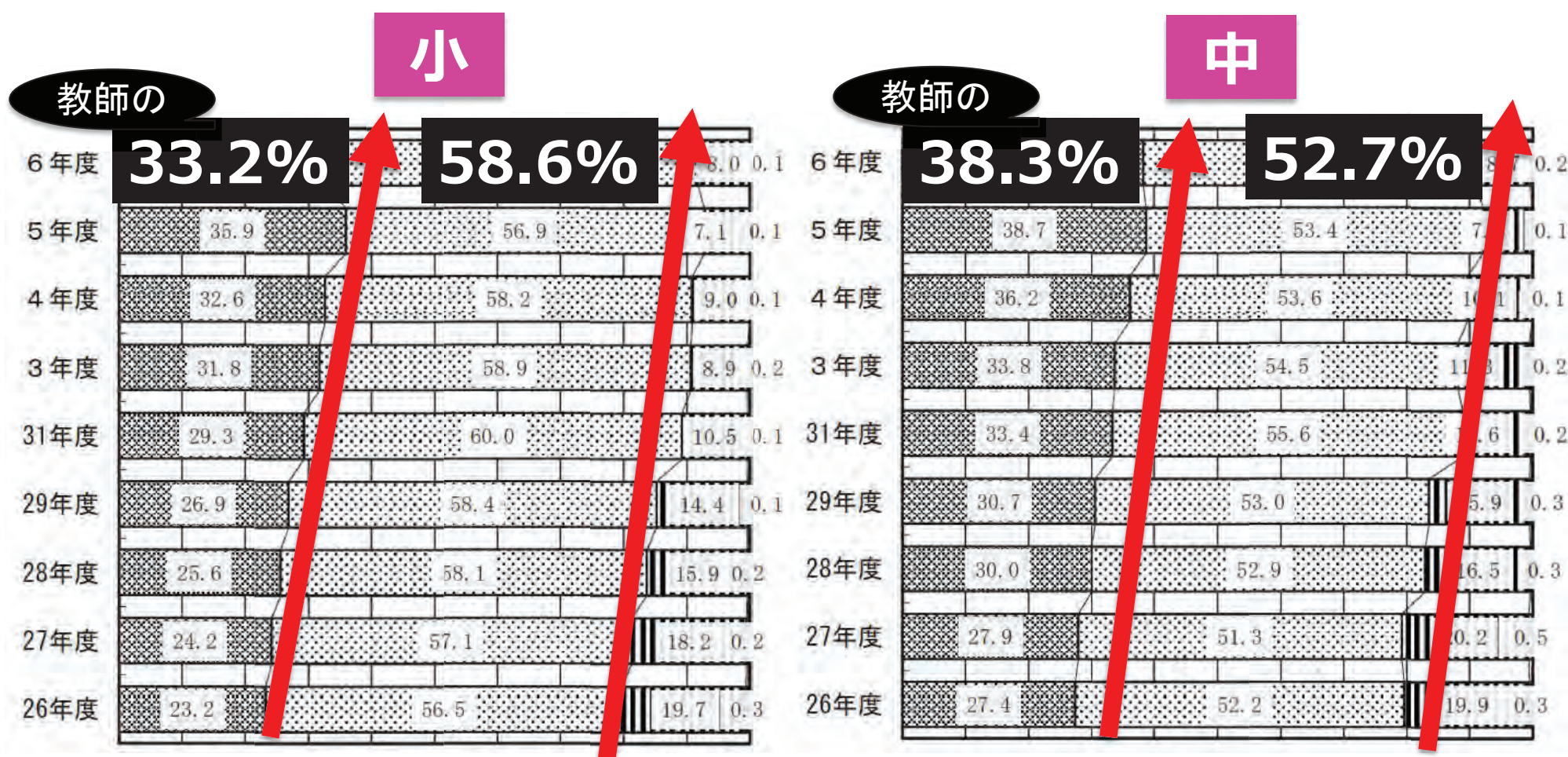
アーカイブ
配信

教科調査官が制作委員として監修 教材不要、受講無料 オンデマンド視聴可

（２）質の高い探究的な学びの実現

（論点整理 P55～61関係）

探究の過程を意識した指導を 「よくしている」教師は増加傾向（3～4割） （「どちらかといえば、よくしている」を含めると9割超）



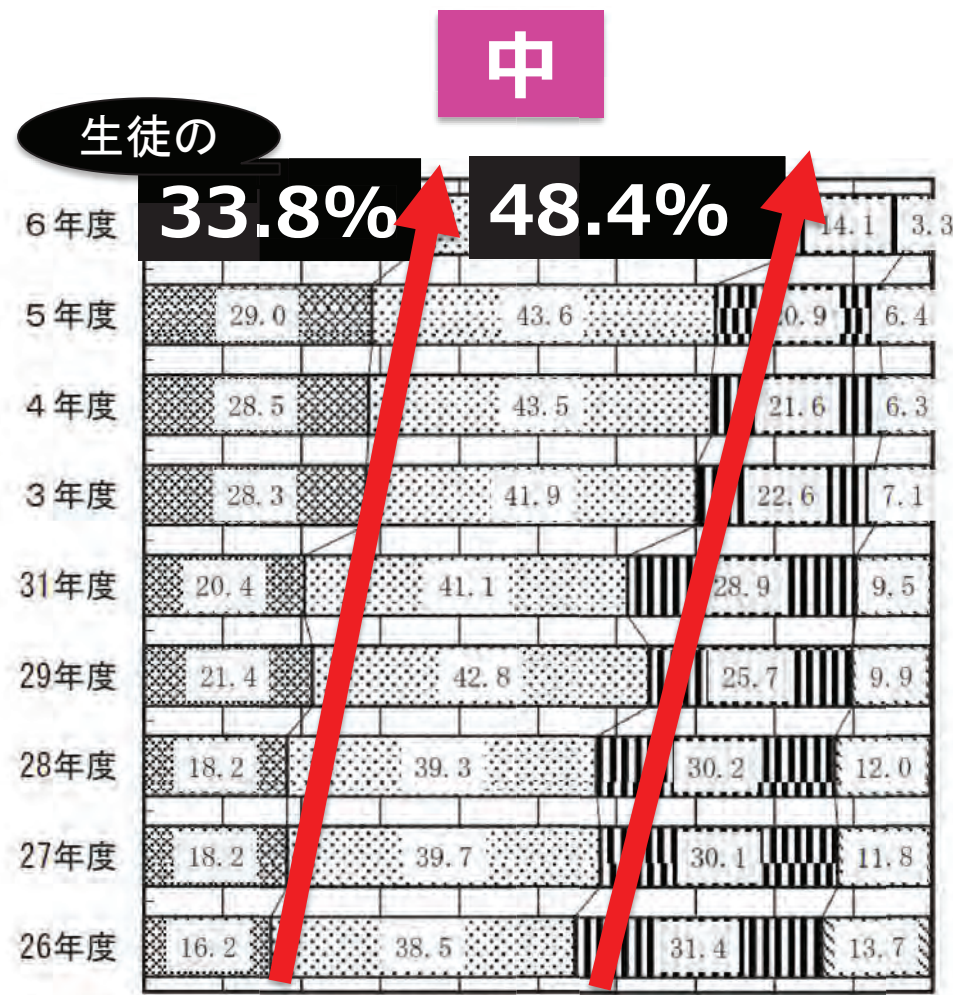
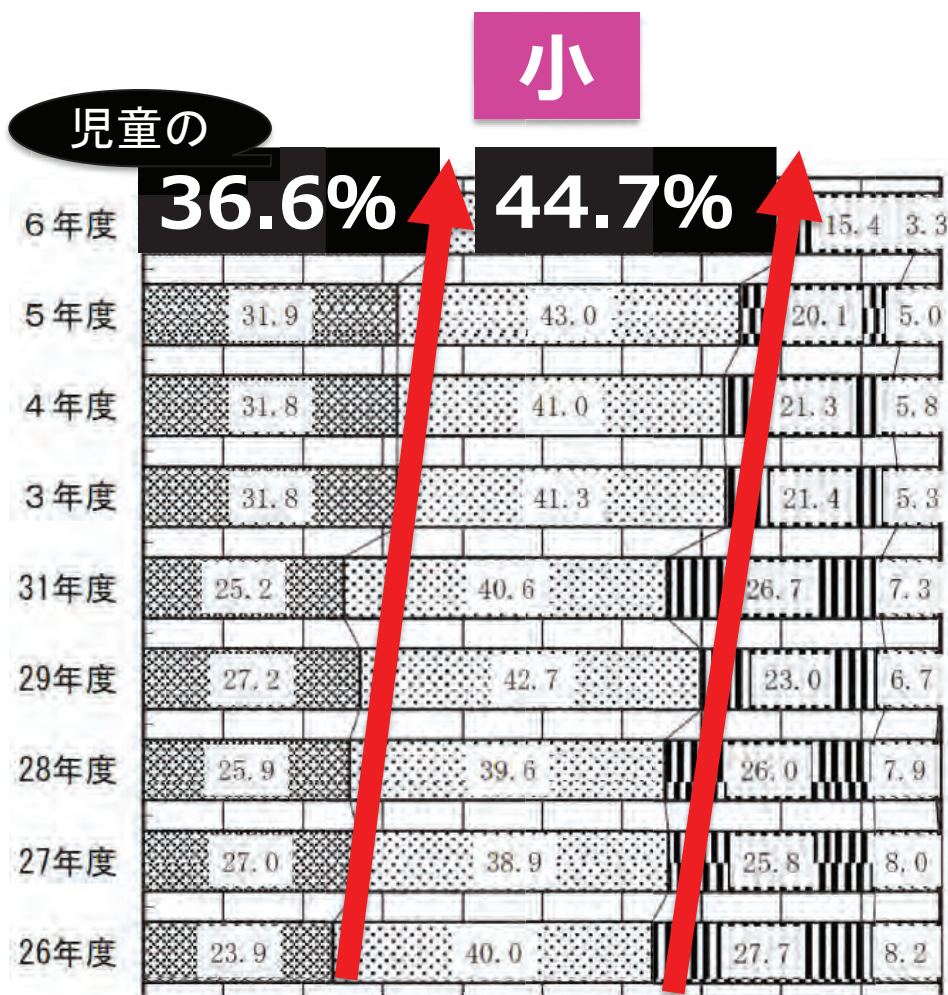
【出典】令和6年度全国学力・学習状況調査報告書（質問調査）P. 64

正確な質問は「調査対象学年の児童生徒に対して、総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか」

探究的な学習活動に取り組んでいますか？

「当てはまる」生徒は増加傾向（3～4割）

（「どちらかといえば、当てはまる」を含めると8割超）



【出典】令和6年度全国学力・学習状況調査報告書（質問調査）P. 35

正確な質問は「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」

2. 国際的潮流と社会状況の変化

OECD「カリキュラムの（リ）デザイン」報告書

各国共通で時代を経ても変わらないカリキュラムデザインをガイドする原則（抄）

⑤ 教科横断性（INTERDISCIPLINARITY）

- （略） 題材や概念が単一または複数の教科でどのように他の題材や概念と関連づけられるのか、また学校の外でも応用できるのかを子どもが気づくことができるようにするものです。
※日本の総合的な学習（探究）の時間を好事例として紹介

⑦ 真正性（AUTHENTICITY）

- 真正なカリキュラムとは、それが適切に用いられたとすれば、実社会とのつながりや交流の機会を作り出すものです。（略）カリキュラムの学習内容が真正である時、子どもたちは自分の興味、環境、そしてニーズに関連する現実的で適切な課題の探究が行える学びを経験します。

⑪ 生徒エージェンシー（STUDENT AGENCY）

- （略） 子どもたちに自身の学びに対するオーナーシップを感じられるようにします。子どもは、権限を与えられ、エージェンシーを認められるとき、何をいつ、そしてどのように学ぶのかに関して影響を与え、決定することができるようになり、それぞれの将来に向けて意味のある力を身につけるのです。

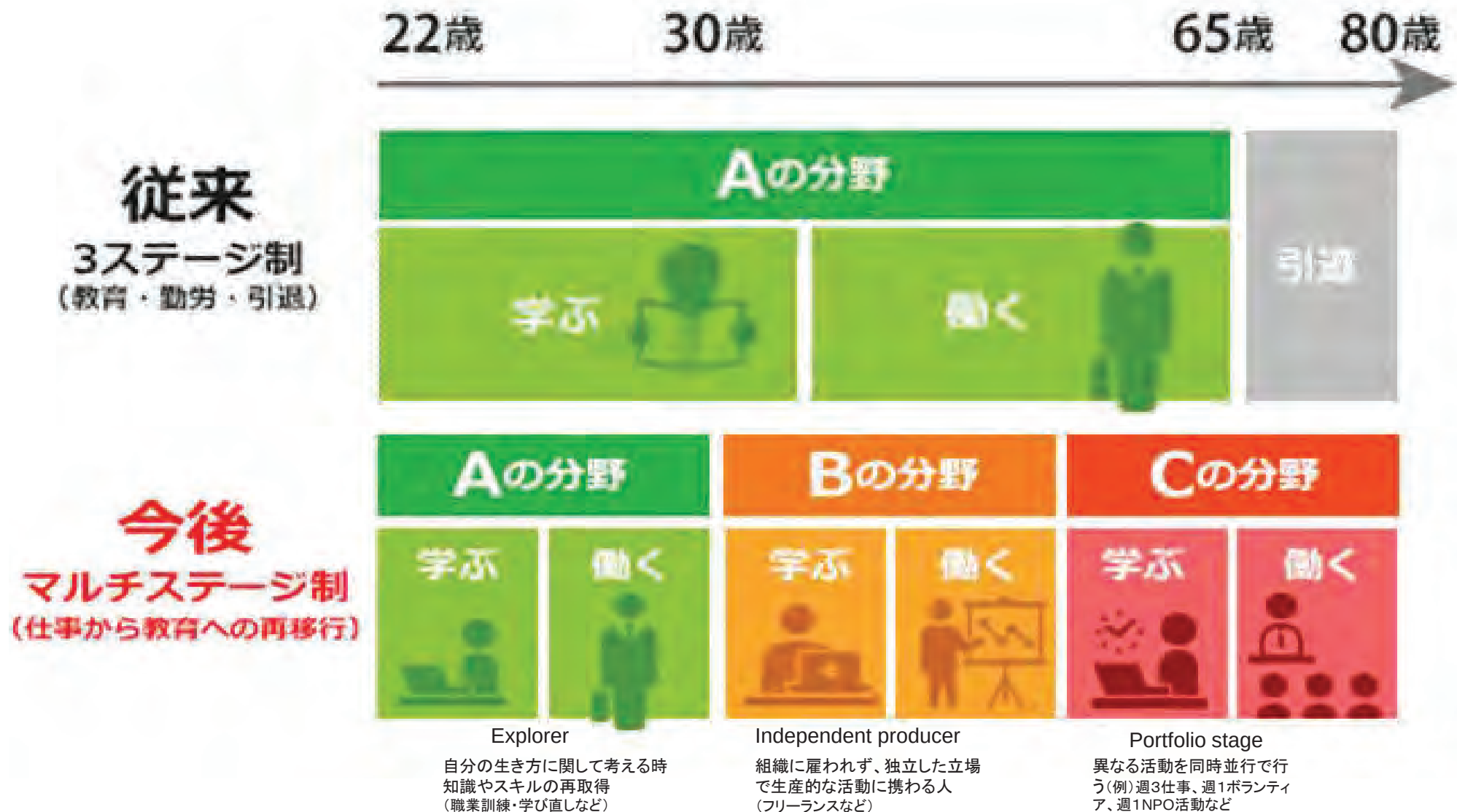
探究的な学びは、生成AIが苦手な部分と親和性

人間が得意なこと VS 生成AIが得意なこと

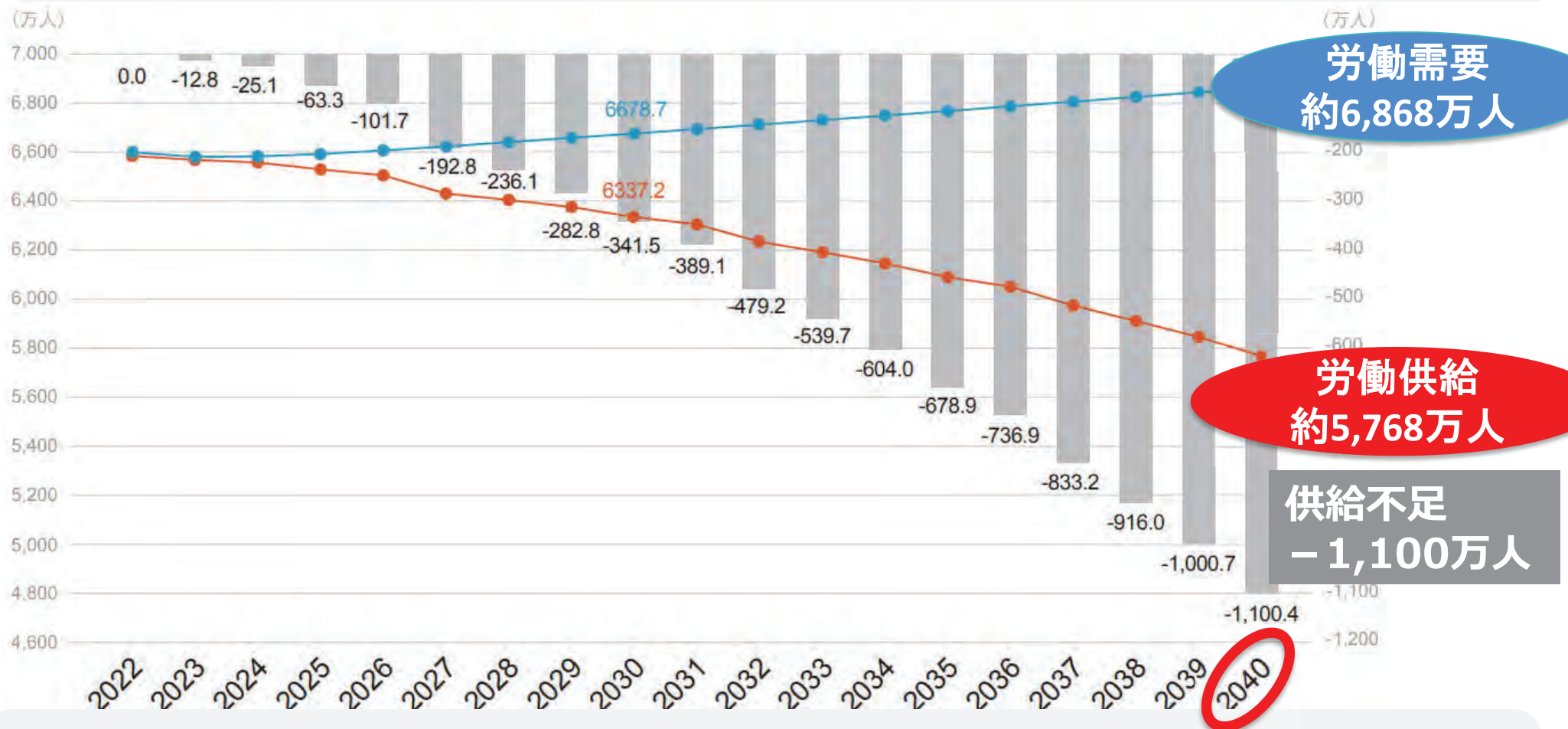


変化の激しい時代×人生100年時代

- 働く期間が長くなる
- マルチステージの時代へ



＜労働供給制約社会＞ 2040年、1100万人も人が足りなくなる



企業寿命短く ⊕ 人生 & 職業寿命は長く ⊕ 構造的人材不足
 ➡ 個人の主体的選択により働き方・生き方を決める割合が増えるとの指摘も

教育課題をめぐる探究的な学びの可能性

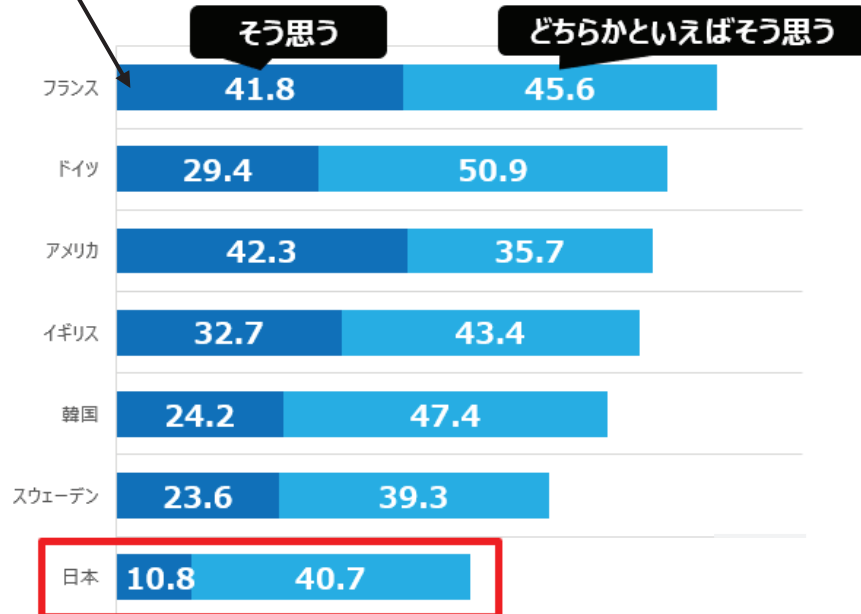
R6全国学調

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、授業で「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」割合が高い傾向

全般的な傾向

(うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む子が少ない)

「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」と回答している児童生徒の割合

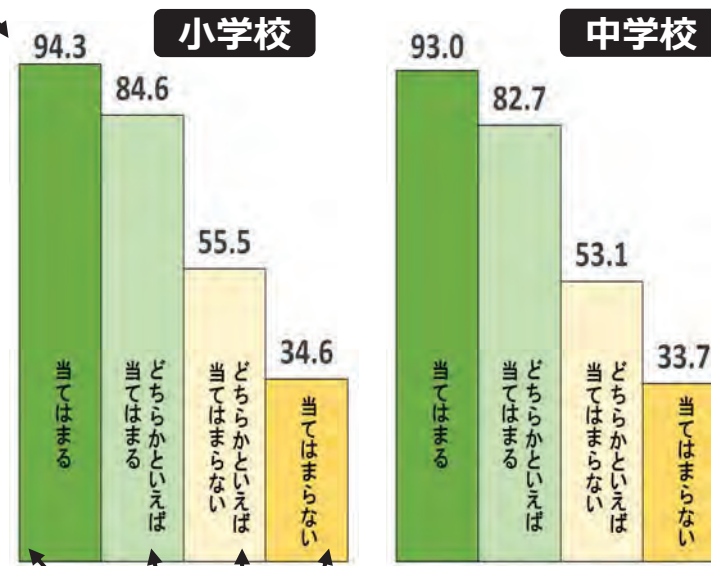


「次のことがらがあなた自身にとどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれについて、あてはまるものを1つ選んでください。」の設問のうち、「(e) うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」

(出典) 我が国と諸外国の若年の意識に関する調査 (平成30年度)
(令和元年6月 内閣府) ※各国満13歳から満29歳までの男女が対象

総合で探究的に学んでいる子 (課題の解決に主体的な子が多い)

「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と回答している児童生徒の割合



総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

(出典) 令和6年度全国学力・学習状況調査

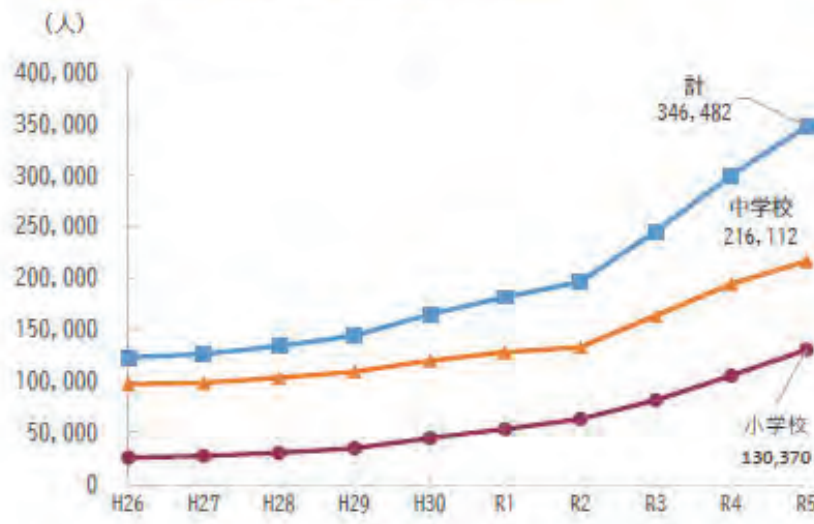
「探究的な学び」は 不登校の子供が「学びたいと思える場所」と親和的

全般的な傾向
(不登校児童生徒が増加)

当事者の声
(好きなこと等を突き詰められる場所で学びたい)

不登校又は不登校傾向にある現中学生と卒業生
(卒業後～22歳)が思う「学びたいと思える場所」

不登校児童生徒数の推移



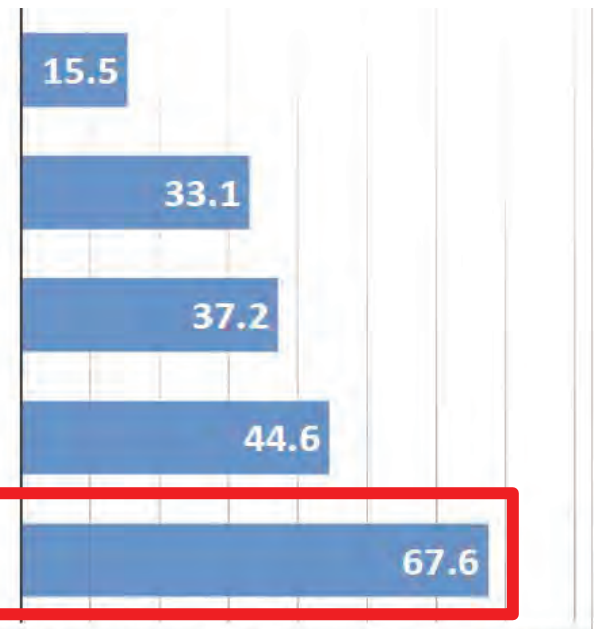
学校の先生だけでなく、地域の人など、
様々な社会人が先生になってくれる

クラスや時間割に縛られず、自分で
カリキュラムを組むことができる

常に新しいことが学べる

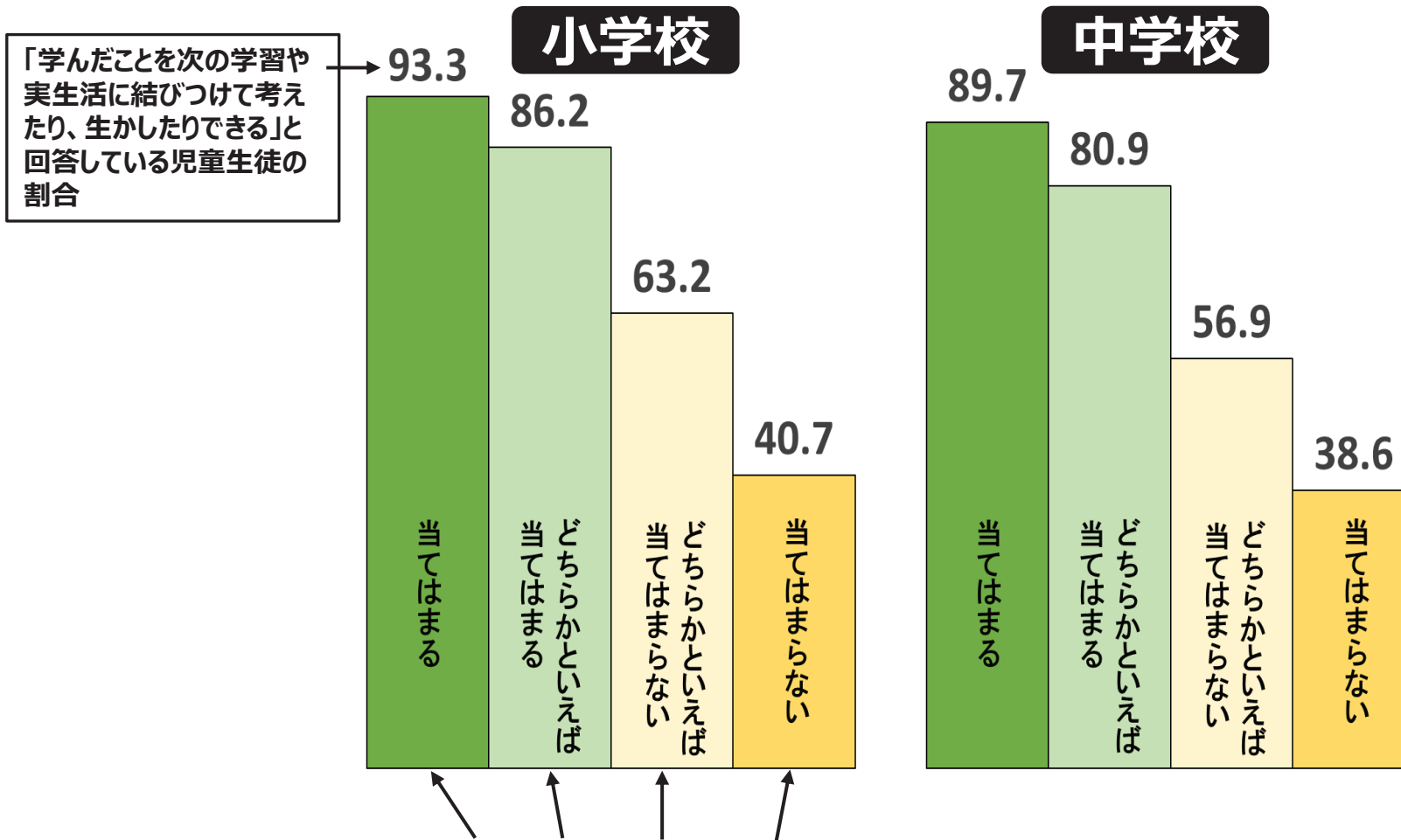
自分の学習のペースにあった手助けがある

自分の好きなこと、追求したいこと、
知りたいことを突き詰めることができる



【出典】日本財団「不登校傾向にある子どもの実態調査（2018年12月）」をもとに作成

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、授業で学んだことを「次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりできる」割合が高い傾向



総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

(出典) 令和6年度全国学力・学習状況調査

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、 「自分の考えをまとめる活動を行っていた」割合が高い傾向

全般的な傾向 (自分の考えを書くことが苦手)

全国学力・学習状況調査では、自分の考えをまとめたり書いたりする問題の正答率に課題が見られる。

小学校・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無回答率
「ごみ拾い」か「花植え」かのどちらかを選んで、 でどのように話すかを書く（R4）	互いの立場や意図を明確にしなが計画的に話し合い、 自分の考え をまとめる	47.8%	3.0%
【川村さんの文章】の空欄に学校の米作りの問題点と解決方法を書く（R5）	図表やグラフなどを用いて、 自分の考え が伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	26.8%	7.0%
資料を読み、運動と食事の両方について分かったことをもとに、自分ができそうなことをまとめて書く（R5）	文章を読んで理解したことに基づいて、 自分の考え をまとめることができるかどうかをみる	56.4%	8.4%

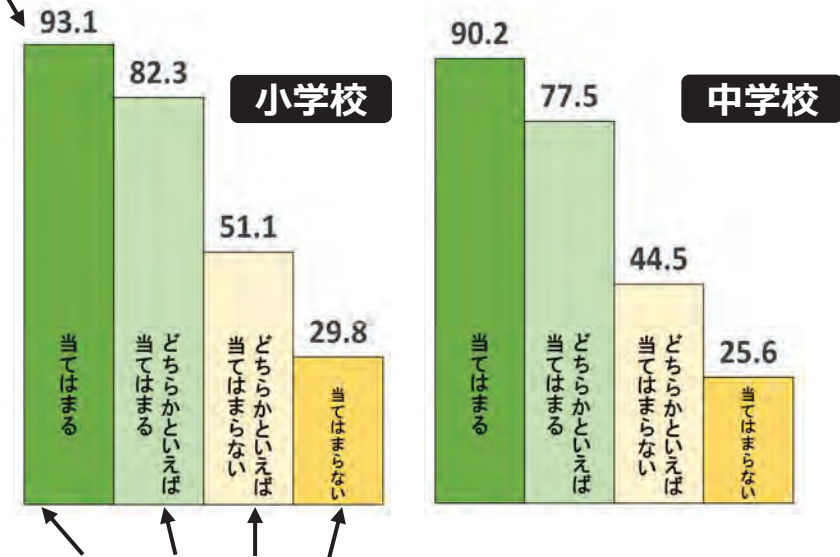
中学校・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無回答率
参加者の誰がどのようなことについて発言するとよいかと、そのように 考えた理由 を書く（R3）	話し合いの話題や方向を捉えて、 話す内容 を考える	57.5%	3.3%
農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える（R4）	自分の考え が伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く	46.5%	8.8%

出典：R3～R5 全国学力・学習状況調査 8

総合で探究的に学んでいる子 (自分の考えをまとめる活動を行っていた子が多い)

「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」と回答している児童生徒の割合



総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

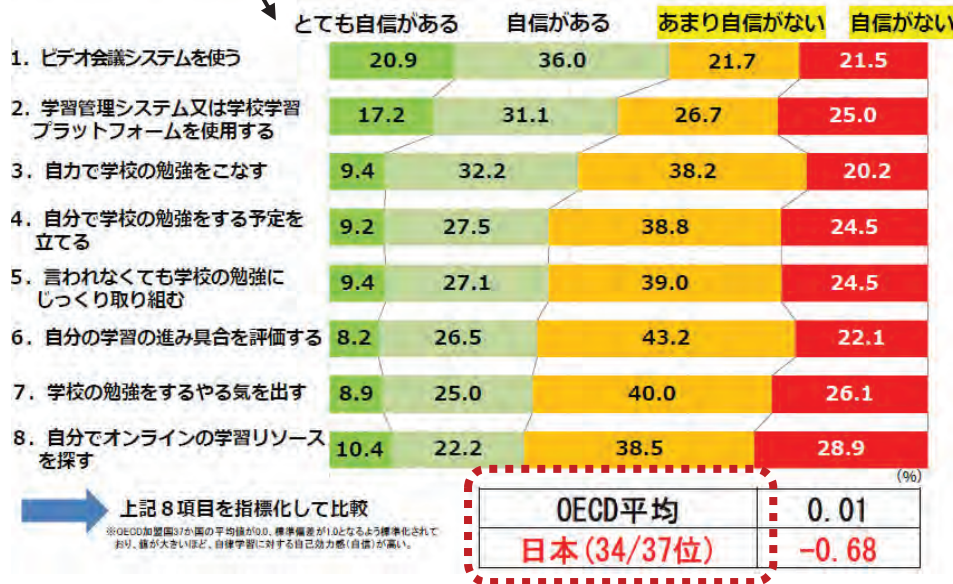
※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

(出典) 令和6年度全国学力・学習状況調査 180

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、 「自分で学び方を考え、工夫できる」割合が高い傾向

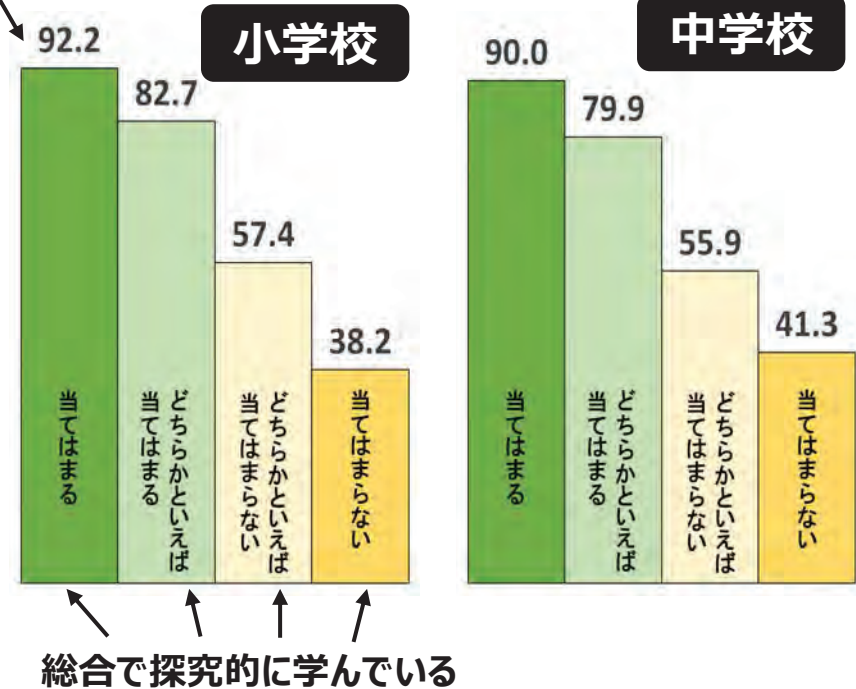
全般的な傾向 (自律的に学ぶ自信がない)

学校が再び休校になった場合に
自律学習を行う自信があるか



総合で探究的に学んでいる子 (自分で学び方を考え、工夫できる子が多い)

「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている」と回答している児童生徒の割合



「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

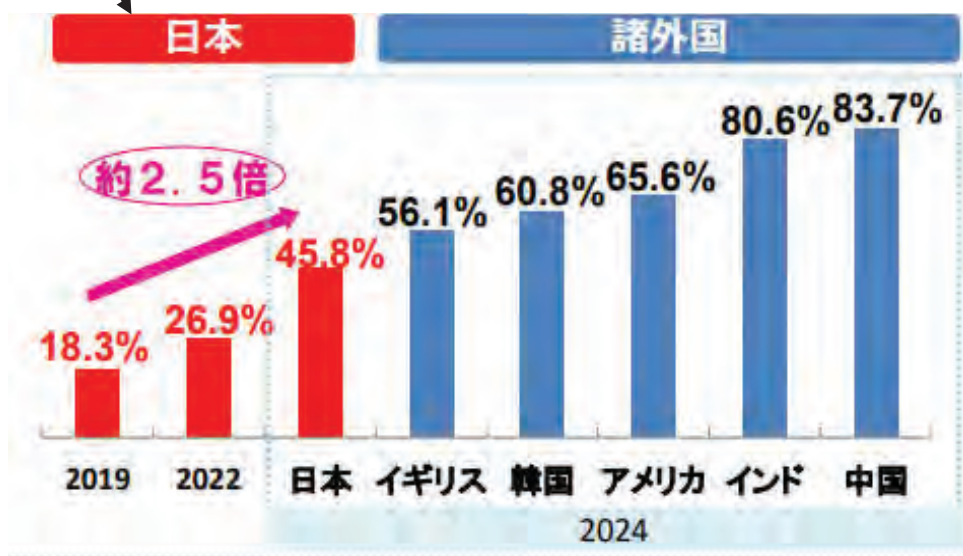
※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。
(出典) 令和6年度全国学力・学習状況調査 181

(出典) 文部科学省・国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度評価 PISA2022のポイント」をもとに作成

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、 「地域を良くするために何かしてみたいと思う」割合が高い傾向

全般的な傾向 (社会参画意識は改善傾向だが依然課題)

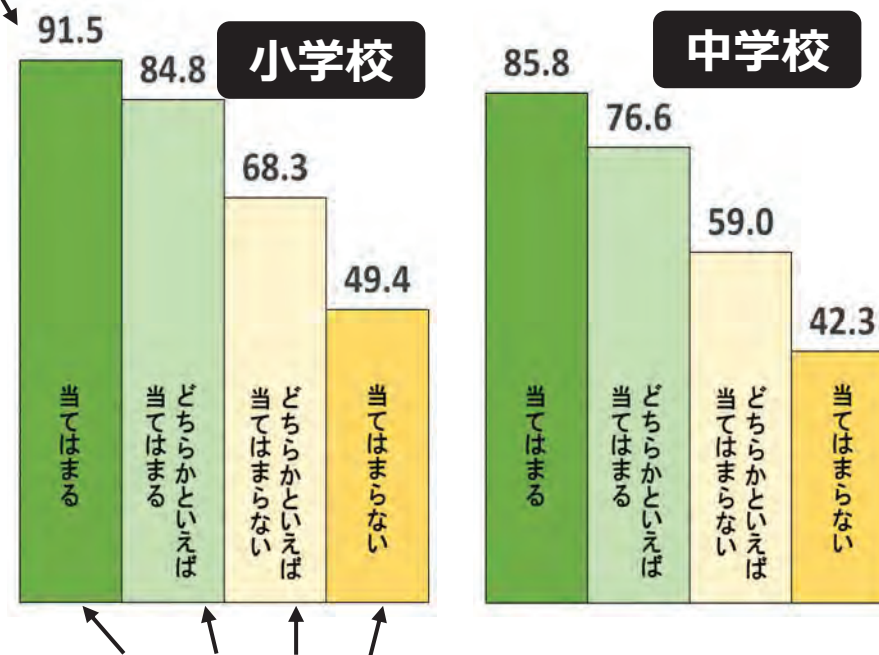
「自分の行動で国や社会を変えられと思う」(※1)と回答している児童生徒の割合



(※1)「同意」、「どちらかといえば同意」の回答率

総合で探究的に学んでいる子 (地域のために何かしたい子が多い)

「地域や社会をよくするために何かしたいと思う」と回答している児童生徒の割合



総合で探究的に学んでいる

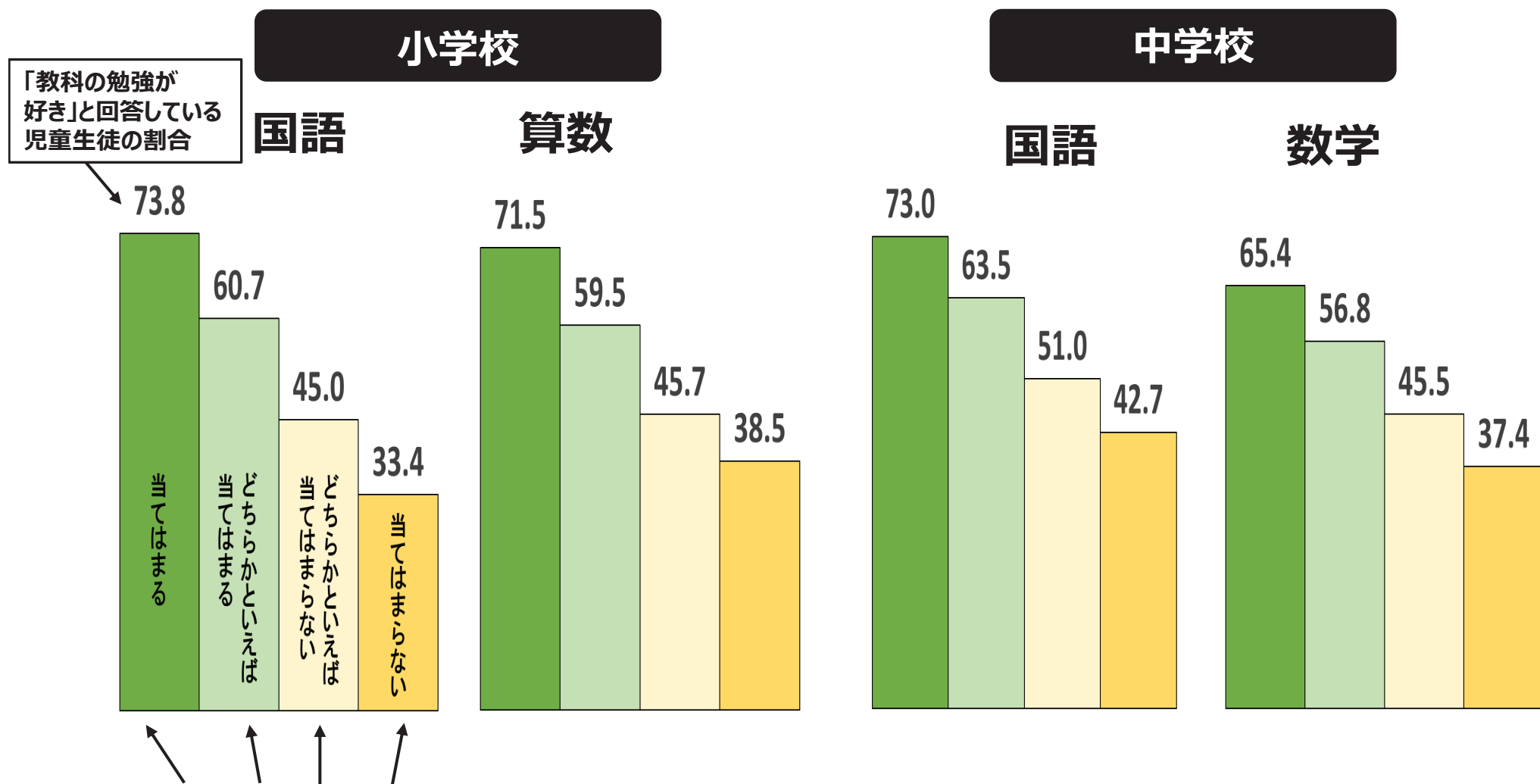
「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

(出典) 令和6年度全国学力・学習状況調査

(出典) 日本財団18歳意識調査結果 第62回テーマ「国や社会に対する意識(6カ国調査)」、令和6年度全国学力・学習状況調査より作成

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は 「教科の勉強が好き」な割合が高い傾向



「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

子供への意見聴取結果（関連部分の抜粋）

テーマ：みなさんが願う人生や社会にするために、学校でどんな学びが大切ですか？



○ ワクワクした授業やその理由は何ですか？

- 小学4年生の総合の授業で、車いすの使い方を勉強した。おもしろくてためになると思った。
- **総合の授業が好き**。みんなで何かをしたり、自分でがんばって資料を集めて作ったりするのが好きだから。
- **総合の調べ学習**や美術の何かを作る授業、行事の班決めや調べ学習など、**自分で決めて、調べて、まとめる作業が好きなのでワクワクする**。
- 総合的な学習の中の探究学習の時間。**自分の調べたいものを内発的動機に基づいて調べることができる。大人とも力を合わせて自分が作りたいものを作り上げられる。完成したときはすっきり気持ちが良い**。

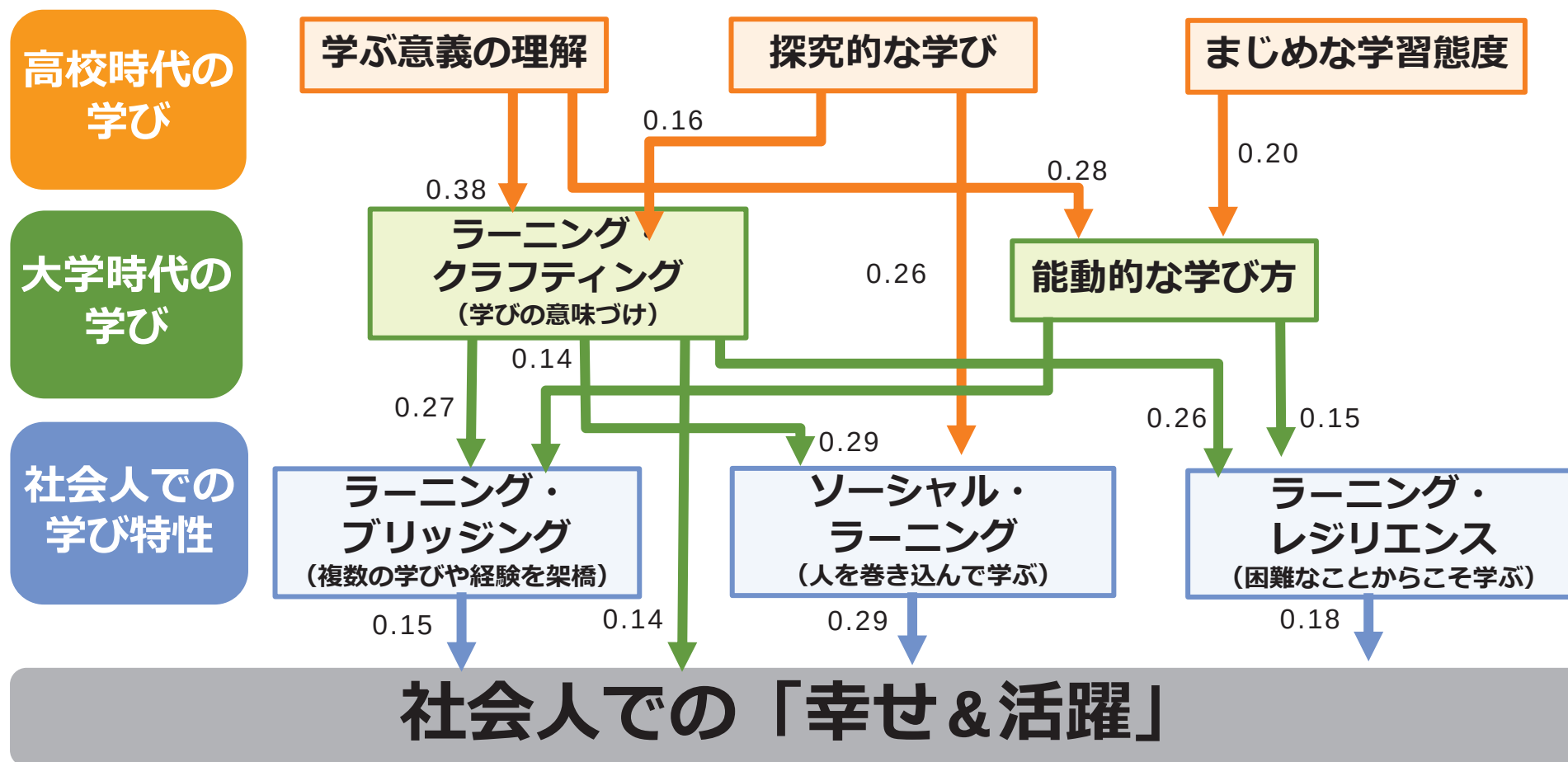
○ 自分の力をつけていくために、どんな授業がよいと思いますか？

- 自分が調べようと思ったことを調べる授業。
- **単に先生の話聞くだけでなく、自分自身が見つけた課題を周囲の人と協力して解決していけるような環境を整えられると良い**。

高大の学び×幸せな活躍

幸せな活躍をしている社会人の学び特性と高校・大学での学びを分析した結果、

- ① 高校の「学ぶ意義の理解」「まじめな学習態度」が、大学の「能動的な学び」の土台になっていた
- ② 高校の「学ぶ意義の理解」「探究的な学び」が、大学の「学びの意味づけ」に影響していた
- ③ これらをベースに「ソーシャル・ラーニング」を中心とした社会人での学び特性が形成、「幸せな活躍」に繋がっていた



(出典) 中原淳・ベネッセ教育総合研究所・パーソル総合研究所『ハタチからの「学びと幸せ」探究ラボ調査分析結果 (2025年2月19日)』より作成。 全国の25-35歳の就労者 2000名対象

※ 学びのスタイル→身につけた資質・能力のパス解析 カイ2乗値: 267.06 (df=15, p=0.000) GFI=0.972, CFI=0.971, RMSEA=0.092 ※パスの数値は標準化回帰係数、共分散、誤差間共分散は省略

※ R2=0.38 は38%の変動が説明変数によって説明される意

探究的な学び×ICTの活用で期待できる質の高まり



①課題の設定

多様な課題に出会うことができる
データ等で課題を明確化し、課題解決の見
通しを鮮明にできる



②情報の収集

多種多様な大量の情報を、高速に、時
間や空間を超えて収集・蓄積できる



④まとめ・表現

豊かな表現を短い時間で作成し、広く発信し
たり、自らの学びを振り返ったりできる

③整理・分析

多様で大量で複雑な情報の整理や、整理
した情報の加工・分析が容易になる



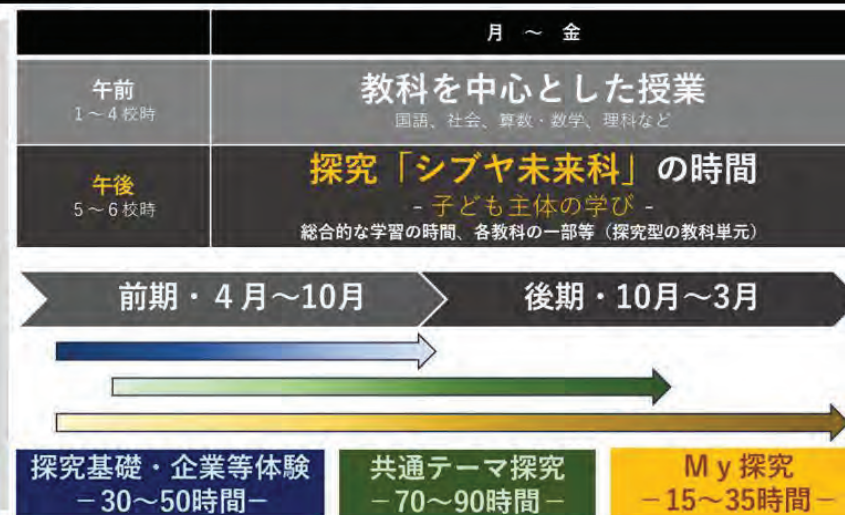
情報技術の活用により探究的な学びの質を向上する取組

(渋谷区の例)

渋谷区教育委員会における取組（授業時数特例校）

～探究×ICT～

- ◆渋谷区では、令和6年度より、未来社会に求められる、自ら課題を設定し、解決策を探る能力を育成するため、「シブヤ未来科」を大幅拡充。
 - ◆シブヤ未来科では、自ら考え判断して学び続ける「自己調整力」、多様な仲間と協働して新たな価値を生み出す「創造力」、自分が思い描く未来を実現しようとする「挑戦力」の育成を目指している。
 - ◆授業時数特例校制度を活用し、同制度の上限である各教科の時数のうち1割を総合的な学習の時間に当て、午後は探究「シブヤ未来科」の時間としている。
- ※総合的な学習の時間が70時間 → **155時間**（小学校6年）
- ◆シブヤ未来科の実施に当たっては、本区が全国に先駆けて整備を進めてきたICT環境をフル活用している。



探究の道具としてのICT

探究における課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の各段階でMicrosoft365等を活用。



探究を支援するアプリ

探究支援アプリInspire Highを導入し、世界で活躍する人物とのセッションや、日本中の生徒と高め合う機会を提供。



区独自のハチアプリを使い、探究の振り返りや子供同士のフィードバックが可能に。



教員への支援

探究ハンドブックを作成し、タブレットで活用できるワークシートも配布。



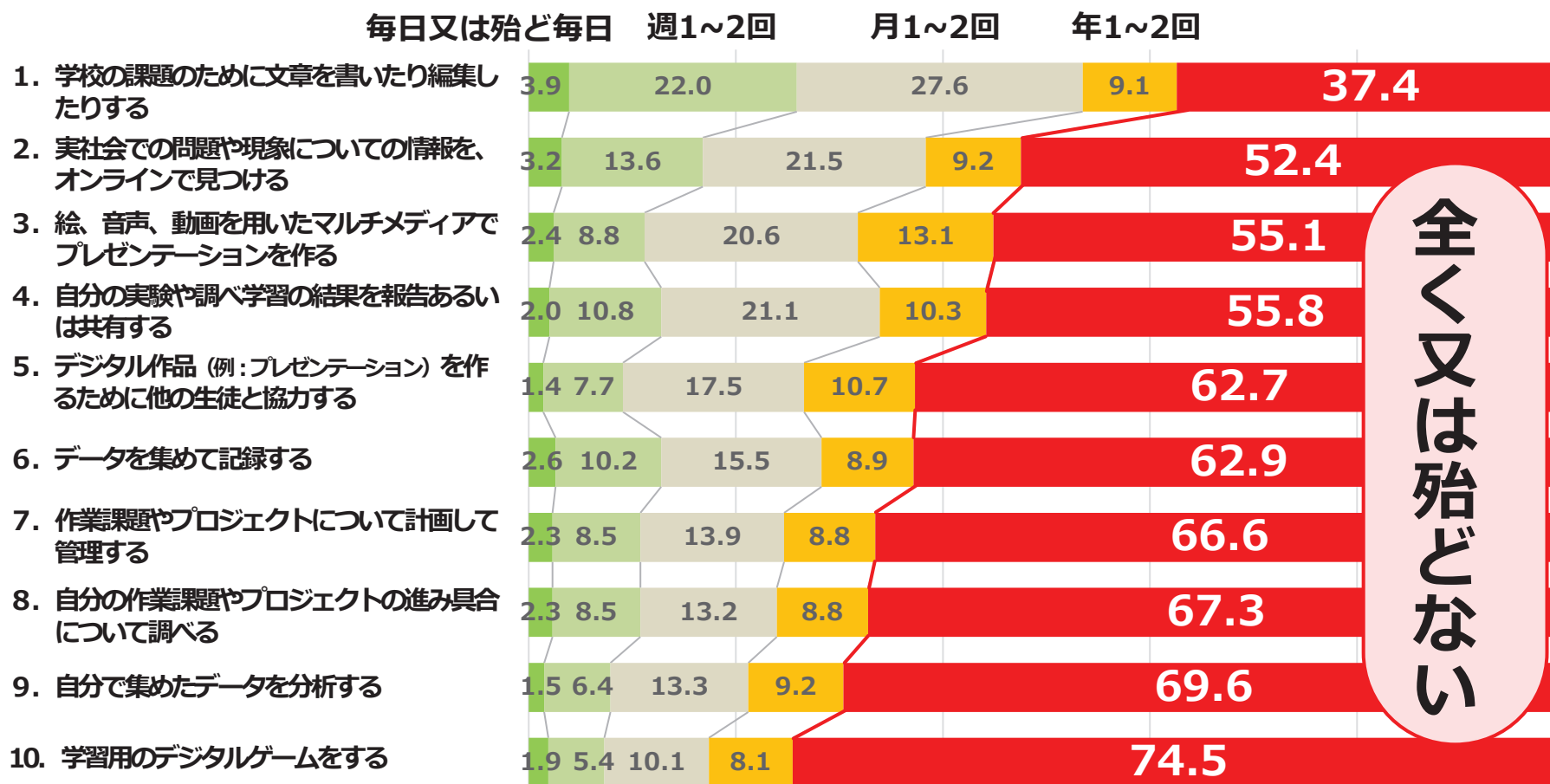
企業・団体とのマッチング支援のため、探究ポータルサイトを開設。



生徒・教師を対象とする調査の結果

PISA2022

探究的な学びにおけるICT活用 諸外国と比較して低位であり、伸びしろがある



全く又は殆どない



上記10項目を指標化して比較すると…

※ ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいくほど、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

OECD平均	0.01
日本(29/29位)	-0.82

1人1台端末の活用の探究的な学習への質的・効率的影響についての調査 (学会等未発表データ, 速報値)

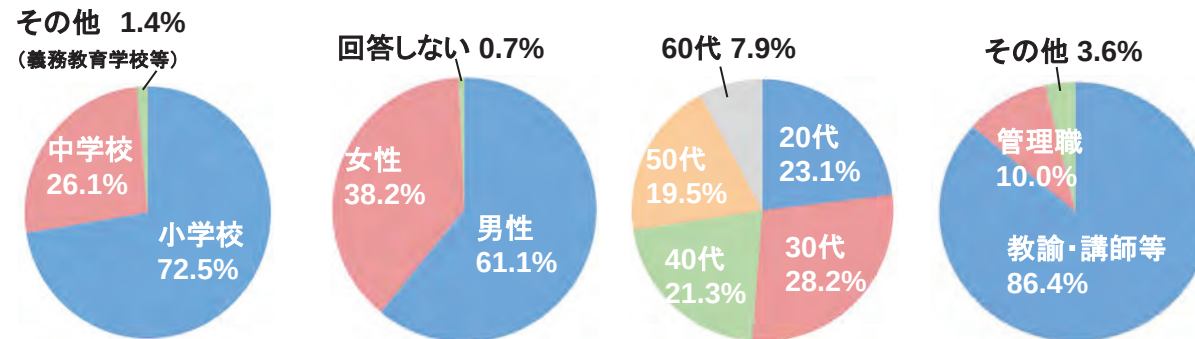
調査対象

全国の公立・私立の小学校・中学校に在籍する教師

回収数

回答数 279人

調査回答者の属性



調査方法・調査項目

Webフォームによる。フェイス項目 (9項目)

- ① 端末がないとできない探究的な活動の時短への影響を問う (14項目)
- ② 端末がないとできない探究的な活動の学習の質への影響を問う (14項目)
- ③ 端末がなくてもこれまで行われてきた探究的な活動に対する端末の時短への影響を問う (40項目)
- ④ 端末がなくてもこれまで行われてきた探究的な活動に対する端末の学習の質への影響を問う (40項目)

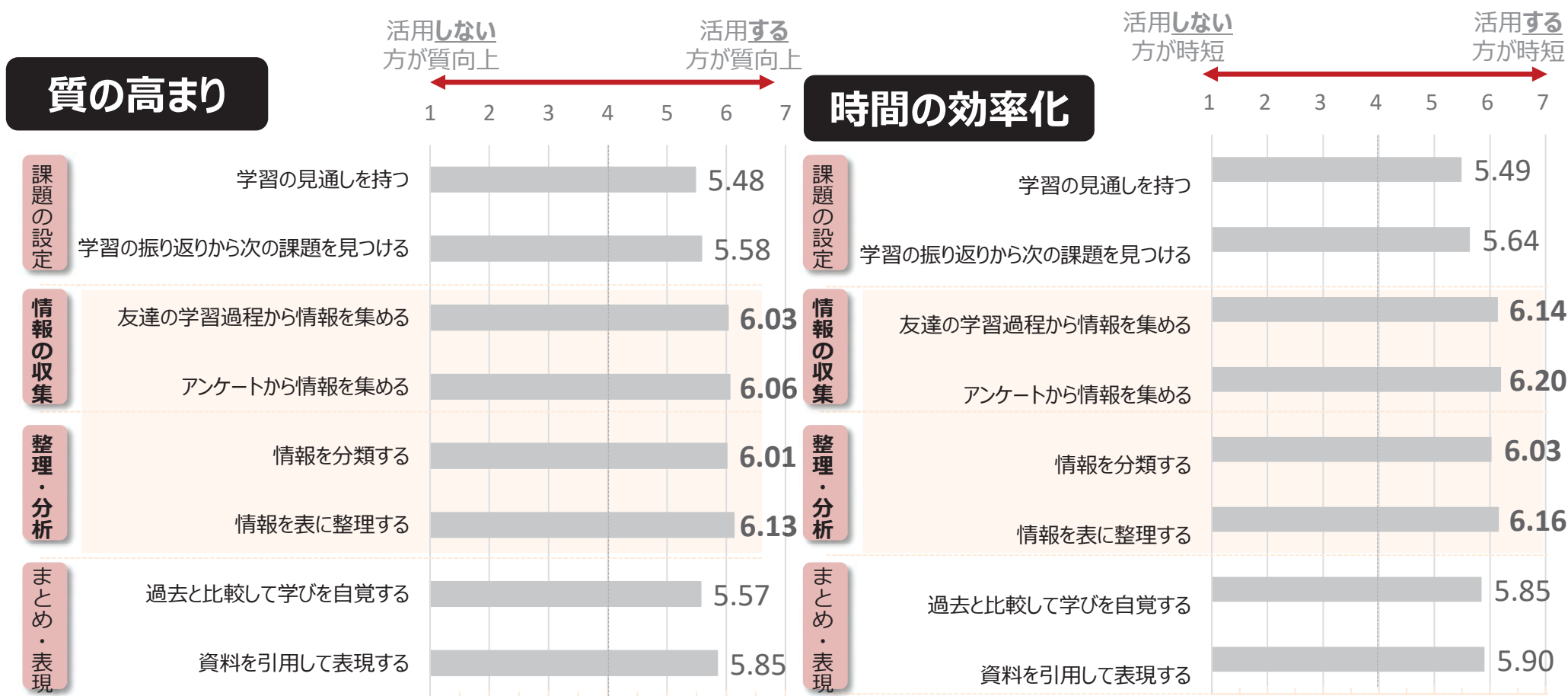
調査期間

2025年4月23日から5月2日までの10日間

(発表予定)

泰山裕, 登本洋子, 佐藤和紀, 堀田龍也: 1人1台端末の活用の探究的な学習への質的・効率的影響の検討. 日本教育工学会研究報告集 JSET2025-2 2025/07/05発表予定 (北海道大学)

- 探究的な活動で端末活用⇒活用なしと比べ、探究の質の高まり・効率化を実感
- 特に「情報収集」「整理・分析」の学習過程でスコアが高い（7点満点で6点以上）



質を低下させず時間短縮も可能とし、探究のプロセスで時間をかけるべきところに時間を確保し、質を高めることが可能に

（出典）泰山裕，登本洋子，佐藤和紀，堀田龍也「1人1台端末の活用の探究的な学習への質的・効率的影響についての調査」結果より作成。2025年4月23日から5月2日までの10日間でWebフォームを用いて全国の公立・私立の小学校・中学校に在籍する279名の教師から回答受領

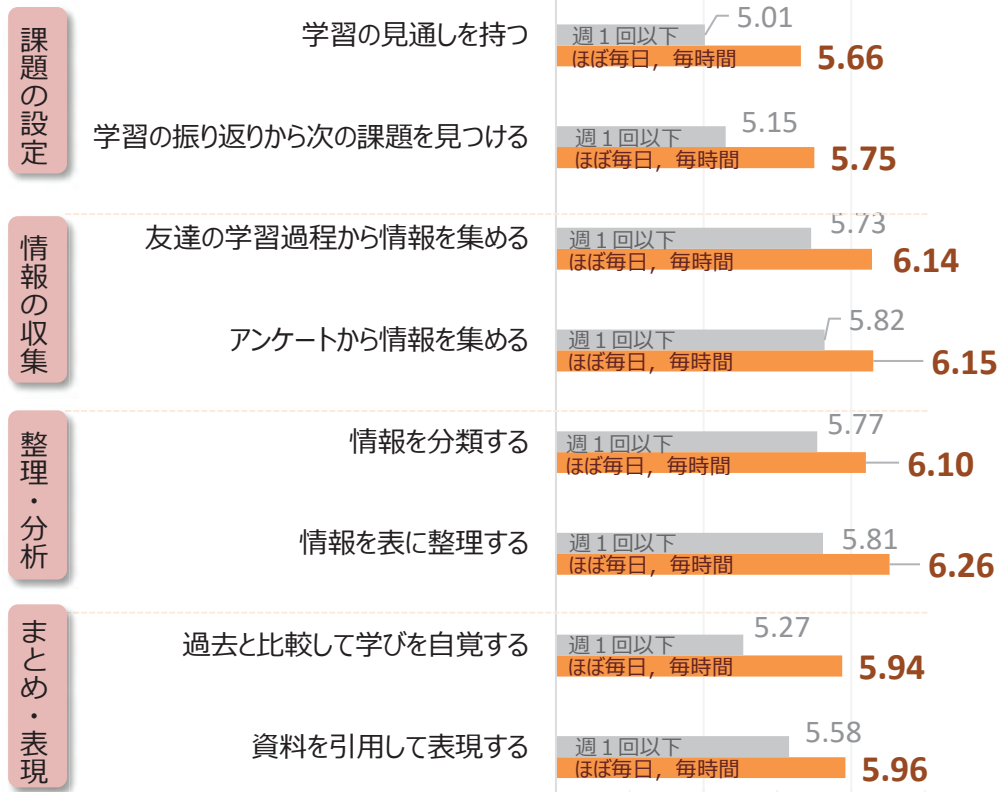
※：上記表内の値は、これまで行われてきた探究的な学習でよく行われる活動について、1：「端末を活用しない方が質が高まる」～7：「端末を活用する方が質が高まる」、もしくは「端末を活用しない方が時短になる」～7：「端末を活用する方が時短になる」の7段階の選択肢への教師の回答の平均値を指す。それぞれ40ほどの活動についての質問項目があり、紙面上、学習過程ごとに特に値が高い探究活動を中心に抜粋しているが、その他の活動においても値は平均値4以上のポジティブな回答。

端末の活用頻度が高い方が、 探究的な学びの質の高まり・効率化の実感が高い傾向

質の高まり

活用しない
方が質向上

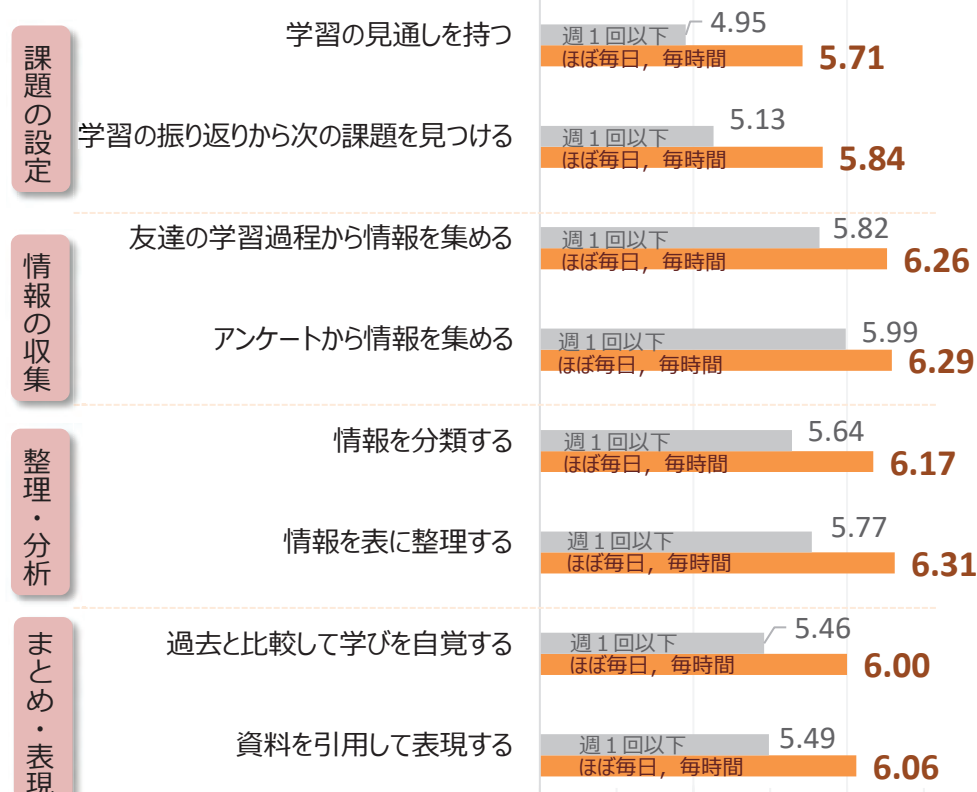
活用する
方が質向上



時間の効率化

活用しない
方が時短

活用する
方が時短



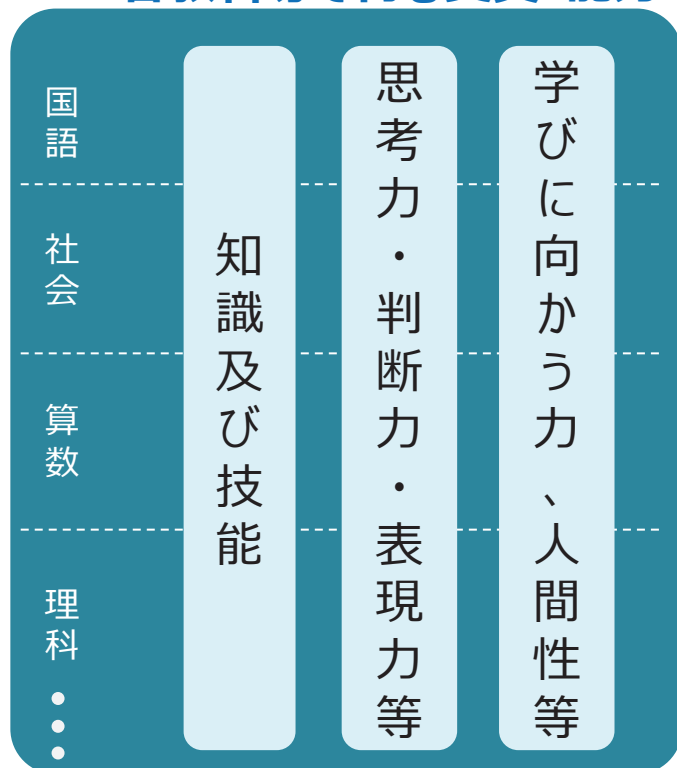
質を低下させず時間短縮も可能とし、探究のプロセスで時間をかけるべきところに時間を確保し、質を高めることが可能に

※紙面上、学習過程ごとに値が高い活動のみ抜粋しているが、「ほぼ毎日、毎時間」端末を活用する群は、そうでない群と比べほぼ全ての項目において、質の高まり・効率化とともに実感が有意に高まる傾向にある。

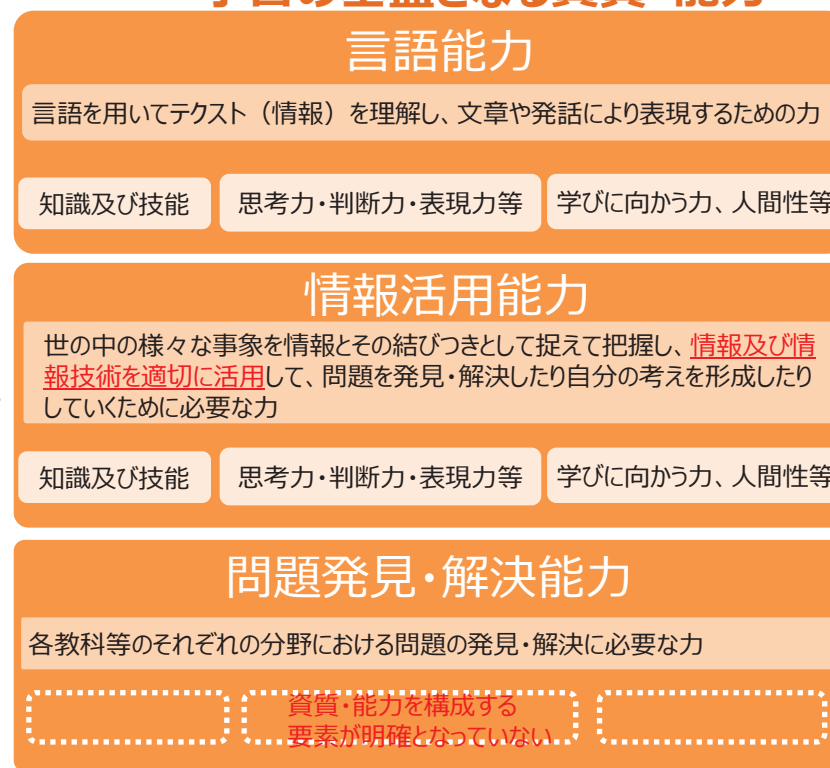
「学習の基盤となる資質・能力」の課題と整理の視点

- 「学習の基盤となる資質・能力」は、各教科等の日々の学習や生涯にわたる学びを基盤として支える資質・能力
現在は「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」の3つが位置づけられているが、以下の課題
 - ① 「情報活用能力」➡ 情報及び情報技術を適切に活用する力とされているが、社会でのデジタル技術の普及やGIGAスクール構想の進展等を踏まえると、情報技術を介さない情報活用(※)については具体的なイメージが持ちにくい、言語能力との重複があるとの指摘
※ 情報機器を用いない情報の整理・分析や情報の変化の傾向の把握など
 - ② 「問題発見・解決能力」➡ 情報活用能力・言語能力との重複が見られるほか、考え方としては重要でも、資質・能力の具体や育成のための実践が必ずしも明らかでなく、具体的な実践に結びつきにくいとの指摘
- ⇒ 「分かりやすく、使いやすい」学習指導要領を目指すため、各教科等の学習の基盤として、発揮可能な資質・能力を明確にでき、教育実践に落とし込める具体性を有したものに整理してはどうか。

各教科等で育む資質・能力



学習の基盤となる資質・能力



「情報及び情報技術の活用」とあるが、情報技術を介さない情報活用の具体的なイメージが持ちにくい

考え方としては重要でも、資質・能力の具体や実践の在り方が明らかとなっていない

探究的な学びの分類について

- Banchi,H., & Bell,R.（2008）は、教師から与えられる問、手続き、解法の提供範囲に応じて探究学習を複数のレベルに分類している
- レベル 1、2 の探究は各教科で実施されることが多く、より高度な探究と往還しあうことが重要とされる

各教科の時間		総合的な学習（探究）の時間		教師から与えられる		
				問い	手続き	解法
レベル 4 <						

探究的な学びと児童生徒のメタ認知方略等との関連

- 国内外の調査では、探究学習が児童生徒の自律的学習動機、メタ認知方略、創造的思考といった非認知能力と関連があることが示されている

動機付けやメタ認知方略との関連（国内）

- 地域や学校規模に配慮したうえで、国公立小学校に在籍する5年生から6年生の児童718名を対象に事前調査と事後調査を実施、SL（サービスラーニング）型総合的学習*と非認知能力との関連を調査

- 自覚的にSL型総合的学習に取り組んだ児童生徒と、そうではない児童生徒間では、メタ認知方略、自己効力感、動機付け（自律的学習動機）、動機付け（期待価値）の非認知能力に有意な差があった
- 自覚的にSL型総合的学習に取り組んだ児童生徒は、そうではない児童生徒と比較して動機付け（期待価値）やメタ認知方略に係る非認知能力が有意に上昇

*（a）プログラムをアカデミックなカリキュラムや体系的カリキュラムやそれらの目標と関連付ける、（b）若者の声を取り入れる、（c）コミュニティ・パートナーを関与させる、（d）リフレクションの機会を提供する、の4つの要素を含む学習

（出典）加藤智「初等教育におけるサービス・ラーニング型総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルに関する研究」（2022）日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要/38

創造的思考との関連（国外）

- 科学分野の探究型アプローチ（Inquiry-Based Approach）学習と従来型の学習双方を受けた初等中等教育段階の児童生徒1,349名（レバノン・マレーシア・タイ・インドネシア・台湾等）を対象に、探究型アプローチ学習と非認知能力との関連を調査

- 探究型アプローチ学習は、初等教育段階、中等教育段階いずれにおいても、従来型の学習と比較して児童生徒の論理的思考、創造的思考、批判的思考、問題解決力等に関連がある点が示された

（出典）Antonio, R.P. & Prudente M.S. (2024). Effects of inquiry-based approaches on students' higher-order thinking skills in science: A meta-analysis. International Journal of Education in Mathematics, Science, and Technology (IJEMST), 12(1), 251-281.

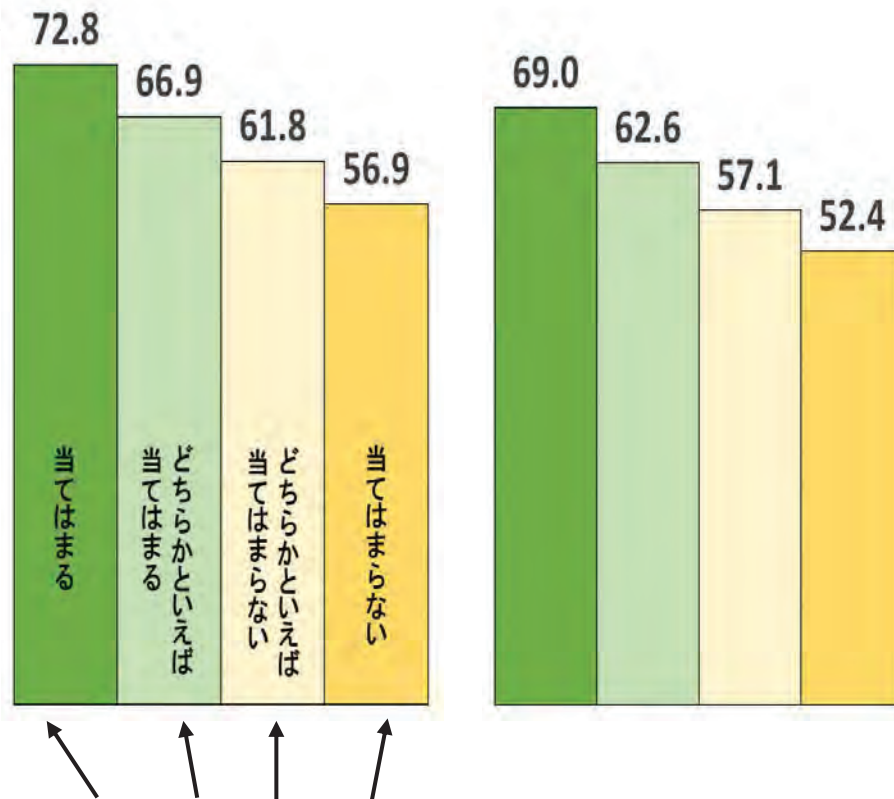
「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、 「平均正答率」が高い傾向

小学校

国語

算数

正答率



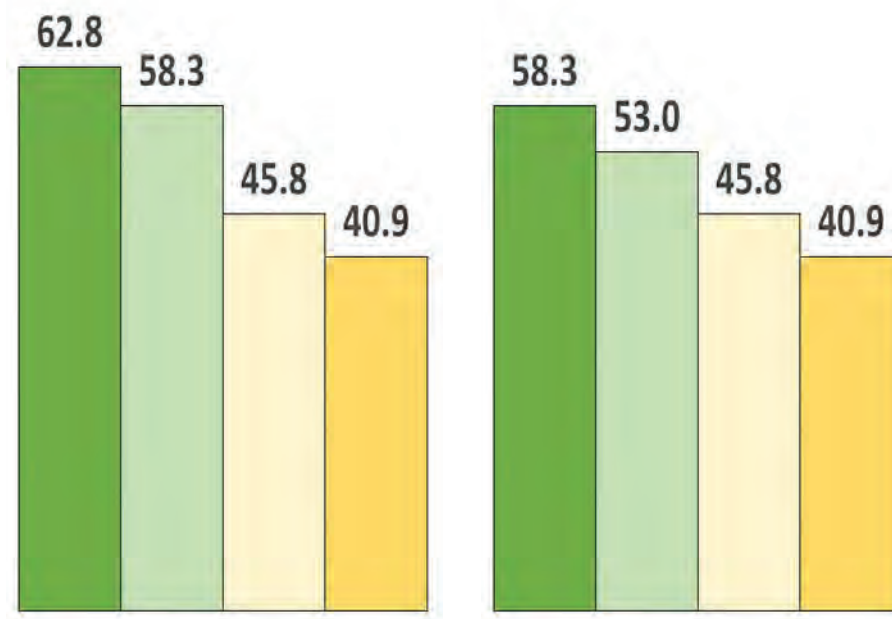
総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

中学校

国語

数学



※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

【出典】令和6年度全国学力・学習状況調査

教育課程特例校・授業時数特例校の状況

授業時数特例校においては、総合の時数を増やしている学校が9割以上

指定校数の推移



授業時数特例校における取組状況

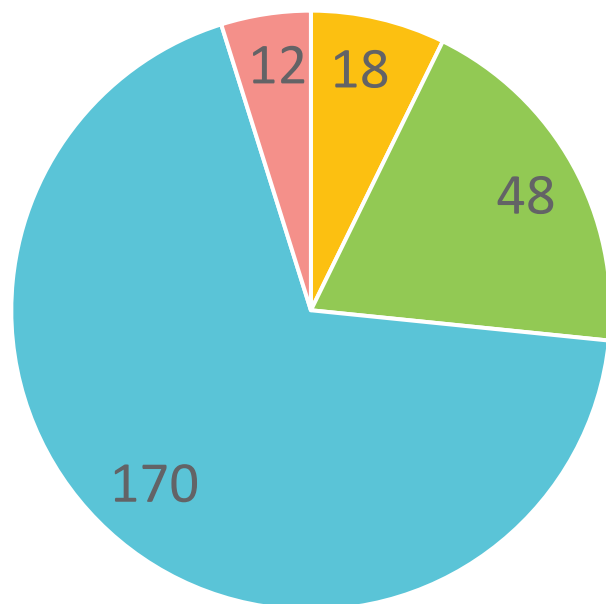


文部科学省における「探究」に係るイベントの調査の実施

- 都道府県等教育委員会が主催する「探究」に係るイベントについて、令和6年8～9月に調査を実施
- 調査結果は、文部科学省後援の民間主催のイベントと併せて、ホームページに一覧を公開

掲載件数：248件

(掲載内容：名称、概要、対象など)



■ 民間団体

■ 大学等

■ 都道府県又は指定都市教育委員会

■ 府省庁(所管法人含む)

イベント名	主催者	概要	対象
探究イベントA	民間団体	探究活動の促進を目的としたイベント	中学生・高校生
探究イベントB	大学等	大学での探究活動に関するセミナー	大学生・大学院生
探究イベントC	都道府県又は指定都市教育委員会	県内各地で開催される探究フェスティバル	小学生～高校生
探究イベントD	府省庁(所管法人含む)	省庁主催の探究コンテスト	小学生～高校生



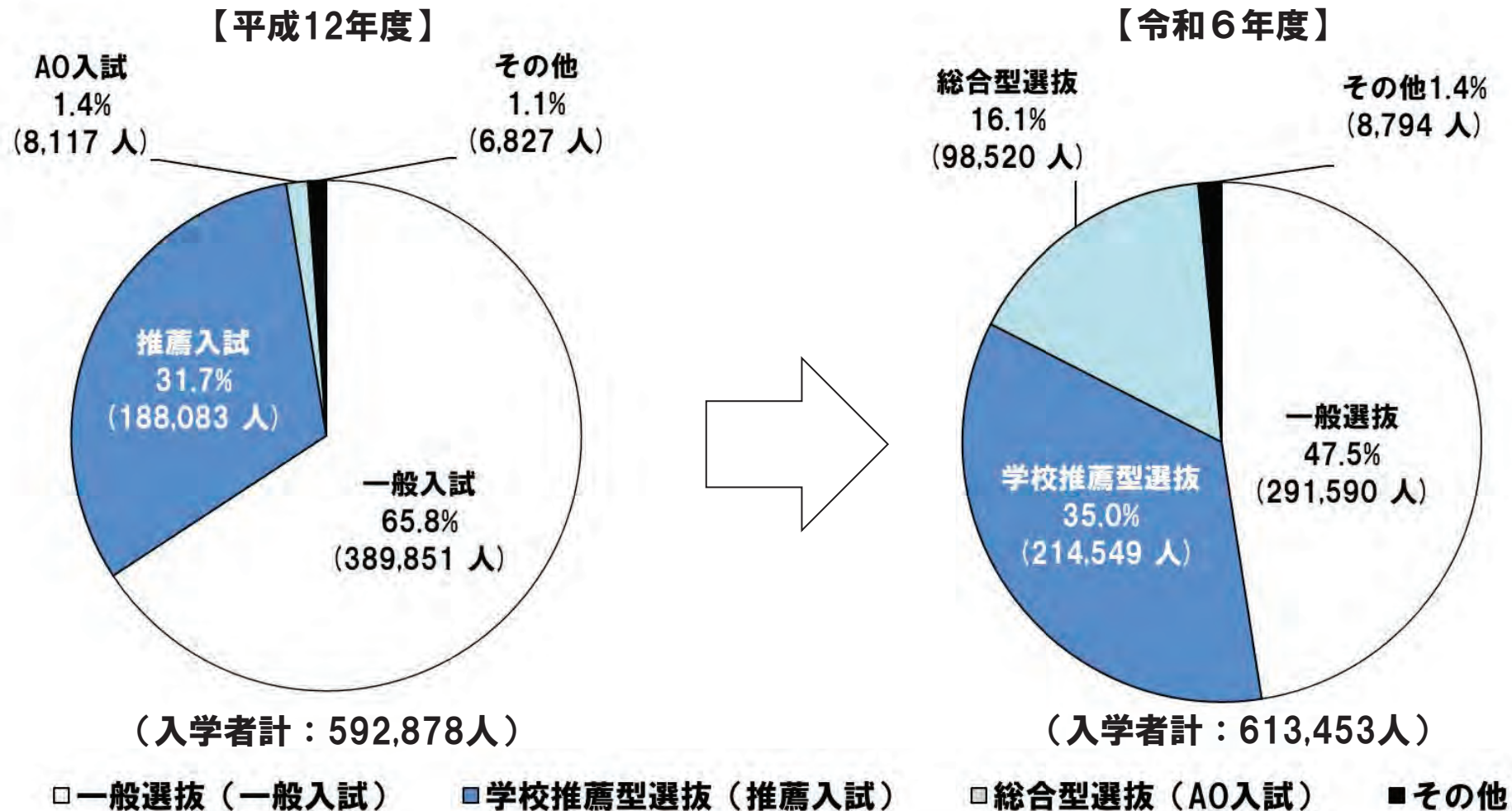
リンク先

文部科学省後援の民間探究イベントの例

イベント名	主催	対象	リンク先
SDG s 探究AWARDS	一般社団法人 未来教育推進機構	中学生 高校生	
STEAM JAPAN AWARD	STEAM JAPAN	中学生 高校生	
SDG s QUEST みらい甲子園	SDGs QUEST みらい甲子園事務局	高校生	
Q-1 ～U-18が未来を変える★研究発表SHOW～	朝日放送テレビ	高校生	
高校生Ring	リクルート	高校生	
創造力、無限大∞ 高校生ビジネスプラン・グランプリ	日本政策金融公庫	高校生	

大学入試の変化について

平成12年度(AO入試調査開始年度)に比べて、総合型選抜、学校推薦型選抜を経由した入学者が大きく増加しており、入試方法の多様化が進んでいる。



(注) 「その他」(平成12年度) : 専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など
 「その他」(令和6年度) : 専門学科・総合学科卒業生選抜、社会人選抜、帰国生徒・中国引揚者等生徒選抜及びその他選抜

高校入試の変化について

「高校教育の改革」「公立高校入試倍率の低下」等を背景に、各自治体が公立高校の入試改革を進めている。

広島県 2023年度～

- ・ 推薦入試を廃止し、一般選抜に一本化
- ・ 自己表現(自己表現カード+面接)を必須に
- ・ 学力検査:調査書:自己表現=6:2:2
- ・ 各学校独自の「特色枠」を設定可に(定員の50%以内)

大阪府 2026年度～

- ・ ボランティア、探究活動、起業、クラブ活動などを重点的に評価する「特色枠」を新設
- ・ 複数校志望制を導入。第一志望を不合格になっても、第二志望の選抜を受けられる。
- ・ 入試日程の3月→2月への前倒し

愛知県 2023年度～

- ・ 「特色選抜」を導入。(面接+作文 基礎学力検査 プレゼンテーション 実技検査 から1つ で選抜)
- ・ 複数校志望制を導入。Aグループ、Bグループからそれぞれ第一志望、第二志望を選択。
- ・ 面接の有無は各学校ごとに判断

埼玉県 2027年度～

- ・ 自己評価資料の提出と面接をすべての受験生に求める
- ・ 共通選抜(旧来の一般選抜)に加え、各高校の判断で「特別選抜」を実施できるようにする(学力検査・調査書・面接に加え、実技検査・小論文等の実施や学力検査等の傾斜配点を行うことができる)

全国的な趨勢としては「面接重視」「ペーパーテスト以外の評価重視」の方向。一方で、神奈川県のように従来必須としてきた面接をとりやめる動きもある(背景に面接の形骸化／学校ごとの取り扱いの格差)

(出所)小村俊平ベネッセHD経営企画推進本部長 発表資料をもとに作成

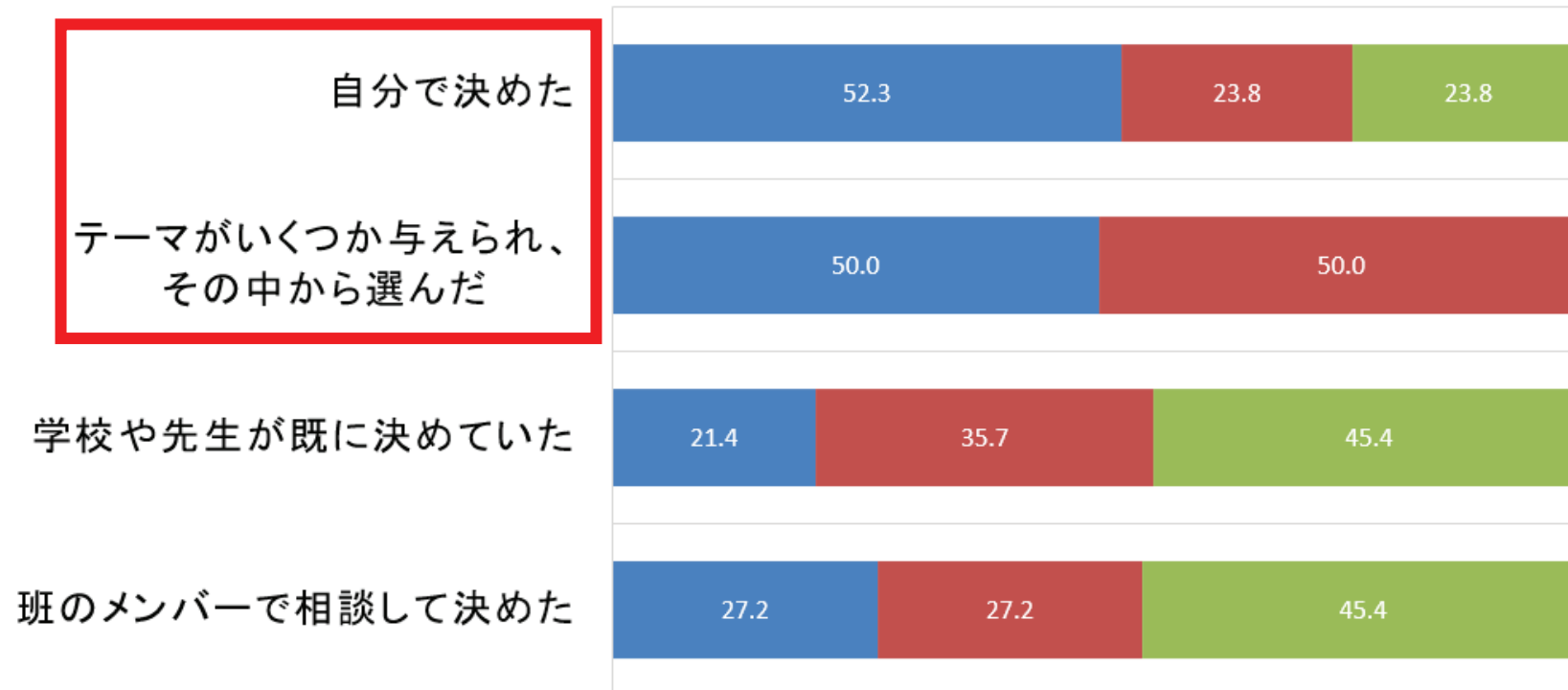
探究テーマの設定とキャリア観の関係

探究テーマを自分で決めた・選んだ場合に、
探究活動が将来のキャリア形成により大きな影響を与えるとの調査結果

テーマの決め方とキャリア観の関係

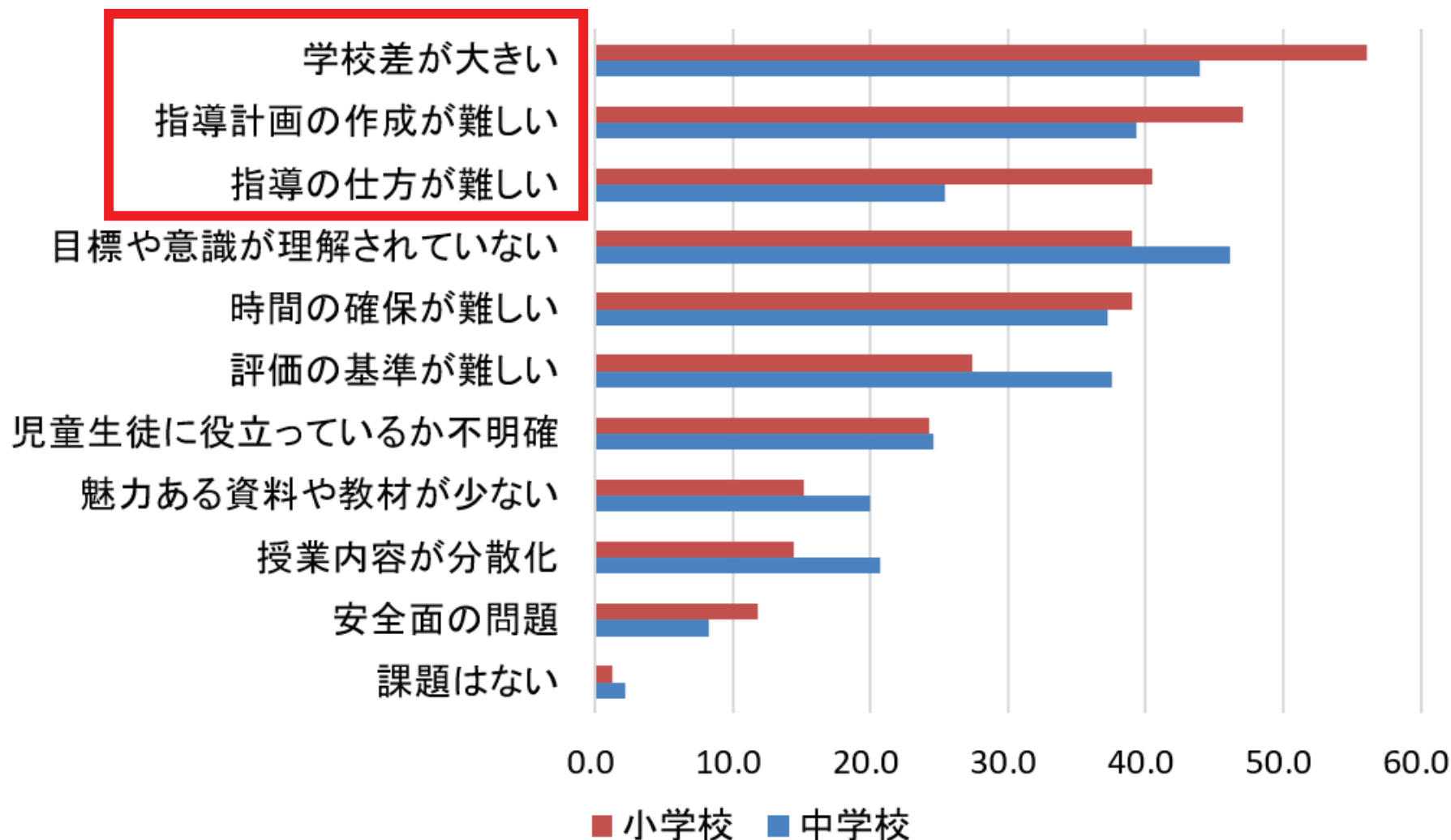
【質問】 探究活動が将来のキャリア選択に影響を与えましたか？

■ はい ■ いいえ ■ わからない



総合的な学習の時間に関する課題（小中学校教員）

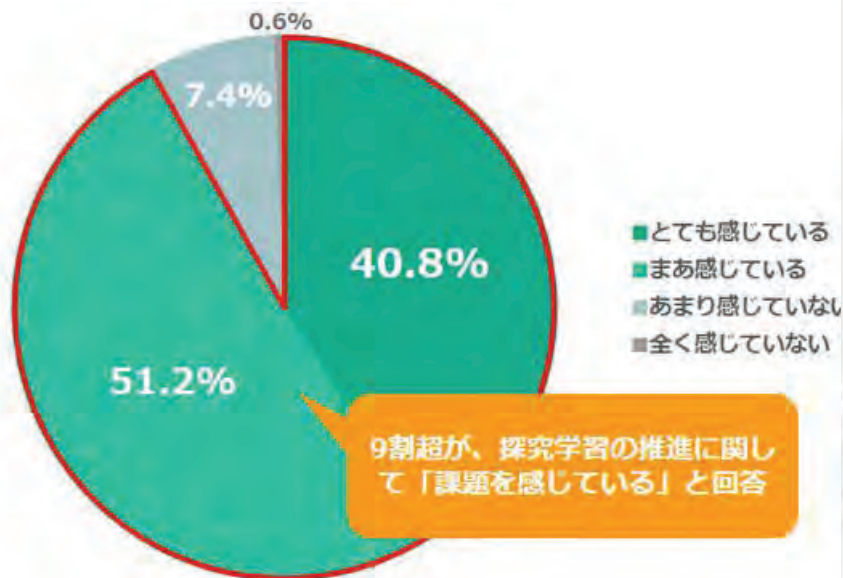
学校差が大きい、指導計画の作成が難しい、指導の仕方が難しい
等の課題感があるとの調査結果



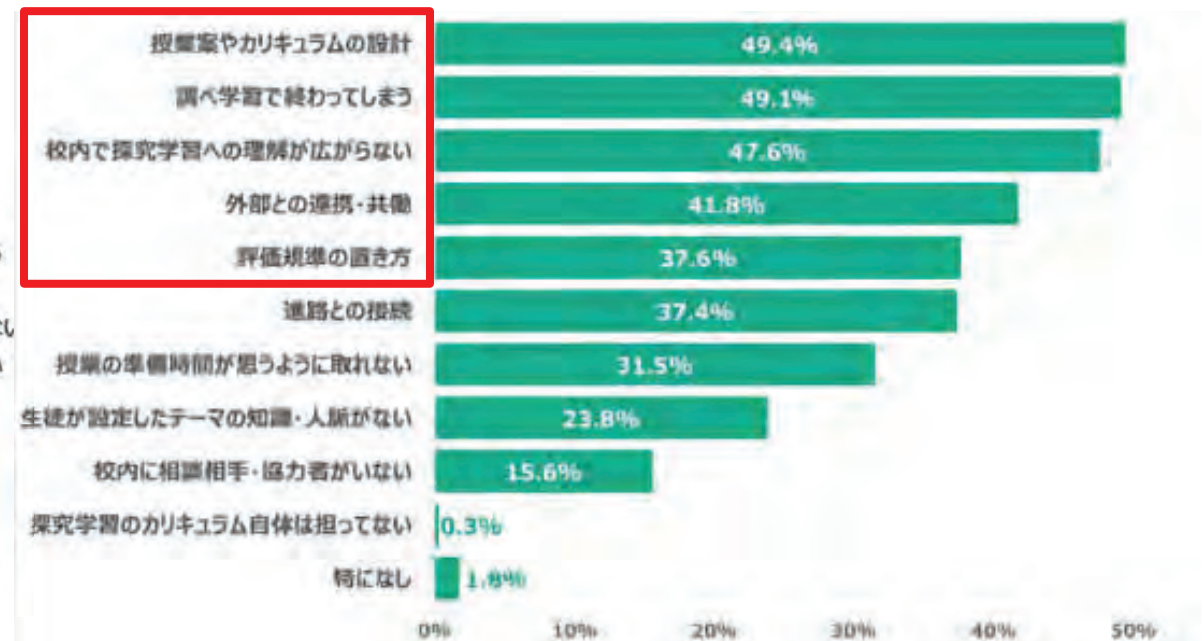
総合的な学習の時間に関する課題（高校教員）

探究に関わる高校教員の9割超が「課題を感じている」と回答し、特にカリキュラムの設計や、調べ学習で終わってしまう等の課題があるとの調査結果

探究学習の推進について、
どの程度課題を感じていますか？



探究学習の推進について、特に課題だと感じるのは
どのようなことですか？

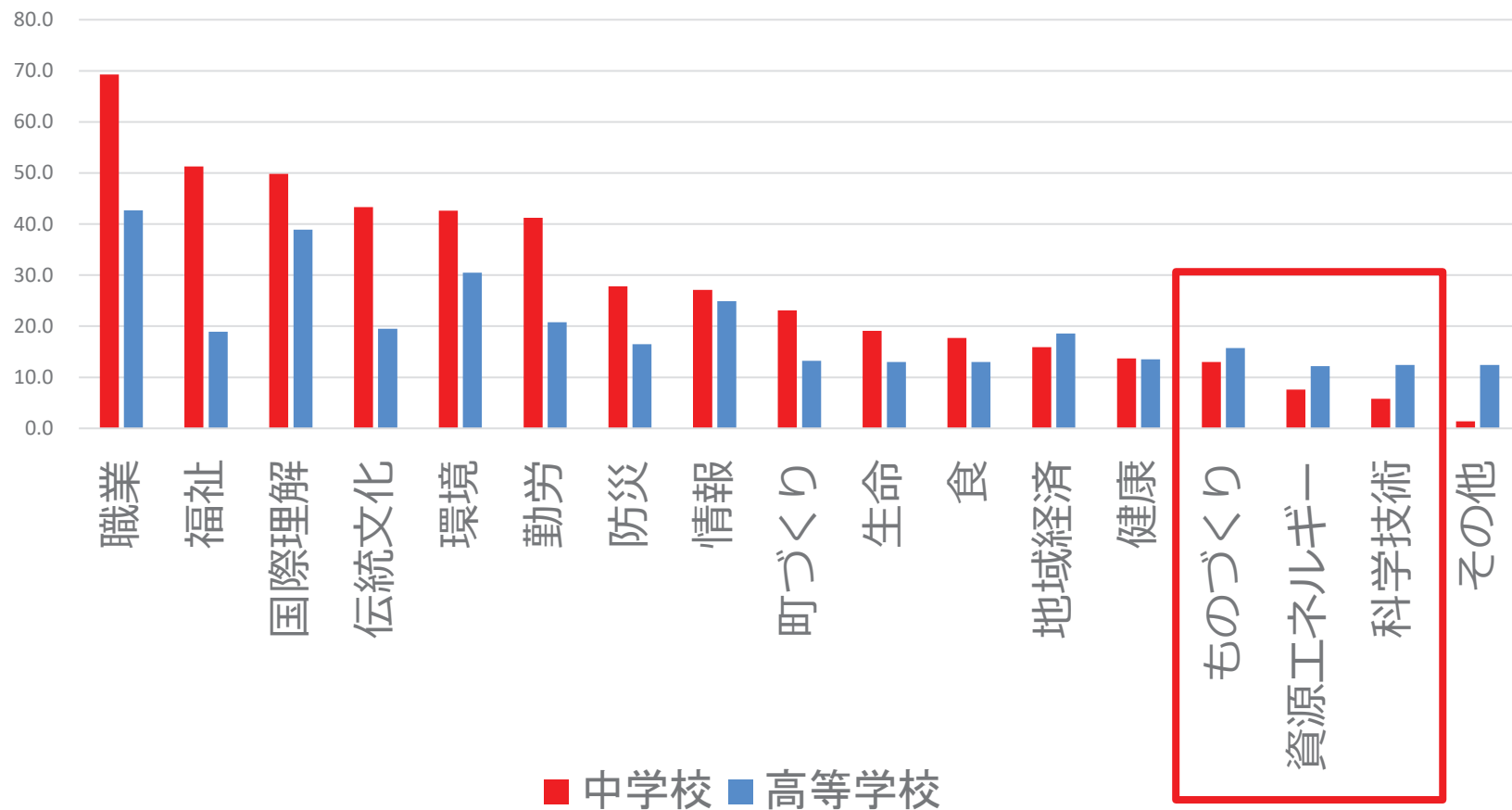


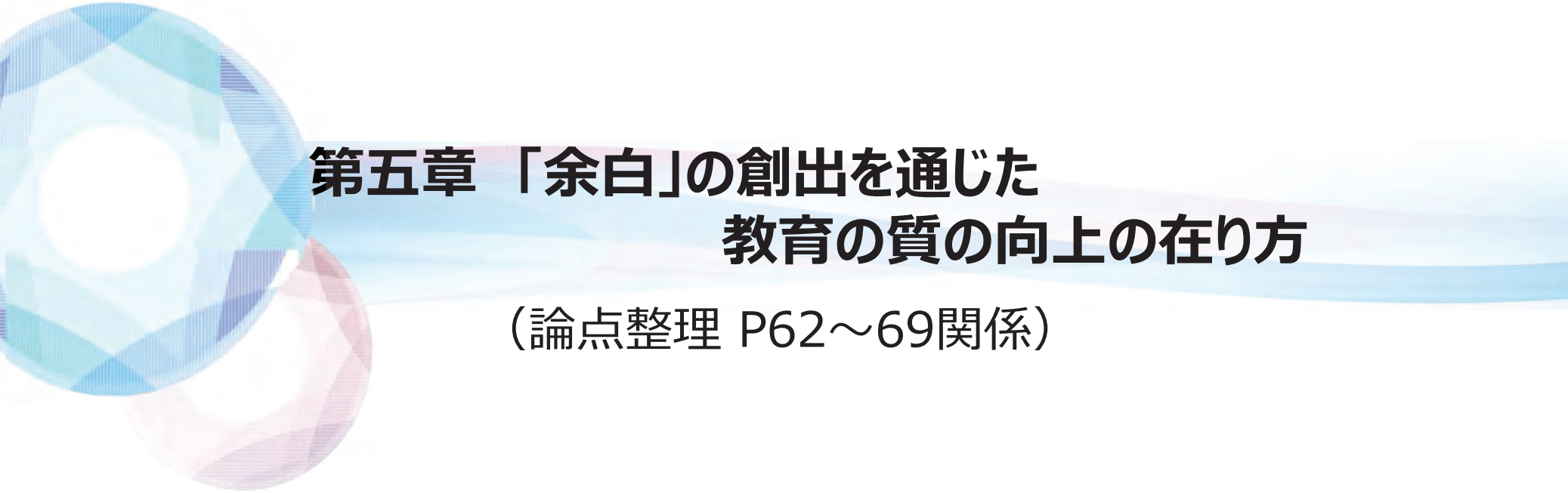
(出典) 特定非営利活動法人カタリバによる調査結果2023
(対象: 生徒たちの探究学習をサポートしている高校教員340名)

総合的な学習の時間に関する課題（高校教員）

テーマ設定に関して、「ものづくり」「資源エネルギー」「科学技術」など、サイエンスに関するものが少ないとの調査結果

探究学習の授業でよく取り扱うテーマ（中高別）





第五章 「余白」の創出を通じた 教育の質の向上の在り方

(論点整理 P62～69関係)

1. 週当たり授業時数の考え方（学習指導要領・解説）

小学校学習指導要領総則

(2) 授業時数等の取扱い

ア 各教科等の授業は、年間35週（第1学年については34週）以上にわたって行うよう計画し、週当たりの授業時数が児童の負担過重にならないようにするものとする。ただし、各教科等や学習活動の特質に応じ効果的な場合には、夏季、冬季、学年末等の休業日の期間に授業日を設定する場合を含め、これらの授業を特定の期間に行うことができる。

小学校学習指導要領解説（総則編）P60

各教科等の授業時数を年間35週（第1学年については34週）以上にわたって行うように計画することとしているのは、各教科等の授業時数を年間35週以上にわたって配当すれば、学校教育法施行規則別表第1において定めている年間の授業時数について児童の負担過重にならない程度に、週当たり、1日当たりの授業時数を平均化することができることを考慮したものである。したがって、各教科等の授業時数を35週にわたって平均的に配当するほか、児童の実態や教科等の特性を考慮して週当たりの授業時数の配当に工夫を加えることも考えられる。各学校においてはこの規定を踏まえ、地域や学校及び児童の実態等を考慮し、必要な指導時間を確保するため、適切な週にわたって各教科等の授業を計画することが必要である。

2. 「不測の事態」で標準授業時数を下回る場合の取扱い（学習指導要領解説）

小学校学習指導要領解説（総則編）P60

なお、学校教育法施行規則第51条において、別表第1に定めている授業時数が標準授業時数と規定されているのは、①指導に必要な時間を実質的に確保するという考え方を踏まえ、各学校においては、児童や地域の実態を十分に考慮して、児童の負担過重にならない限度で別表第1に定めている授業時数を上回って教育課程を編成し、実際に上回った授業時数で指導することが可能であること、②別表第1に定めている授業時数を踏まえて教育課程を編成したものの災害や流行性疾患による学級閉鎖等の不測の事態により当該授業時数を下回った場合、その確保に努力することは当然であるが、下回ったことのみをもって学校教育法施行規則第51条及び別表第1に反するものとはしないといった趣旨を制度上明確にしたものである。

現行教育課程における単位授業時間の多様な設定例

- ◆ 実現したい教育活動に応じて、総授業時数を確保した上で、単位授業時間を柔軟に運用している例が見られる。
- ◆ 45分の単位時間を5分短縮するだけでなく、15-20分の短い時間を設ける、100分といった長い授業時間を設ける、短い時間と長い時間を組み合わせて活動の特質に応じて組み合わせるなど、多様な工夫が行われている。

横浜市立奈良小学校

- 午前中は40分×5コマを実施
- 午後は20分・40分の1コマずつを実施し柔軟に運用（例：20分を個別のスキル学習に充てる、20分と40分のコマを組み合わせる60分じっくり探究する時間を設ける等）

0830	登校～朝の会	
0910	1時限目	40分
0915	2時限目	40分
0955	3時限目	40分
1000		
1040	中休み	
1100	4時限目	40分
1140	5時限目	40分
1145		
1225	給食・清掃・昼休み	
1340	学習タイム	20分
1400	6時限目	40分
1440	帰りの会	
1450		

必要に応じて統合

東浦町立緒川小学校

- 2コマ分を連続させたブロックを基本とし、じっくりと学びに取り組む時間を確保
- 児童の活動の実態に応じて、教科間の時間の切れ目は柔軟に運用

0855	読書タイム、朝の会	
	Iブロック	95分
1030	中休み	
1055	IIブロック	95分
1230	給食・清掃・昼休み	
1355	IIIブロック	95分
1530	帰りの会	
1540		

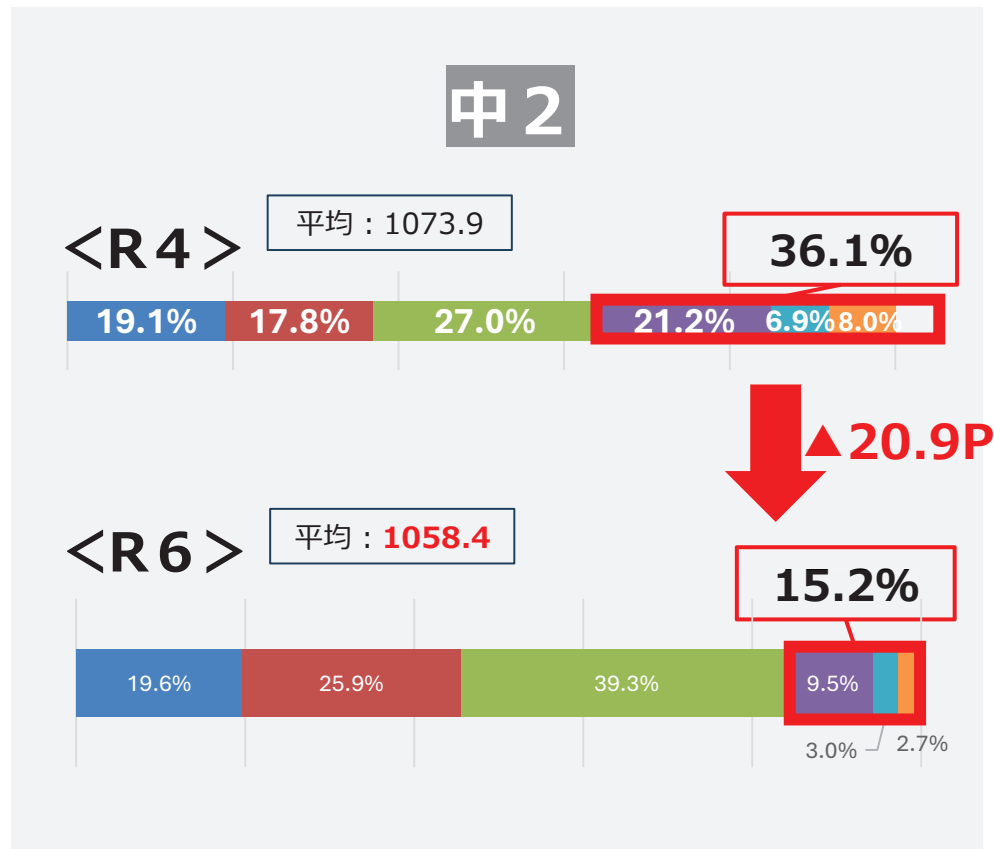
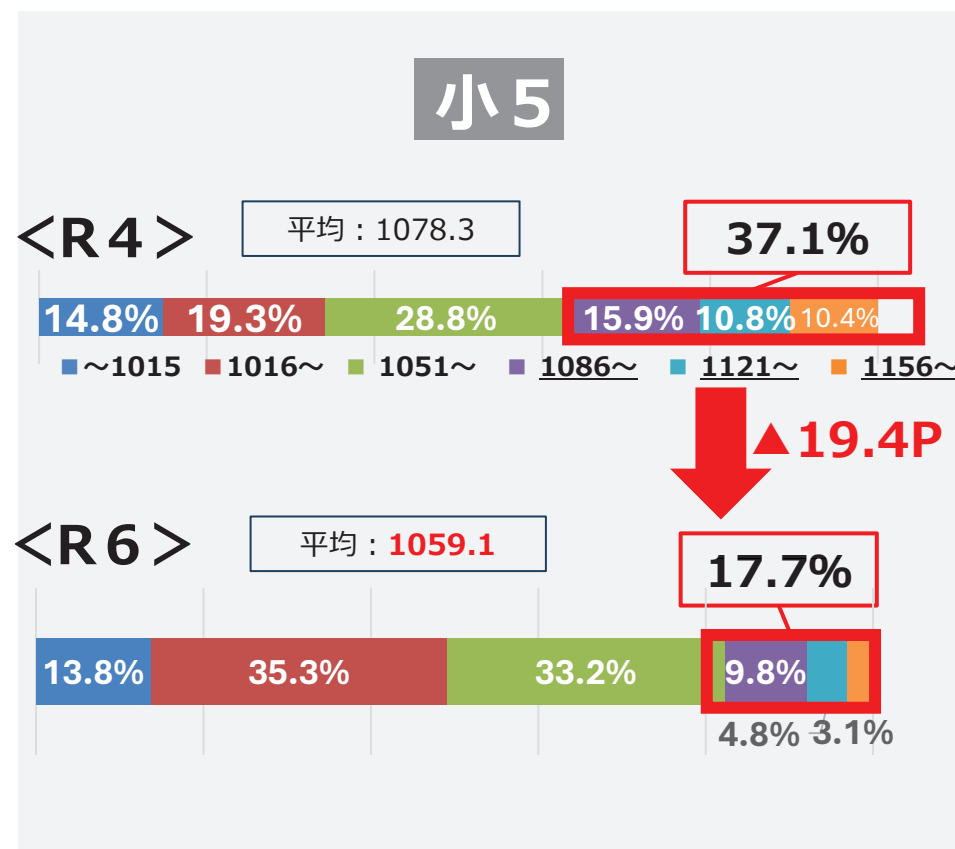
さいたま市立大宮国際中等教育学校

- 50分2コマ分を連続させたタームを基本とし、じっくりと学びに取り組む時間を確保。
- 朝にオールイングリッシュでの表現活動を行う時間を15分間設ける

0835	出席確認	
0850	英語活動	15分
0900	ターム1	100分
1040		
1055	ターム2	100分
1235	昼食・昼休み	
1335	ターム3	100分
1515	リフレクションの時間	15分
1530	清掃	
1545	放課後活動	
1730		

総授業時数の状況（令和6年度計画段階）

- 標準授業時数（1,015単位時間）に対して、小学校5年で平均1,059単位時間、中学校2年で平均1,058時間の教育課程が編成されている。
- 標準授業時数を大幅に上回る**1,086単位時間以上**の学校は、**大きく減少しているが、依然として20%程度存在。**



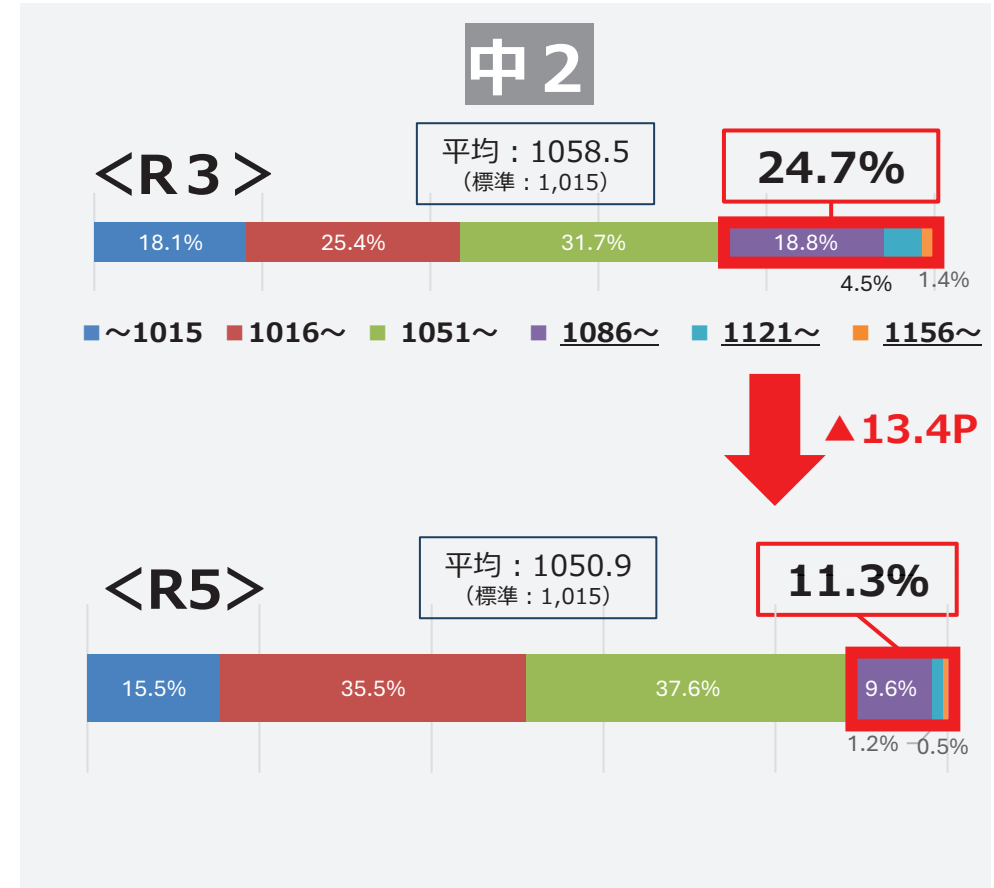
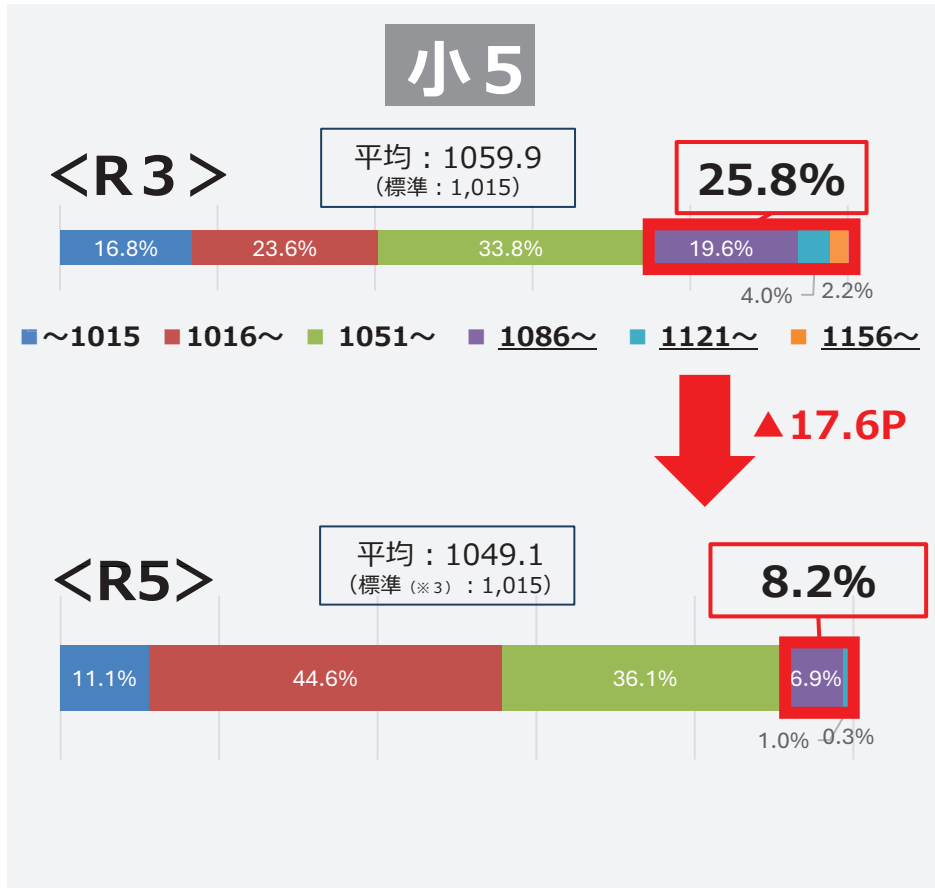
【出所】令和5年度教育課程編成・実施状況調査

※1 学校教育法施行規則に示す各教科、特別の教科である道徳、総合的な学習の時間及び特別活動（学級活動のみ）に充てる年間の授業時数を指し、学級活動以外の特別活動の時間は含まない。

※2 1単位時間は、小学校においては45分、中学校においては50分として計算している。

※3 学校教育法施行規則別表第1・別表第2に定める標準授業時数を指す。

総授業時数の状況（令和5年度実績）



【出所】令和5年度教育課程編成・実施状況調査

※1 学校教育法施行規則に示す各教科、特別の教科である道徳、総合的な学習の時間及び特別活動（学級活動のみ）に充てる年間の授業時数を指し、学級活動以外の特別活動の時間は含まない。

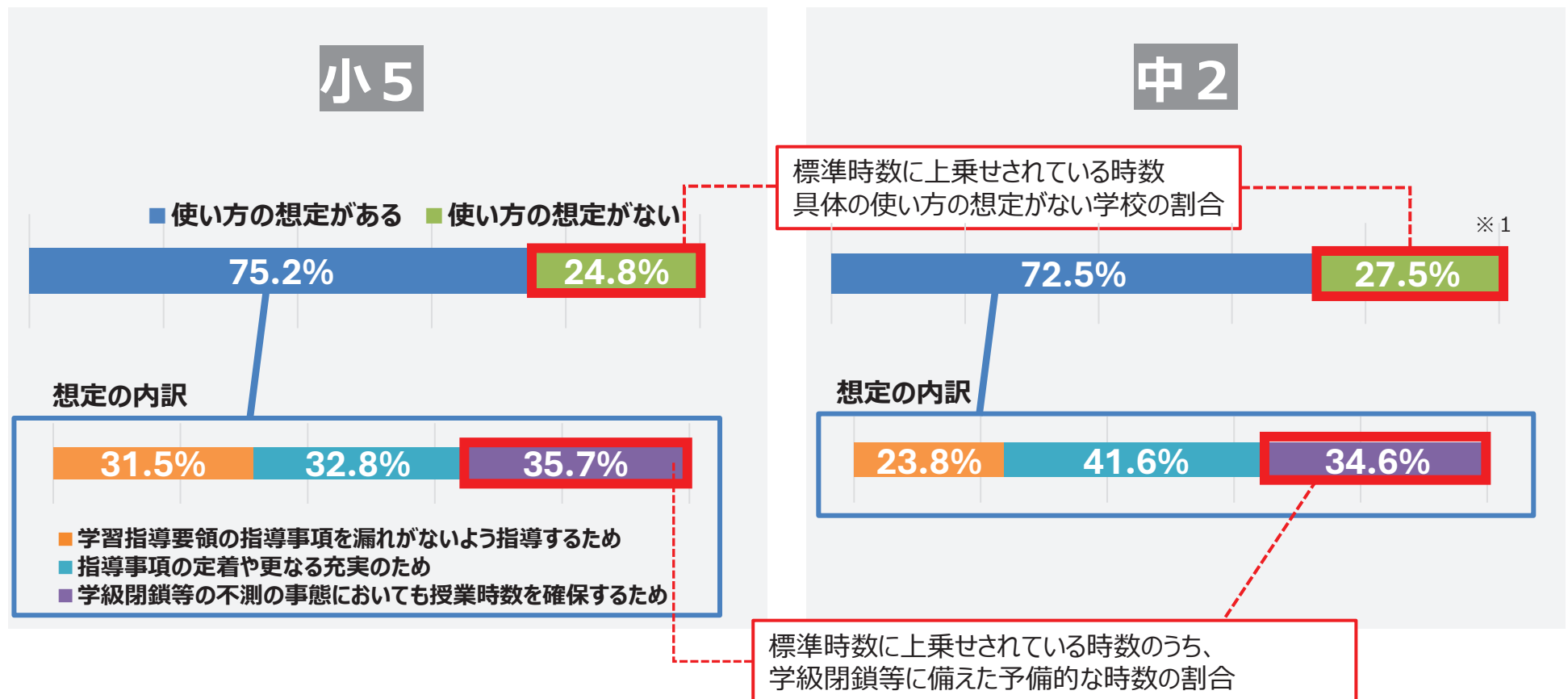
※2 1単位時間は、小学校においては45分、中学校においては50分として計算している。

※3 学校教育法施行規則別表第1・別表第2に定める標準授業時数を指す。

※4 平成29年度は中学校第1学年の授業時数の実績の数値。

標準を大幅に上回る時数の使い道の想定

- 1,086単位時間以上の教育課程を編成している学校のうち、標準授業時数（1,015単位時間）を上回る部分の**具体的な使い方を想定していない学校が約25%程度存在**。真に必要な時間か検討し、改善を図る必要。
- 標準に上乘せされている時数の約35%が**学級閉鎖等の不測の事態のための予備的な時数**に充てられている（国はこうした事態で標準を下回ったことのみをもって法令に反するものではないことを示している）。



【出所】令和6年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査

※母数は令和6年度の授業時数について、1,086単位時間以上と回答した学校数（小：3,249校、中：1,394校）。

週当たり授業時数の考え方と実態

1. 週当たり授業時数に係る考え方

「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について(答申)(抄)

国が定める年間の標準授業時数の1,015単位時間を35週(※1)にわたって実施することを前提に、**週当たり29単位時間の授業を行う必要があるとの認識が学校には根強く、標準授業時数を大幅に上回った教育課程編成の見直しを学校が実施することが困難**との指摘もある。しかし、実際には年間の授業日数は200日程度(40週)が一般的であり、**必ずしも1,015単位時間を確保するために週29単位時間の授業を実施する必要はない**(※2)。

※1 小学校学習指導要領の総則には「各教科等の授業は、年間35週(第1学年については34週)以上にわたって行うよう計画し、週当たりの授業時数が児童の負担過重にならないようにするものとする」と記載(中学校も同様)

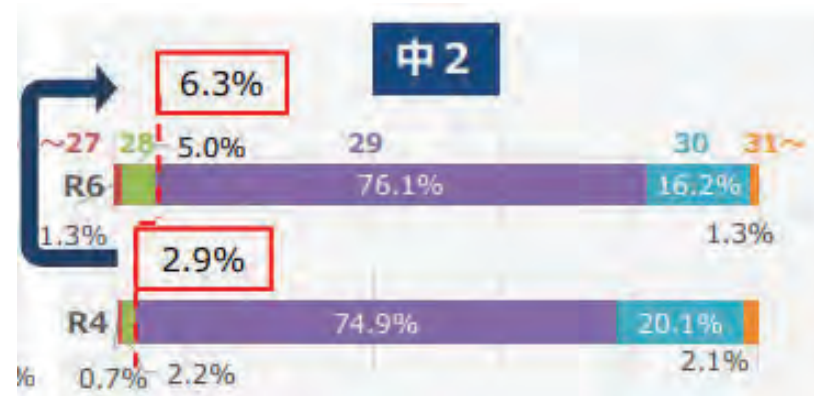
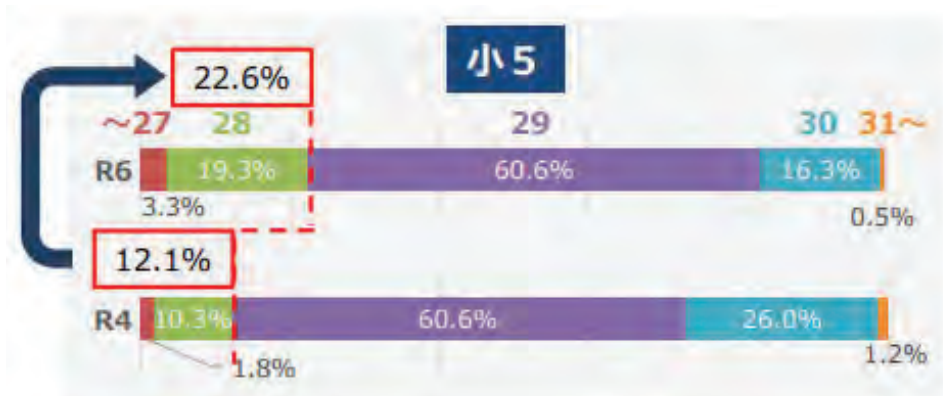
※2 年間の標準授業時数1,015単位時間を週当たり27単位時間で実施した場合、 $1015\text{単位時間} = 27\text{単位時間} \times 37.6\text{週}$ (188日)となる。

年間の総授業日数の平均※令和6年度計画ベース
小学5年 202.4日 中学2年 203.0日

35週で実施する場合の週当たりコマ数
 $1015\text{単位時間} \div 35\text{週} = 29\text{単位時間/週}$

2. 週当たり授業時数の実態

小学校、中学校いずれも週当たり授業時数を28コマ以下で設定する学校の割合が増えているが、
小学校5年では約60%、中学校2年では約75%の学校は29コマに設定している。



現行の教育課程における 週当たり授業時数の工夫例



＜東京都渋谷区立笹塚小学校＞

- 渋谷区として総授業時数の計画が標準授業時数となるように域内の学校に指導・助言。
- 週当たりの授業時数を28単位時間に設定し、水曜日を4コマ、それ以外の曜日を6コマに設定。
- 授業間の休憩を5分にすることや、普段の清掃は係活動の一環として日常で行い、一斉の清掃活動は水曜日のみ行う等の工夫で、6コマの日でも下校時刻を15:00に設定
- 水曜日を4コマに(児童の最終下校時刻を13:00に設定し、午後を教員研修やスキルアップの時間として活用)

＜東京都八王子市教育委員会＞

- 市として、総授業時数は標準授業時数に18単位時間を加えた時数を上限とし、週当たりの授業時数は28単位時間を上限とする指針を示し、所管の学校に指導・助言。
- 各学校がこれを踏まえて教育課程編成を工夫し、全小・中学校で週当たり授業時数を27単位時間又は28単位時間とする教育課程編成を実現。

＜埼玉県深谷市教育委員会＞

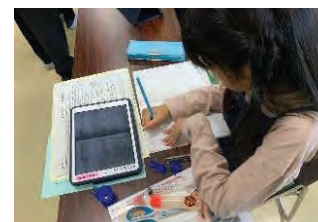
- 各学校の校長・教職員から意見聴取した上で、市教委が具体的な週時程や時間割、時数計算等の例を示し、週当たり授業時数が28単位時間になるよう指導・助言。
- 各学校がこれを踏まえて教育課程を編成し、域内の全小・中学校等で週当たり授業時数を28単位時間以下とする教育課程を実現。

研究開発学校の取組

(目黒区立中目黒小学校・愛荘町立秦荘西小学校)

1. 特例の概要

- 1単位時間を45分から40分に変更し、午前中に5コマの授業を設定することで、標準総授業時数を下回って時間を生み出す
- 生み出された時間を活用し、子供の主体性を伸ばす教育活動、授業改善に繋がる教員研修や教材研究等に充当



- 通常の授業の中でもICTを活用することで、短くした1コマの中でも効果的な指導を行う。
- 1コマが短くなったことで、通常の授業においても、単元としてのつながりや、見方・考え方を働かせる授業デザインをより意識した授業を展開。

2. 生み出した時間の使い道

目黒区

- 子供が教材・ペースを自分で選びながら学ぶ単元内自由進度学習（マイプラン学習）を行ったり、子供たちが自分でテーマを決めて主体的に学ぶ時間（フリースタイルプロジェクト）を設けたりするなど、子供の主体性を伸ばす教育活動を展開。教員の研修や授業準備等も実施。
- 全国学調の正答率に大きな変化はなく、学校により状況に差はあるが、時間外在校等時間の減少といった成果もみられる。

学力各教科正答率（％）								
	令和5年度		令和4年度		令和3年度		令和元年度	
	国語科	算数科	国語科	算数科	国語科	算数科	国語科	算数科
研究開発学校（15校）	74.3	72.5	73.7	72	73.2	77	71.2	72.8
全国平均	67.2	62.5	69	67	64.7	63.8	63.8	66.6
都平均	69	67	65.6	63.2	68	65	65	70

【表1】月当たりの時間外在校等時間（平均時間）

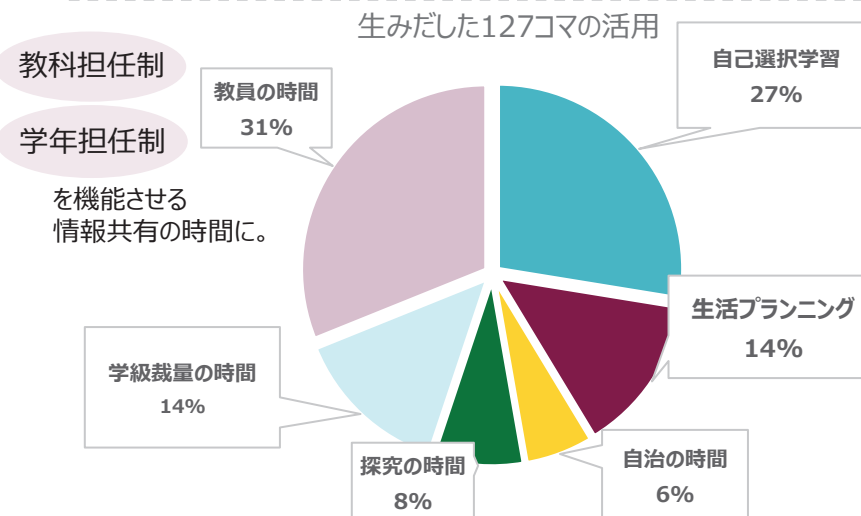
令和3年度（4月～3月）	50:16
令和4年度（4月～3月）	44:04

- 6:12

出典：令和5年研究開発学校目黒区報告資料より

愛荘町

- 目黒の取組に加え、自己調整力を育成する時間に充てたり、教員間での児童に関する共通理解を図るための情報交換や相談、授業づくり・教材研究に関する研修やOJT等を実施。



目黒区の研究開発学校における日課表の事例 （2025年度 目黒区立鷹番小学校4～6年の事例）

1 単位時間を5分間短縮（45分→40分）して生み出した時間（127コマ）を活用し、
85コマ：子供の主体性を伸ばす学習活動のための時間 **42コマ：教員の研修や授業研究のための時間**（※1,2） に活用。

※1 日課表の研修・研究等の時間は、生み出した時間と従来の教師の放課後の時間を組み合わせて実施。

※2 休憩時間を除く。

※3 個々の教師の持ちコマについては、教科担任制により空きコマがあることに留意。

※4 日課表や生み出した時間の活用の在り方は学校ごとに異なる。

	月	火	水	木	金
8:10	登校				
8:20	朝の会				
8:30	目標づくり・振り返り・ 主体的な活動の時間 (月 2 回程度・ 1 ～ 5 限のうち 1 コマ)	1 限	異学年交流 (月 1 回程度・ 2 ～ 5 限のうち 1 コマ)	1 限	
	2 限・3 限				
10:40	休み時間				
11:00	4 限・5 限				
12:25	給食				
13:10	昼休み		6 限 (60分)	昼休み	
13:30	全校昼会	体力向上・読書		掃除	集会・音楽昼会
13:50	掃除			委員会 (45分) クラブ(60分)	自己選択学習
14:10	6 限				
	帰りの会		帰りの会	帰りの会	
	下校 15:05		下校 14:35	下校 15:00 or 15:15	下校 14:45
	基礎基本の自主学習 (希望者30分)	児童理解の時間	基礎基本の自主学習 (希望者30分)	指導力向上の時間 (学年会、研修等) or 教師の裁量的時間	
15:40	教材研究		会議など		
	教師の休憩時間 (会議などは原則入れない)				
16:40	夕会	教師の裁量的時間			生活指導夕会

学習指導要領-教科書-教師用指導書の関係①

【ポイント】学習指導要領も解説も、取扱う事実的知識を網羅的に指定してはいない

● 中学校学習指導要領〔歴史的分野〕 鎌倉時代関連

2 内容

B 近世までの日本とアジア

(2) 中世の日本

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 武家政治の成立とユーラシアの交流

鎌倉幕府の成立、元寇（モンゴル帝国の襲来）などを基に、武士が台頭して主従の結び付きや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったこと、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解すること。

イ 次のような思考力・判断力・表現力等を身に付けること。

(ア) 武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商工業の発達などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、アの（ア）から（ウ）までについて中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現すること。

(イ) 中世の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること。

● 中学校学習指導要領解説（社会編） 抜粋

この事項のねらいは、武家政治の特徴を考察して、武士が台頭して武家政権が成立し、その支配が広まったこととともに、元寇（モンゴル帝国の襲来）がユーラシアの変化の中で起こったことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである。

学習に際しては、例えば、この中項目（2）のイの（ア）に示された「武士の政治への進出と展開」などに着目して、武家政治の特徴を考察できるようにしたり、イの（ア）に示された「東アジアにおける交流」などに着目して課題（問い）を設定し、モンゴル帝国の拡大の様子を背景に考察したりできるようにすることなどが考えられる。これらの考察の結果を表現する活動などを工夫して、「武士が台頭して主従の結び付きや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったこと、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解できるようにする」という、この事項のねらいを実現することが大切である。

鎌倉幕府の成立については、武士が台頭して、武家政権が成立し、その支配が広まるという、武家政治の成立の背景と推移を扱うようにする。また、天皇や貴族の政治との違いという観点から、古代から中世への転換の様子に気付くことができるようにする。元寇（モンゴル帝国の襲来）については、元寇が国内に及ぼした影響などに気付かせるとともに、元寇の背景について、「モンゴル帝国の拡大によるユーラシアの結び付き」

（内容の取扱い）などの地理的な確認を基に、元（中国を中心としたモンゴル帝国東部）の君主が帝国全体の君主でもあったことなどを踏まえ、モンゴル帝国がアジアからヨーロッパにまたがる広大な領域を支配し、東西の貿易や文化の交流が陸路や海路を通して行われたことなどに気付くことができるようにする。

学習指導要領-教科書-教師用指導書の関係②

【ポイント】検定教科書では、学習指導要領の該当部分に対応して10ページ程度が確保され、多くの用語や発展的要素等が盛り込まれている

※著作権者への配慮から一部図について掲載を控えております

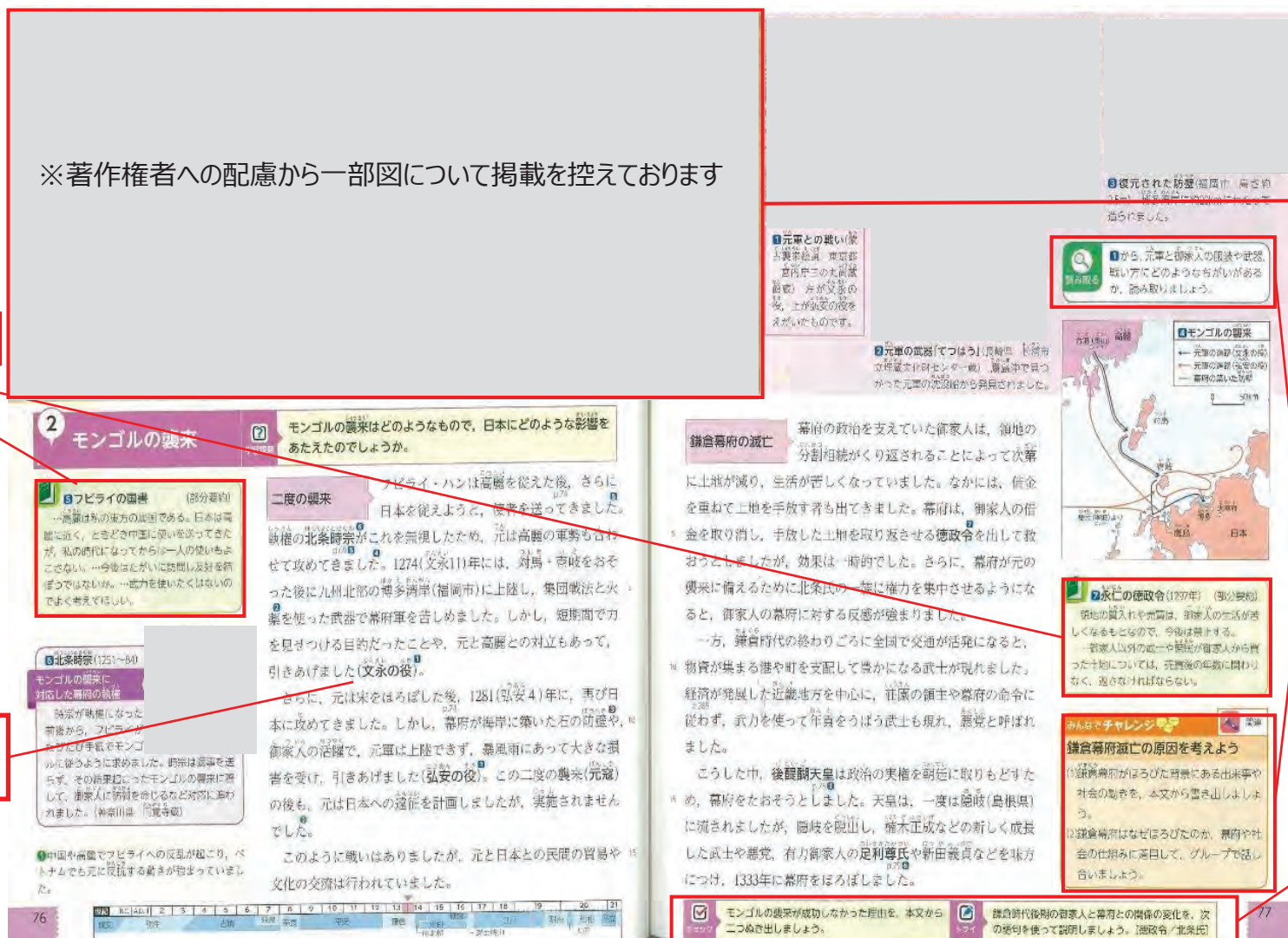
・コラム的資料

・本文上で7つの太字の単語

・図・写真などの資料の充実

・資料の読み取りや協働的な活動など多様な学習活動の例示

・振り返り



学習指導要領-教科書-教師用指導書の関係③

【ポイント】教師用指導書は、時間配分や板書例、配当時間などを丁寧に記載

第1学年(105時間)			
月	時	地理	歴史
4月	6	持続可能な社会の実現に向けて(地理) 1編1章 世界の姿 1編2章 日本の姿 ★数学 6	
5月	12	2編1章 世界各地の人々の生活と環境 ★理科 10	持続可能な社会の実現に向けて(歴史) 1章 歴史へのとびら ① 4 ② ★技術 2 2章 古代までの日本 導入 1 ①(前半) 2
6月	12		
7月	6		
評価などの予備時間 2			
9月	12		①(後半) ★国語・英語 3 ② 3 ③ ★国語 8 まとめ 2
10月	12		地域の歴史を調べよう ★英語 6
11月	12	2編2章 世界の諸地域 ① 7 ② ★理科 5 ③ 4 ④ 5	
12月	9		
評価などの予備時間 2			
1月	9	⑤ 4 ⑥ 4	
2月	12		3章 中世の日本 導入 1 ① ★国語 5 ② 7 まとめ 2
3月	3		
評価などの予備時間 1			
合計		地理 (53)	歴史 (47)
評価などの予備時間 5			

2節 ユーラシアの動きと武士の政治の展開 (配当7時間)			
◆評価標準の例(節全体)		※は学習指導要領との関連	
指導目標	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・元寇(モンゴル帝国の襲来)などを基に、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解させる。	○元寇(モンゴル帝国の襲来)などを基に、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解している。	○南北朝の争乱と室町幕府、日明貿易、琉球の国際的な役割などを基に、武家政治の展開と東アジア世界との密接な関わりが見られたことを理解している。	○武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商業の発達などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、ユーラシアの交流、武家政治の展開と東アジアの動き、民衆の成長と新たな文化の形成について、中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。
・南北朝の争乱と室町幕府、日明貿易、琉球の国際的な役割などを基に、武家政治の展開とともに、東アジア世界との密接な関わりが見られたことを理解させる。	○農業など諸産業の発達、戦内を中心とした都市や農村における自治的な仕組みの成立、武士や民衆などの多様な文化の形成、応仁の乱後の社会的変動などを基に、民衆の成長を背景とした社会や文化が生まれたことを理解している。	○武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商業の発達などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、ユーラシアの交流、武家政治の展開と東アジアの動き、民衆の成長と新たな文化の形成について、中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	○ユーラシアの交流、武家政治の展開と東アジアの動き、民衆の成長と新たな文化の形成について、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。

◆評価標準の例(各時間)			
学習時間	主な学習内容	学習目標	評価標準の例
33	1 モンゴル帝国とユーラシア世界 (p.74～75) 遊牧民の生活 モンゴル帝国の拡大 ユーラシア世界の形成	モンゴル帝国がユーラシア世界に及ぼした影響を、大陸内の結び付きに着目して考察し、表現する。	●モンゴル帝国がユーラシア世界に及ぼした影響を、大陸の一体化とその影響に関連付けて考察し、表現している。(思考表)
34	2 モンゴルの襲来 (p.76～77) 二度の襲来 鎌倉幕府の滅亡	モンゴルの襲来と日本への影響について、主従関係に着目して考察し、表現する。	●モンゴルの襲来と日本への影響について、御家人の動きと関連付けて考察し、表現している。(思考表)
35	3 南北朝の動乱と室町幕府 (p.78～79) 南北二つの朝廷 守護大名と地方の動き 室町幕府の支配の確立	建武の新政から南北朝の動乱に至る経過を理解する。 室町幕府の特徴を鎌倉幕府の仕組みと比較して考察し、表現する。	●守護が新たな権限を与えられて守護大名となり、後の政治に影響を及ぼしたことを理解している。(知技) ●建武の新政から南北朝の動乱に至る経過や、動乱がもたらした武家社会の変化を考察し、表現している。(思考表)

・年間を通じた配当時間、各単元や教科書のページごとの時間などを丁寧に記載

展開例	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	資料 ③	①【説明】資料 ③を提示し、フビライの要求内容を説明する。	●資料 ③を活用し、北条時宗の対応について説明する。
2 学習課題 (10分)	資料 ①～④	②【作業】資料 ①②から、元軍と御家人の戦い方の違いを読み取らせる。 ③【説明】資料 ③から、元軍が2度まで襲来してきたことや幕府が防壁を築いて上陸を防ごうとしたことを説明する。	●服装や武器、戦法の違いに留意させる。 ●防壁の高さや離れた距離に着目させ、防壁が築かれた場所に元軍が上陸できなかったことに気付かせる。 ●御家人の生活が窮乏していたことに気付かせる。
鎌倉幕府の滅亡 (36分)	資料 ⑤	④【発問】資料 ⑤などから、幕府が滅亡した理由を、モンゴルの襲来の影響や社会の変化から考えさせる。 「鎌倉幕府はなぜ倒れたのでしょうか。」 ⑤【話し合い】【作業】⑤の問いに取り組みさせ、幕府が滅亡した原因について、グループで話し合い「くらげチャート」を作成させる。 ⑥【発表】グループごとに作成した「くらげチャート」を提示しながら発表させる。 生徒の反応 ◆分割相場で御家人の生活が苦しくなった ◆近畿地方で悪党が現れた	●「くらげチャート」については、教科書p.60～61を参考にさせる。 ●幕府に不満を持つ人々の存在に気付かせる。
学習のまとめ (5分)		⑦【作業】⑥の問いに取り組みさせる。	

・授業内の時間配分や板書例を記載

2. モンゴルの襲来と日本

(鎌倉幕府の滅亡) くらげチャート(例)

モンゴルの襲来はどのようなもので、日本にどのような影響をあたえたのでしょうか。

なぜ鎌倉幕府は倒れたのか？
例：モンゴルの襲来での被害が大きく、賠償が不十分で、分断相場で領地が小さくなっていった御家人たちは、権力が集中する北条一族に反感を持つようになっていったから。

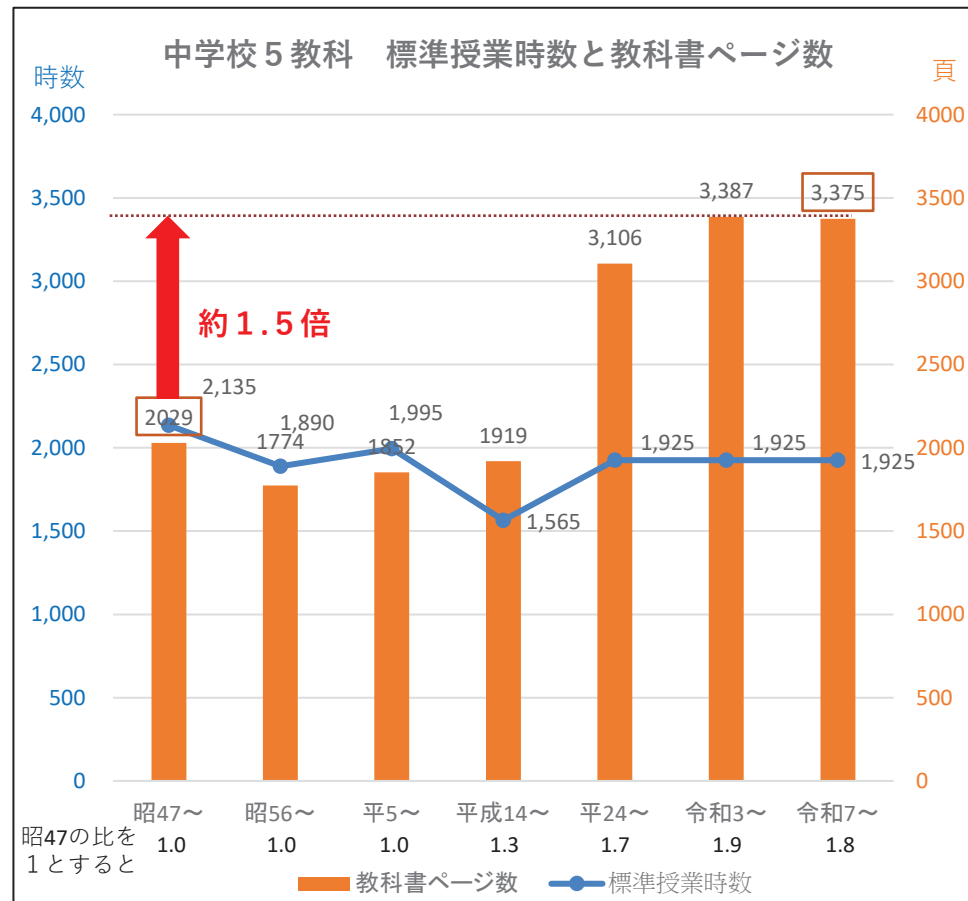
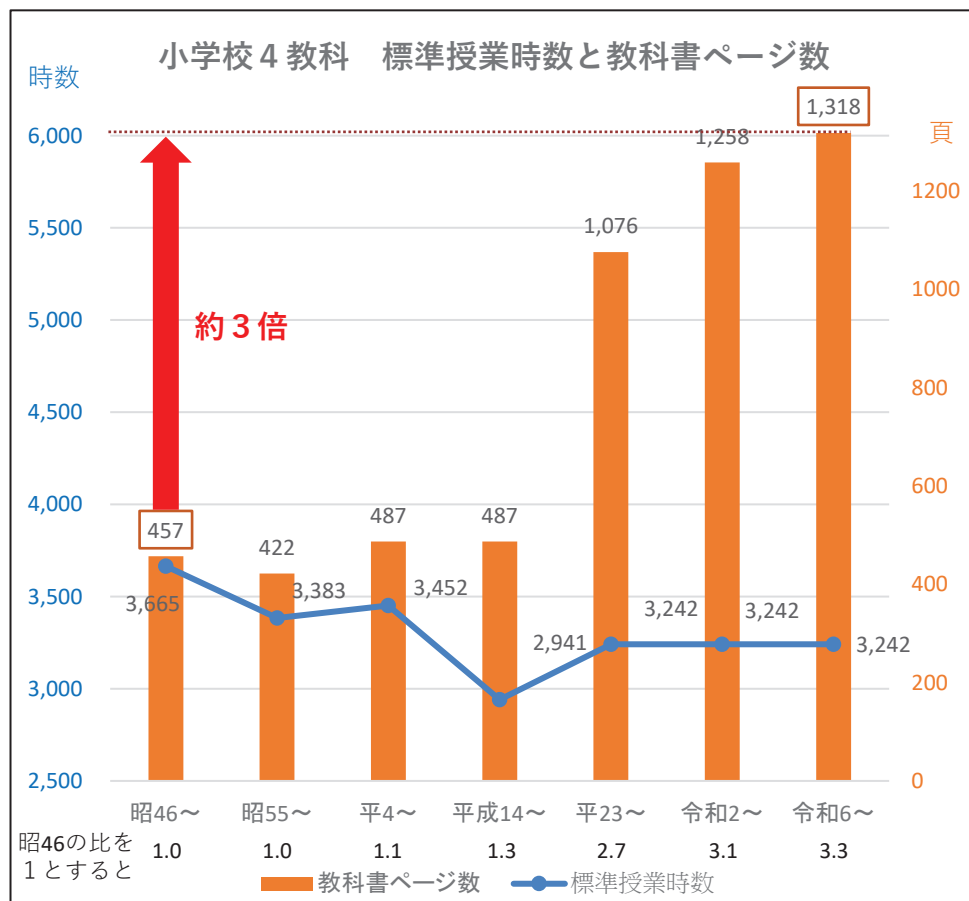
領地の分断相場で生活が苦しくなった。
幕府の命令に逆らった。
北条一族の権力が集中した。
御家人の生活が窮乏した。
御家人の生活が苦しくなった。
御家人の生活が苦しくなった。

元寇(二度の襲来)…元寇
元のねらい＝日本の征服 ← 執権北条時宗 無視
元軍の攻撃 集団戦法 火薬を使った武器
1274年 文永の役 元と高麗の対立 失敗
1281年 弘安の役 防壁や御家人の活躍 暴風雨 失敗

教科書のページ数の推移（小学校・中学校）

約 50 年前と比較し、小学校 4 教科・中学校 5 教科の

- ◆ 標準授業時数は減少しているものの、
- ◆ 教科書ページ数（A 5 換算）は小学校で約 3 倍、中学校で約 1.5 倍に増加。



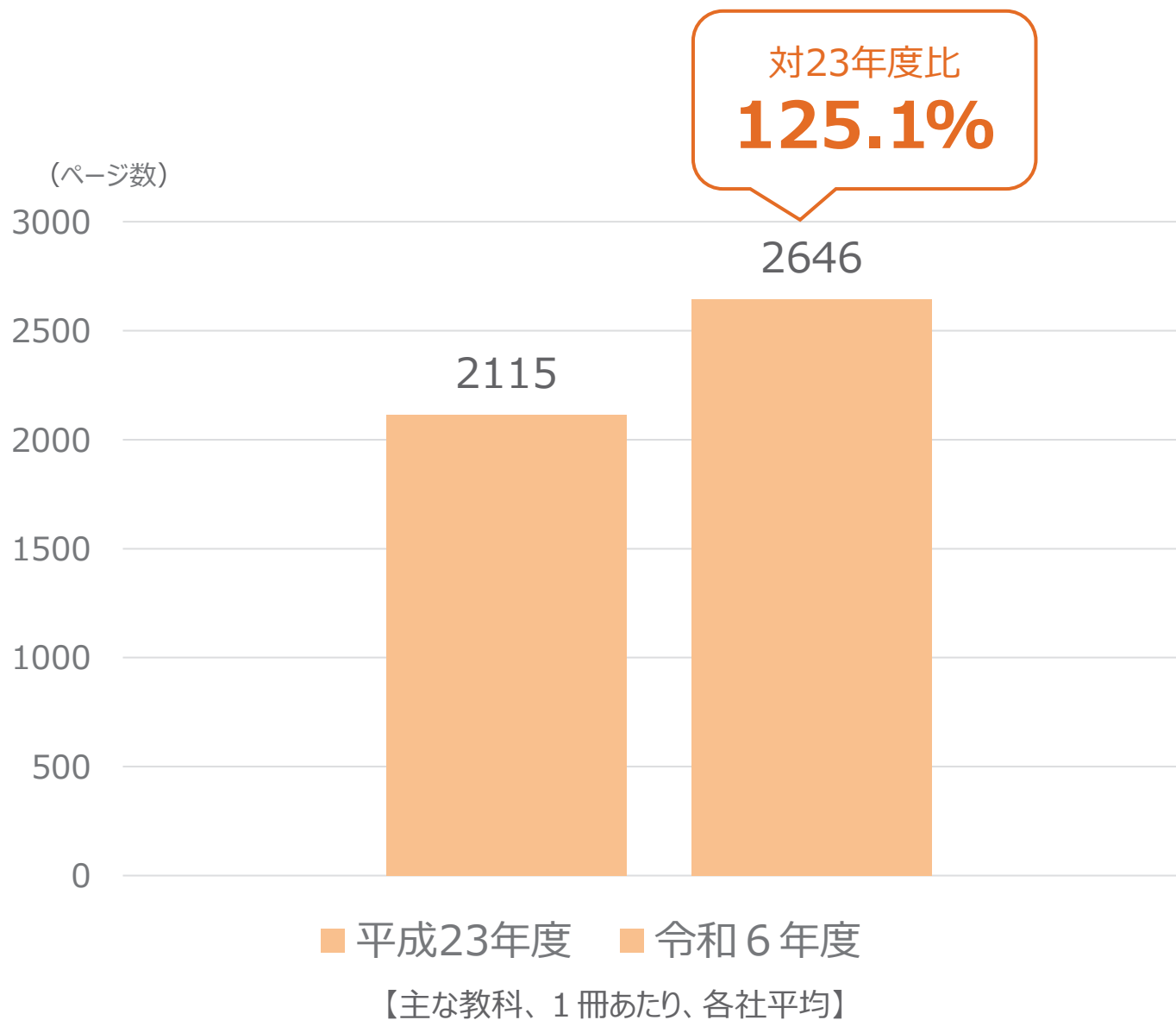
※小学校 4 教科：国語・社会・算数・理科、中学校 5 教科：国語、社会、数学、理科、外国語

※教科書ページ数は、各教科の教科書の平均ページ数を足上げたものであり、A 5 換算。

※A 5 換算ページ数は、A 5 判との面積比を踏まえ、B 5 判は 1.5 倍、A B 判は 1.7 4 倍、A 4 判は 2.0 1 倍して算出。

※平成 4 年の生活科創設に伴い小学校 1、2 年生の社会と理科がなくなったため、標準授業時数・教科書ページ数ともに社会と理科は小学校 3～6 年生の数値としている。

教科書のページ数の推移（高等学校）



教科書の分量や教科書観に関する指摘

1. 今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 論点整理（令和6年9月）

（2）教科書・教材の在り方

- 発展的内容の充実や、新しい学習指導要領への対応などにより教科書の内容は格段に充実し、ページ数が大幅に増えている現状。
- 入試の在り方に関連し、教科書の内容を全て教えなくてはいけないという考え方は依然として根強く、教科書のページ数の多さが、授業進捗の速さや教育課程の実施に当たっての負担感を生んでいる実態も指摘されている。
- 教科書が経験の浅い教師でも充実した指導ができるように工夫されていることが、かえって教師の創意工夫や教師の指導力向上を阻んでいるのではないか、といった指摘もある。校内の研修や教育委員会の支援等を通じて、単に教科書を教えるのではなく、どのような資質・能力を育みたいかという視点から、一人一人の教師が教育計画を立てられるようにしていくことが重要。

2. デジタル教科書推進ワーキンググループ中間まとめ（令和7年2月）抜粋

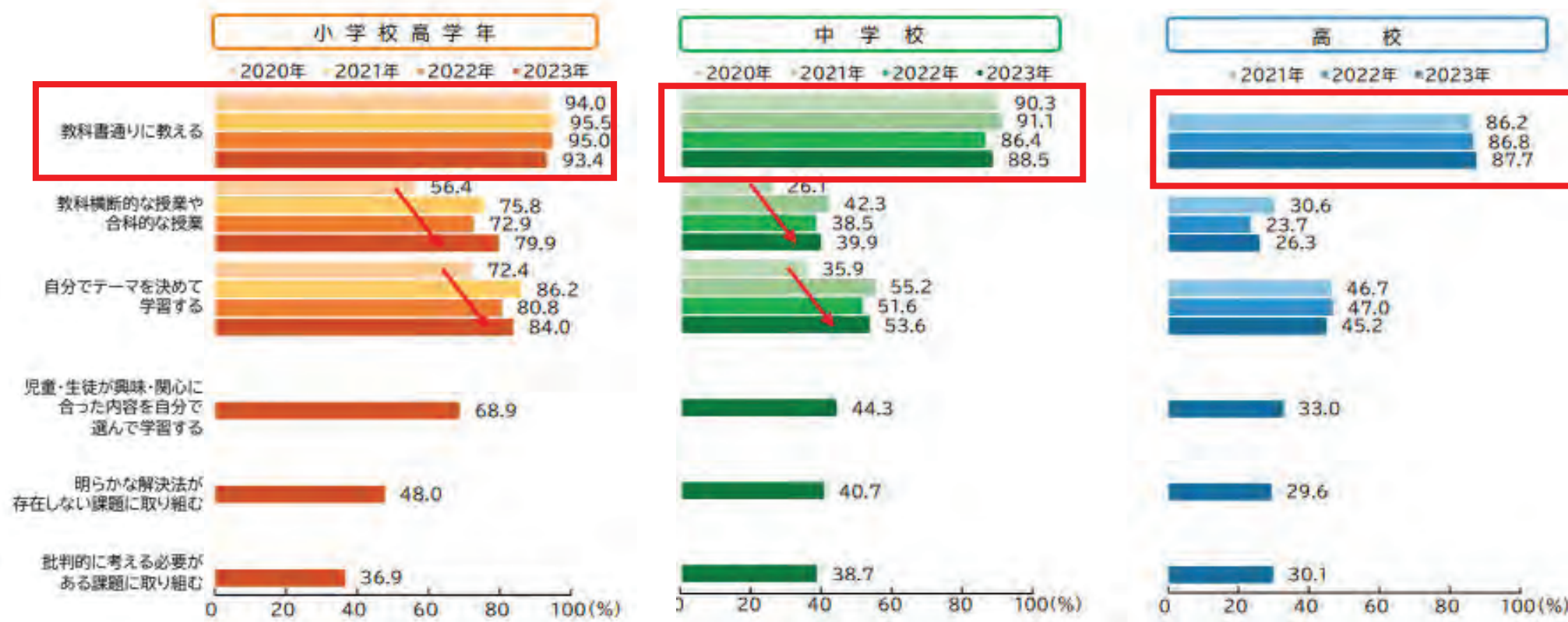
（中略）

さらに、教科書自体の内容や分量が大幅に増加している中、教育現場では教科書の内容を網羅的に教えなくてはならないという考え方が依然として根強く、負担感を生んでいる実態も指摘されているところである。1人1台端末の整備により子供たちが多様な学習材に自らアクセスできるようになってきたという状況の変化も踏まえれば、紙の教科書やデジタル教科書に加えて多様な教材を活用して個別最適な学びと協働的な学びを深めることが求められており、教科書を網羅的に教えることに縛られるのではなく、教科書に加えて学習場面に応じて適切な学習材を選択して使用するという意識の改革に向けた取組を行うとともに、次期学習指導要領の検討を踏まえつつ、教科書においては多様な学習材を組み合わせやすくする連携性の向上や内容・分量の精選を行うことが望ましい。

例えば、次期学習指導要領に向けた中央教育審議会への諮問等において問題意識が示されているように、生成AI等が発展する中、個別の知識の集積に止まらない概念としての習得や深い意味理解を促す指導が重要となっており、学びに有益な情報を教科書において網羅するのではなく、教科書は教科等の主要な概念に関する理解をつかみやすいものとしつつ、教科書で得た理解をさらに広げたり深めたりしていくための多様な情報を得る手段として教材を活用していくといった役割分担が考えられる。こうした観点から教科書の内容・構成の見直しを行っていくとすれば、必然的に教科書の記述の精選が必要となると考えられる。また、こうしたことを検討していく上では、次期学習指導要領の検討において、各学校における柔軟な教育課程の編成の在り方についても検討課題となっていることにも留意する必要がある。

「教科書通りに教える」が 興味関心に応じた授業、答えのない課題に取り組む授業より多い

Q. あなた（教師）は教科の授業において、次のような内容の授業をどれくらい行っていますか



【出所】ベネッセ教育総合研究所「小中高校の学習指導に関する調査2023」

※質問項目は、2021年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている。数字は「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

※「児童・生徒が興味・関心に合った内容を自分で選んで学習する」「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」は2020年～2022年は尋ねていない。

高校入試では、事実に知識の記憶を問う問題が引き続き出題されるとともに、思考力・判断力・表現力を問う問題も出ている

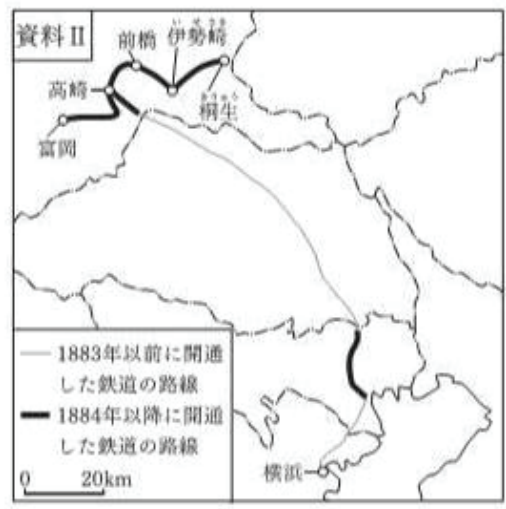
② 次の年表は、日本の交通に関することからについてまとめたものです。あとの1～6に答えなさい。

時代	日本の交通に関することから
平安時代	①平安京と地方を結ぶ道路を通して調・庸が運搬された。
鎌倉時代	鎌倉幕府によって、②鎌倉と京都を結ぶ道路が整備された。
室町時代	馬借とよばれる運送業者が、年貢などの物資を運搬した。
安土桃山時代	③織田信長によって、各地の関所が廃止された。
江戸時代	江戸幕府によって、④五街道が整備された。
明治時代	新橋・横浜間に⑤鉄道が開通した。

1 下線部①に関して、794年に都が平安京とされました。このときの天皇は誰ですか。次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 天武天皇
イ 聖武天皇
ウ 桓武天皇
エ 後醍醐天皇
- (中略)

5 下線部⑤に関して、右の資料Ⅱは、明治時代に整備された鉄道の路線の一部を示しています。資料Ⅱ中の「1884年以降に開通した鉄道の路線」が整備されたことによって、資料Ⅱに示した群馬県の五つの都市から横浜までの区間が鉄道でつながるようになりました。この区間が鉄道でつながるようにしたのはなぜだと考えられますか。その主な理由を、資料Ⅱに示した群馬県の五つの都市で当時共通して盛んだった産業と、当時の輸出の特徴に触れて、簡潔に書きなさい。



- 人物名等の事実に知識に関する記憶を、他の知識とのつながり等の文脈がない中で問う出題は、教科書に記載のある個々の用語を網羅的に取り扱うような授業の在り方を助長する側面がないか。
- こうした単純な記憶への対応も求めつつ、思考力・判断力・表現力を問うことについて、生徒の学習負担の増加などの観点からどのように考えるか。
- これらの視点も踏まえつつ、中学校における授業改善に繋がしつつ、生徒に過度な学習負担を生じさせない高校入試の出題の在り方についてどう考えるか。

特定の年代に対応した人物名の記憶を問う問題

+

明治時代に我が国の産業革命として繊維産業が盛んとなったことを踏まえ、それらを主要な輸出品とすることで近代産業が発展していったという主要な理解を問い、表現させる問題

知識に関する設問であっても、単なる記憶を問うのではなく 概念としての理解を問う問題も考えられる（高校入試）

2 次のA～Eは、それぞれ日本の法に関わることがらについて述べた文です。あとの1～6に答えなさい。

- A 大宝律令が定められ、律令に基づいて政治を行う律令国家となった。
- B 執権北条泰時により、武士の社会の慣習に基づいて、御成敗式目が定められた。
- C 戦国大名によって、領国を支配するために分国法が定められることがあった。
- D 武家諸法度が定められ、幕府に無断で大名家どうしが結婚することなどが禁じられた。
- E 明治政府によって、国の仕組みの整備が進められるなか、大日本帝国憲法が發布された。

基本的な事実的知識については、問題のリード文の中で材料として提供

6 次のa～eのうち、主君が家臣に土地の支配を認めることによって、家臣が主君に従う関係で成り立っていた社会はどれですか。下のア～エの組み合わせの中から最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

- a 律令国家によって政治が行われていた社会
- b 鎌倉幕府によって政治が行われていた社会
- c 戦国大名によって政治が行われていた社会
- d 江戸幕府によって政治が行われていた社会
- e 明治政府によって政治が行われていた社会

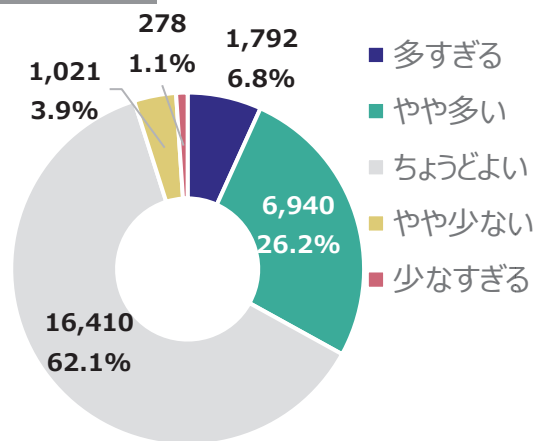
事実的知識の記憶を問うのではなく、各時代の政治体制に関する本質的な理解を問う

ア a・b・c イ b・c・d ウ b・c・e エ c・d・e

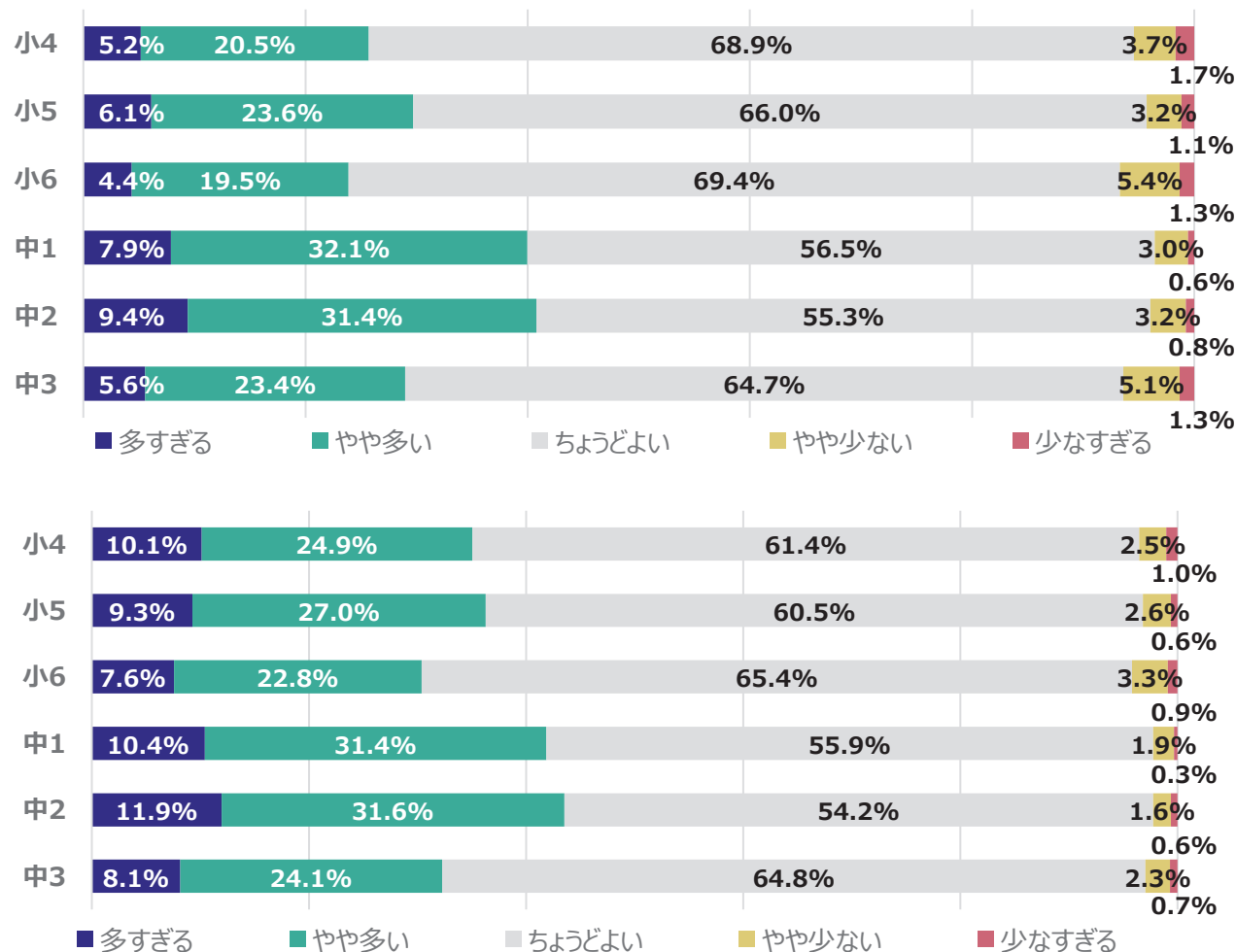
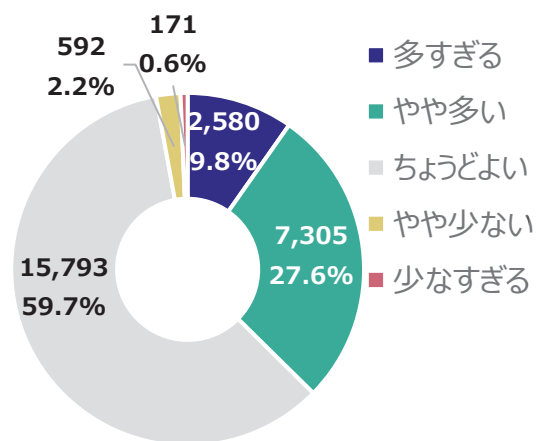
- ◆ 児童生徒の約60%が、授業で学ぶ量や週当たり授業時数を「ちょうどよい」と感じている。
- ◆ 一方、「多すぎる」と感じる子も5～10%程度存在（中1、中2で特に多い）

問 あなたが、普段学校で受けている授業で学ぶ量や授業時間について、どう思いますか。

① 授業で学ぶ量



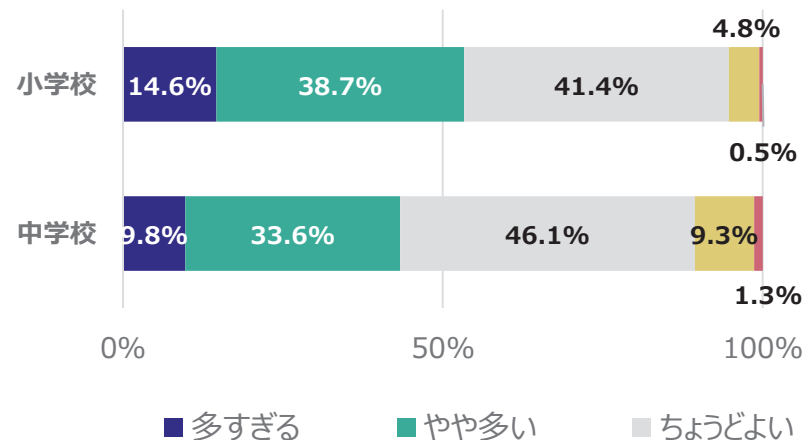
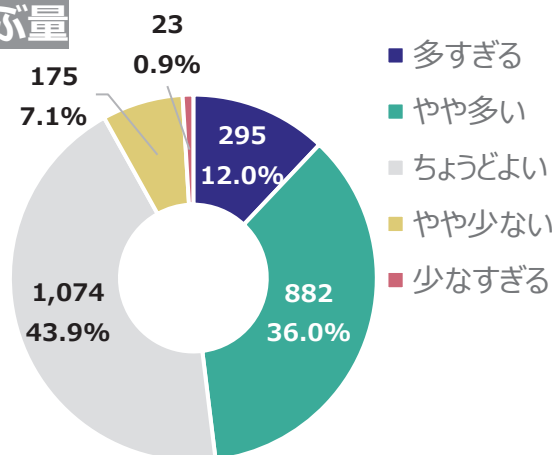
② 週当たりの授業時間



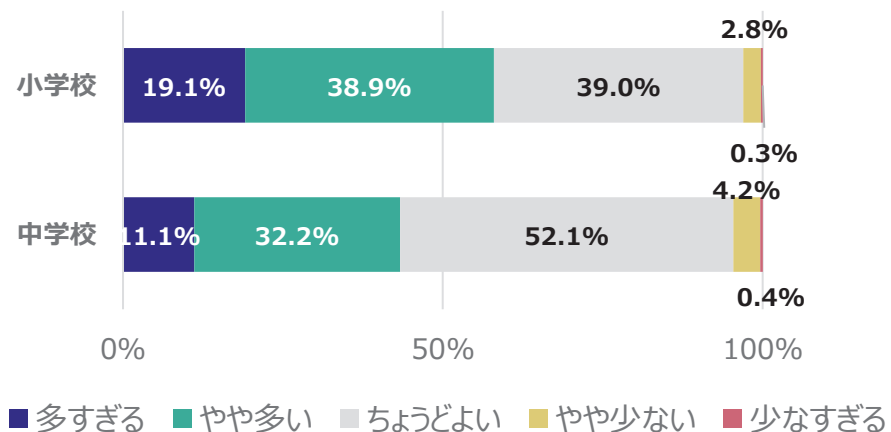
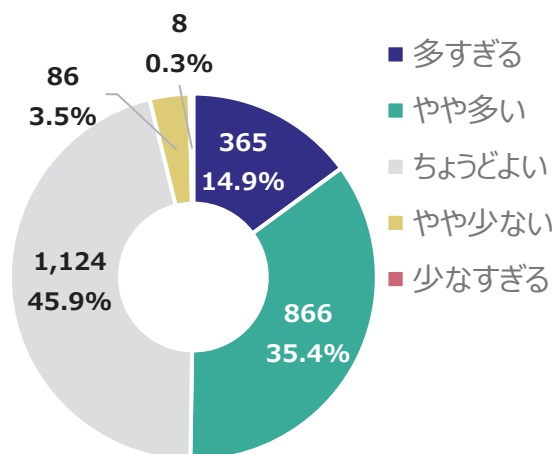
◆ 教師向け調査では、約4～5割の教師が「ちょうどよい」と回答している一方で、「多すぎる」または「やや多い」と回答した教師は、小学校で半数以上、中学校で4割以上であった。

問 あなたは、学校における子供たちの学習量、授業時間についてどう思いますか。

① 授業で学ぶ量



② 週当たりの授業時間



現行制度での教育課程編成の工夫事例①

神奈川県横浜市立つづきの丘小学校

- 週当たり授業時数：実質**28コマ**（1260分）
- 各教科等の総授業時数：**1017単位時間**（R7計画）
- 時間外在校等時間：**18時間22分**（R6月平均）

【教育課程の編成の考え方】※R7計画

※ 総授業日数 **204日**（夏季休業期間：7月22日～8月26日）

※ 児童会活動・クラブ活動・学校行事の時数の合計：55単位時間
（うち学校行事は18単位時間）

※ 週時程踏まえた最大の授業時数：1120単位時間

（4～6年の場合）

	月	火	水	木	金
8:15	登校・朝の会				
8:30	1限（40分）				
	～				
	5限（40分）				
12:25	給食				
13:10	昼休み			清掃	昼休み
13:25	清掃		6限（40分）	清掃	清掃
13:35	6限（60分）	6限（60分）	～14:05	6限（60分）	6限（40分）
14:35					～14:15



授業の1単位時間を基本的に40分で設定し、午前中に5限目まで実施



40分では時間が足りない学習活動を実施するため、週3回60分の授業日を設定

現行制度での教育課程編成の工夫事例②

新潟県新潟市立上所小学校

- 週当たり授業時数： **27コマ+モジュール**
- 各教科等の総授業時数： **1035単位時間** (R7計画)
- 時間外在校等時間： **17.0時間** (R6月平均)

【教育課程の編成の考え方】 ※R7計画・小学5年

※ 総授業日数 **205日** (夏季休業期間：7月24日～8月24日)

※ 児童会活動・クラブ活動・学校行事の時数の合計：64単位時間
(うち学校行事は27単位時間)

※ 週時程踏まえた最大の授業時数：1151単位時間

	月	火	水	木	金
	登校				
8:15	朝学習（モジュール）等 15分				
	朝の会				
8:30	1限（45分）				
8:40	～				
	4限（45分）				
12:10	給食				
12:55	昼休み	帰りの会 ～13:20	昼休み		
13:25	清掃	下校13:30	清掃	5限	
13:45	5限	学校開放 13:20～15:00	5限	6限	
	6限		帰りの会 ～14:45	帰りの会 ～15:10	
15:20	帰りの会 15:20～15:30	水曜日の放課後は 児童についての情報共有や 教材研究の時間として活用		委員会 or クラブ活動 14:50～15:35	下校 15:20

現行制度での教育課程編成の工夫事例③

岐阜県下呂市立下呂中学校

- 週当たり授業時数： **29コマ**
- 各教科等の総授業時数： **1015単位時間** (R7計画)
- 時間外在校等時間： **26.48時間** (R6月平均)

【教育課程の編成の考え方】 ※ R7計画・中学2年

※ 総授業日数 **208日** (夏季休業期間：7月21日～8月25日)
(自然災害が起きやすい地域のため欠課が多く生じうることを踏まえ、授業日数を多く設定)

※ 学校行事・生徒会活動の合計時数：33単位時間
(うち学校行事：24単位時間)

※ 週時程踏まえた最大の授業時数：1090単位時間

※ 計画時点では教科等の時数は1015単位時間で設定し、学習状況等を踏まえながら年度途中のカリキュラム・マネジメントを実施し、必要に応じて時数を追加して授業を実施。

	月	火	水	木	金
8:05	登校・朝の会				
8:25	1限（50分）				
	～				
	4限（50分）				
12:20	給食・昼休み				
13:15	5限（50分）				
14:15	6限	終わりの会 14:10～14:25	6限	6限	終わりの会 14:10～14:25
	終わりの会 15:10～15:25	掃除 14:30～14:45	終わりの会 15:10～15:25	終わりの会 15:10～15:25	掃除 14:30～14:45
	掃除 15:30～15:45	部活動 14:55～16:30	7限 15:35～16:25	部活動 15:35～16:30	部活動 14:55～16:30
	生徒会 15:55～16:30				
	16:45 下校				



午後は主に総合的な学習の時間
や学級活動を実施
（部活動を終えた3年生については、火・金の6限を教科に充てる場合もあり）



午後は主に総合的な学習の時間
や学級活動を実施

(部活動を終えた3年生については、火・金の6
限を教科に充てる場合もあり)



部活動を実施しても16:45最終下校

※市教委と市内中学校校長会・教頭会が
連携・決定

石川県加賀市

Before

- | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 1 | 2 |
| 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
- 3日間 始業日

月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9

10 始業日

どんな暦でも5日間は確保可能

熊本県熊本市

Before

- | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|---|---|---|---|---|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
- 5日間 始業日

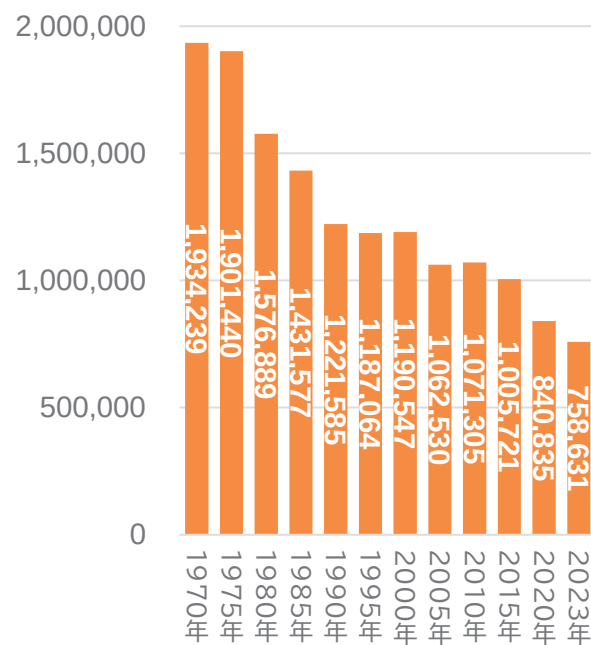
After

- | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|---|---|---|---|---|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
- 最低5日、最長6日間
- 始業日

大学全入時代が到来 公立高入試も倍率低下

出生数

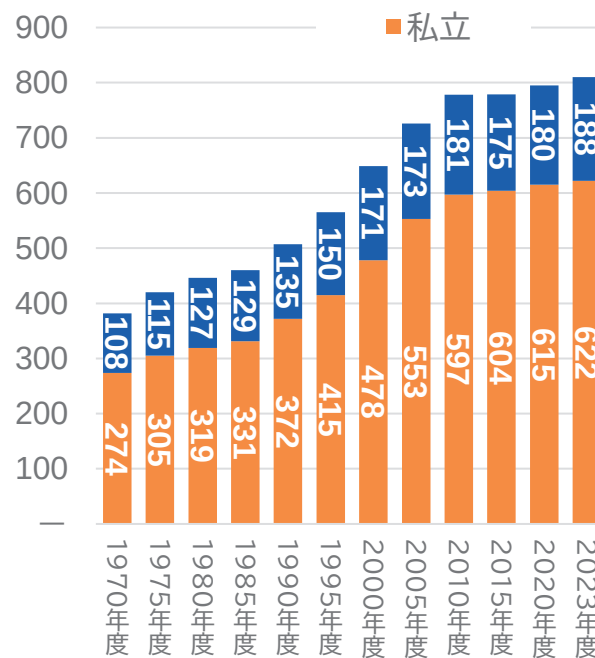
約50年で4割以下



出典) 厚労省「人口動態調査」

大学数

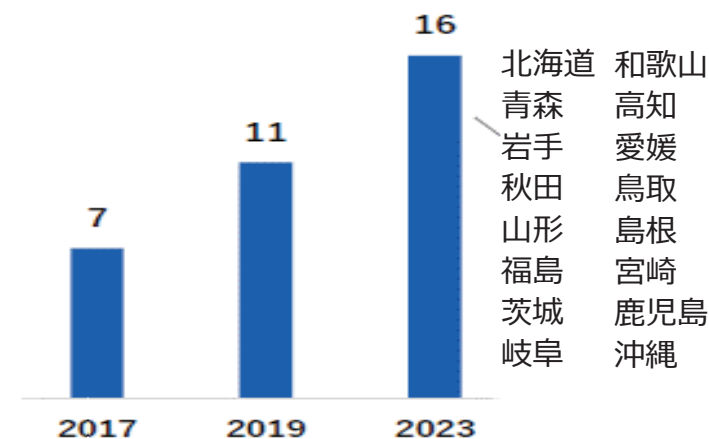
約50年で2倍以上



出典) 文科省「学校基本調査」

高校入試(公立)

倍率1以下の県3分の1



北海道 和歌山
青森 高知
岩手 愛媛
秋田 鳥取
山形 島根
福島 宮崎
茨城 鹿児島
岐阜 沖縄

公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法等の一部を改正する法律 (令和7年法律第68号)

附則

(政府の措置)

第三条 政府は、令和十一年度までに、公立の義務教育諸学校等（給特法第二条第一項に規定する義務教育諸学校等をいう。以下同じ。）の教育職員（第一条の規定（給特法第二条第二項の改正規定に限る。）による改正後の給特法第二条第二項に規定する教育職員をいう。以下この項及び附則第五条において同じ。）について、一箇月時間外在校等 時間を平均三十時間程度に削減することを目標とし、次に掲げる措置を講ずるものとする。

- 一 公立の義務教育諸学校等の教育職員一人当たりの担当する授業時数を削減すること。
- 二 教育課程の編成の在り方について検討を行うこと。
- 三 公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律に規定する教職員定数の標準を改定すること。
- 四 公立の義務教育諸学校等の教育職員以外の学校の教育活動を支援する人材を増員すること。
- 五 不当な要求等を行う保護者等への対応について支援を行うこと。
- 六 部活動の地域における展開等を円滑に進めるための財政的な援助を行うこと。
- 七 前各号に掲げるもののほか、公立の義務教育諸学校等の教育職員の業務の量の削減 のために必要な措置

2 (略)

学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）

第九十条 高等学校の入学は、第七十八条の規定により送付された調査書その他必要な書類、選抜のための学力検査（以下この条において「学力検査」という。）の成績等を資料として行う入学者の選抜に基づいて、校長が許可する。

2 学力検査は、特別の事情のあるときは、行わないことができる。

3 調査書は、特別の事情のあるときは、入学者の選抜のための資料としないことができる。

4 連携型高等学校における入学者の選抜は、第七十五条第一項の規定により編成する教育課程に係る連携型中学校の生徒については、調査書及び学力検査の成績以外の資料により行うことができる。

5 公立の高等学校（公立大学法人の設置する高等学校を除く。）に係る学力検査は、当該高等学校を設置する都道府県又は市町村の教育委員会が行う。



第六章 豊かな学びに繋がる学習評価の在り方

(論点整理 P70～78関係)

学習評価に係る様々な用語

学習改善等につなげる評価（いわゆる「形成的評価」）

- ・学習過程の途中で、児童生徒一人一人のつまずきや伸びについて評価するもので、その後の児童生徒の学習の改善や教師による指導の改善に生かす目的で行う。小テスト、レポートやプロジェクトの途中経過、日々の記録などを活用する。

記録に残す評価（いわゆる「総括的評価」）

- ・学習活動が完了した後に実施される評価で、最終的な成果を評価するために用いる。テストや試験、最終レポート、プロジェクトの完成版などを活用し、学習者の全体的な理解度や達成度を判断する。

目標に準拠した評価（いわゆる「絶対評価」）

- ・児童生徒の学習状況を、学習指導要領に定める目標に照らしてその実現状況を評価するもの。

集団に準拠した評価（いわゆる「相対評価」）

- ・児童生徒の学習状況を、学級・学年など集団の中での相対的な位置づけによって評価するもの。

個人内評価

- ・児童生徒の学習状況を、個人のよい点や可能性、進歩の状況等に着目して評価するもの。

評価の「規準」（いわゆる「のりじゅん」）

- ・学習指導要領に示す資質・能力が身についた際の姿を、具体的な児童生徒の姿として設定したもの。文部科学省が評価の「キジュン」の語を使用する場合、こちらの漢字を用いる。（観点別評価で言えば、Bとなる水準を示すもの）

評価の「基準」（いわゆる「もとじゅん」）

- ・学校現場において、資質・能力の習得状況の程度を、評価の規準に照らしたより具体的な判断基準を示す場合、こちらの漢字が一般的に用いられる。（この課題で○○ならA、▲▲ならBなど、××ならCなど）

小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知） 抜粋

小学校児童指導要録（参考様式）

〔別紙1〕小学校及び特別支援学校小学部の指導要録に記載する事項等

各教科の学習の記録										特別の教科 道徳	
教科	観点	学 年	1	2	3	4	5	6	学年	学習状況及び道徳性に関する成長の様子	
国語	知識・技能								1		
	思考・判断・表現								2		
	主体的に学習に取り組む態度								3		
社会	知識・技能								4		
	思考・判断・表現								5		
	主体的に学習に取り組む態度								6		
算数	知識・技能								7		
	思考・判断・表現								8		
	主体的に学習に取り組む態度								9		
外国語	知識・技能								10		
	思考・判断・表現								11		
	主体的に学習に取り組む態度								12		
総合的な学習の時間	知識・技能								13		
	思考・判断・表現								14		
	主体的に学習に取り組む態度								15		
音楽	知識・技能								16		
	思考・判断・表現								17		
	主体的に学習に取り組む態度								18		
美術	知識・技能								19		
	思考・判断・表現								20		
	主体的に学習に取り組む態度								21		
体育	知識・技能								22		
	思考・判断・表現								23		
	主体的に学習に取り組む態度								24		
外国語	知識・技能								25		
	思考・判断・表現								26		
	主体的に学習に取り組む態度								27		

（1）観点別学習状況

小学校及び特別支援学校（中略）小学部における観点別学習状況については、小学校学習指導要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（以下「小学校学習指導要領等」という。）に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を観点ごとに評価し記入する。その際、「十分満足できる」状況と判断されるものをA、「おおむね満足できる」状況と判断されるものをB、「努力を要する」状況と判断されるものをCのように区別して評価を記入する。

小学校及び特別支援学校小学部における各教科の評価の観点について、設置者は、小学校学習指導要領等を踏まえ、別紙4を参考に設定する。

（2）評定

小学校及び特別支援学校小学部における評定については、第3学年以上の各学年の各教科の学習の状況について、小学校学習指導要領等に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を総括的に評価し記入する。

各教科の評定は、小学校学習指導要領等に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を「十分満足できる」状況と判断されるものを3、「おおむね満足できる」状況と判断されるものを2、「努力を要する」状況と判断されるものを1のように区別して評価を記入する。

評定に当たっては、評定は各教科の学習の状況を総括的に評価するものであり、「（1）観点別学習状況」において掲げられた観点は、分析的な評価を行うものとして、各教科の評定を行う場合において基本的な要素となるものであることに十分留意する。その際、評定の適切な決定方法等については、各学校において定める。

各観点の評価方法等についての留意点として示している事項

知識・技能

- 「知識・技能」の評価は、各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するものである。
- （中略）具体的な評価方法としては、ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮するなどの工夫改善を図るとともに、例えば、児童生徒が文章による説明をしたり、各教科等の内容の特質に応じて、観察・実験をしたり、式やグラフで表現したりするなど実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど、多様な方法を適切に取り入れていくことが考えられる。

思考・判断・表現

- 「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価するものである。
- （中略）具体的な評価方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫することが考えられる。

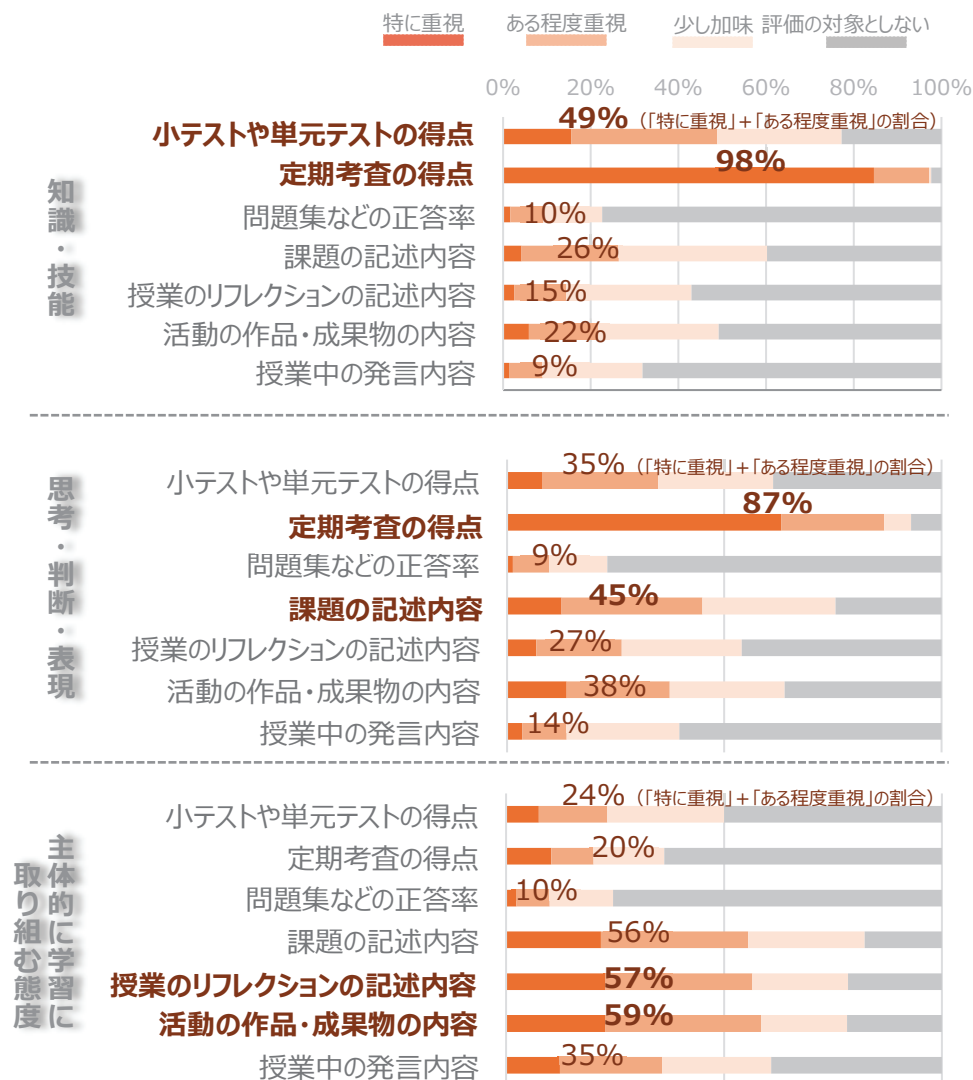
主体的に学習に取り組む態度

- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る評価の観点の趣旨に照らして、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。
- （中略）「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。したがって、例えば、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではないことに留意する必要がある。
- （中略）それぞれの観点別学習状況の評価を行っていく上では、児童生徒の学習状況を適切に評価することができるよう授業デザインを考えていくことは不可欠である。特に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に当たっては、児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面、他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面を単元や題材などの内容のまとまりの中で設けたりするなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る中で、適切に評価できるようにしていくことが重要である。

学習評価に関する各種調査結果

◆最終評価時に重視する項目（高校）第一学習社アンケート結果より

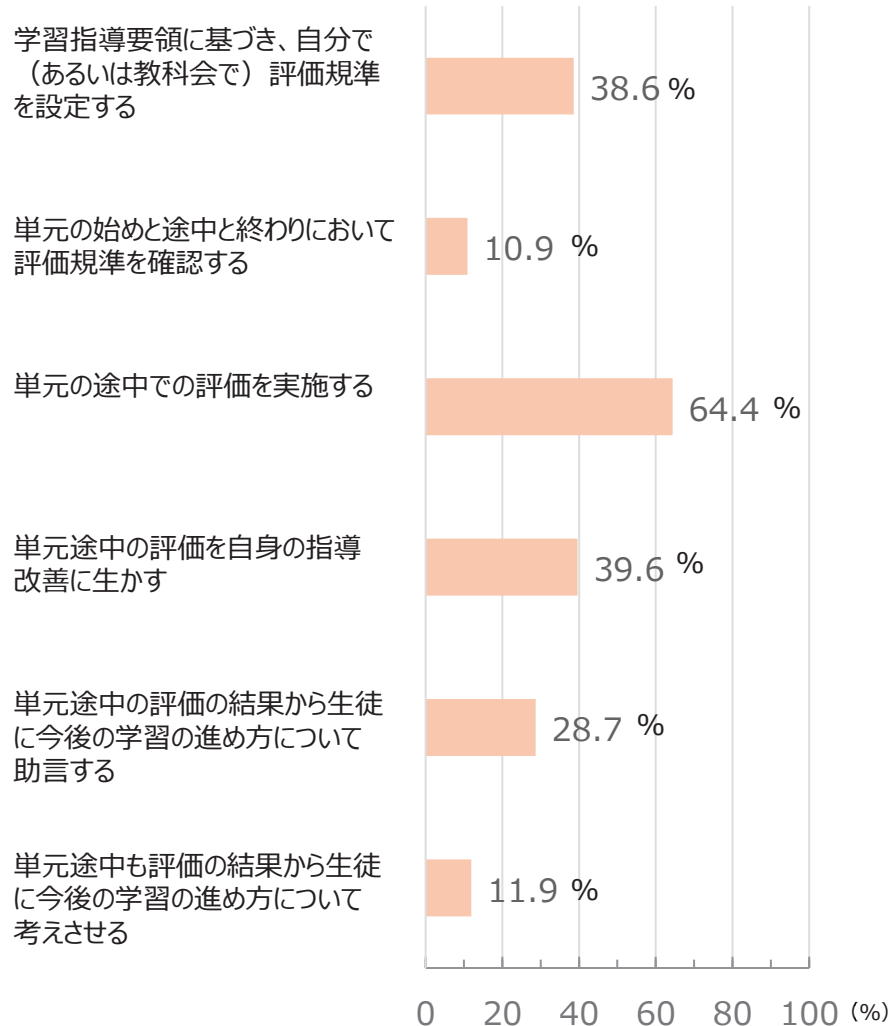
- 「知識・技能」と同様「思考・判断・表現」でも定期考査の得点を重視
- 「主体的に学習に取り組む態度」では「授業のリフレクションの記述内容」「活動の作品・成果物の内容」といった振り返りや内容を重視



（出典）第一学習社「観点別評価に関するアンケート報告書」2023年2～3月調査実施を基に文部科学省作成

◆形成的評価に係る状況（中学）広島県立教育センター調査結果より

- 単元の途中で評価を実施する割合は多いが、その評価結果を自身の指導や児童生徒の学習に生かす教師の割合は少ない



（出典）広島県立教育センター「授業改善につなぐ学習評価の在り方に関する研究（中学校）-形成的評価の実践上の課題に着目して-」2022年度を基に文部科学省作成

学習評価に係る教員の意見

- ・ 民間や自治体が実施した調査では、評価の煩雑さに伴う時間不足、評価材料の収集、趣旨に沿った運用に係る課題が確認できる
- ・ 課題に対して評価計画や項目の策定・整理、評価の場の設定、評価を基に学びを振り返る等の工夫が見られる

◆ 現在感じている課題

評価の煩雑さ・時間不足

- ・ 定期テストや単元テストなどで判断することは難しい。そのため、日々の評価のための記録が必要で時間と労力がかかる（*）
- ・ 生徒一人一人に対して3観点の評価を行うためには時間もスキルも足りない。結果的に、見てすぐにわかるようなものの評価にならざるを得ない

適切な評価材料の収集が困難

- ・ 授業内のどのような場面で、また、テストなどでどのように生徒の主体的に学習に取り組む態度を見取れば良いのか、自分の中でクリアでない（*）
- ・ 知識・理解、思考力・表現力・判断力、主体性のABCの付け方、材料の選択に一部（特に主体性）苦慮した

趣旨に沿った運用が困難

- ・ 年度の最後に評定に合わせて主観的につけたもの（評定5であればAAA）や、主体的に学習に取り組む態度では、提出物が出ていればAのように、導入目的を果たしていない
- ・ 本来であれば形成的評価に活用すべきだが、本校では学期末にしか観点別評価を行っていないため、評価を受けて学習評価を図るという本来の目的を果たしていない
- ・ 手間のわりに生徒に還元できていない

◆ 課題を元に取り組んでいる工夫

評価計画や項目の整理

- ・ 章のまとまりごとの評価と毎時間の活動をリンクさせる
- ・ 課題や試験の設問ごとに観点別に分類、生徒へどれが何の力を問うているのか理解しやすく工夫して提示

パフォーマンス課題など評価の場の設定

- ・ ある授業で毎時間「問い」作りを行う。「問い」の内容・レベルをルーブリックを用いて評価し客観性を担保する
- ・ 学期に一回知識を得た内容の実験を自身で考えて実施する

評価を基に学びを改善する機会の設定

- ・ 1つの節の中で「できたこと→なぜ？→今後どのようにいかにするか」「できなかったこと→原因→改善点」など振り返りをさせて次につながるような取組を行った（*）
- ・ 振り返りの機会を適切に設け、学習改善に資する評価となるよう意識

形成的評価と総括的評価が区別されず、毎時評価が行われる例

1 単元名 「分数のたし算とひき算」

2 単元の目標

- 約分・通分の意味、異分母分数の大小比較の仕方や、異分母分数の加法及び減法の意味や計算の仕方を理解し、約分や通分、異分母分数の加法及び減法の計算ができる。
- 異分母分数の大小比較の方法を考えたり、異分母分数の加法及び減法の計算の仕方を、図や式を用いて考えたりする力を養う。
- 一つの分数の分子及び分母に同じ数を乗除してできる分数は、元の分数と同じ大きさを表すことなどをもとにして、異分母の分数の加法及び減法の仕方を考えたり、計算の仕方を振り返り多面的に検討したりしようとしている。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
約分・通分の意味、異分母分数の大小比較のしかたを理解し、同値分数をつくり、異分母分数の大小比較ができる。また、異分母分数の加法及び減法の意味や計算の仕方を理解し、異分母分数の加法及び減法の計算ができる。	異分母分数の大小比較の方法を、分母を同じにすればよいと考えている。また、異分母分数の加法及び減法の計算の仕方を、図表現や数表現を用いて、分母を同じにすればできると考えている。	異分母で同じ大きさの分数があることに気付き、異分母分数の大小比較について考えようとしている。また、異分母分数の加法及び減法の計算の仕方を多面的に振り返っている。

5 単元の指導計画

時	学習内容	評価		
		知	思	主
1	・同分母分数および同分子分数の大小を比較する。	○	○	
2 (時)	・異分母分数の大小比較について考える。	○	○	
3	・いろいろな分数を通分して、大小を比較する。	○		○
4	・約分について知り、いろいろな分数を約分する。	○		○
5	・異分母分数の加法の計算のしかたを考える。		○	○
6	・くり上がりのある異分母分数の加法や、帯分数の混ざった異分母分数の加法の計算のしかたを考える。	○		
7	・異分母分数の減法の計算のしかたを考える。		○	○
8	・くり上がりのある異分母分数の減法や、帯分数の混ざった異分母分数の減法の計算のしかたを考える。	○		
9	・加法と減法の混ざった異分母分数の計算を行う。	○		○
10	・既習事項の確かめをする。			

・毎時間複数観点の評価を行うこととなっており、また学習の途中で「学習改善等に生かす評価」と評定のため「記録に残す評価」が区別されずに行われている。

真に意味のある評価活動へ集中し、評価場面を精選する例

単元計画の重点化を意識した例

学習活動・学習課題 (丸付き数字は授業時数)	学習評価	
	つまずきと支援 (指導に生かす評価)	総括に用いる評価 (記録に残す評価)
①「走り幅跳びの代表選手を選ぼう」という課題を知って、学習計画を立てる	単元の課題を最初に明示!	
②いろいろな場面での平均値の求め方を考える	発言内容 (知)、活動の様子 (態)	
③平均を工夫して求める方法を考え、説明する		
④いくつかの部分の平均を知り、全体の平均を求めることができる		ワークシート (知)
⑤⑥平均の考えを用いることのよさがわかり、自分の歩幅を求めて道のりを概測することができる	発言内容 (思)	
⑦飛び離れた記録 (外れ値) がある場合の平均の求め方を理解する		
⑧「走り幅跳びの代表選手を選ぶ」という課題を設定し、求め方を説明する	学びの舞台!	ワークシート (思)

※単元計画の「重点化」が弱いと、評価場面は拡散して記録の回数も多くなりがちです

- ・単元の中で最も資質・能力を発揮しやすい場面を設定し、その中で重点的に評価。
- ・それ以外の場面においては、学習評価は子供達のつまずきの把握と支援に活かすための「学習改善等に生かす評価」を行い、その場面も精選。

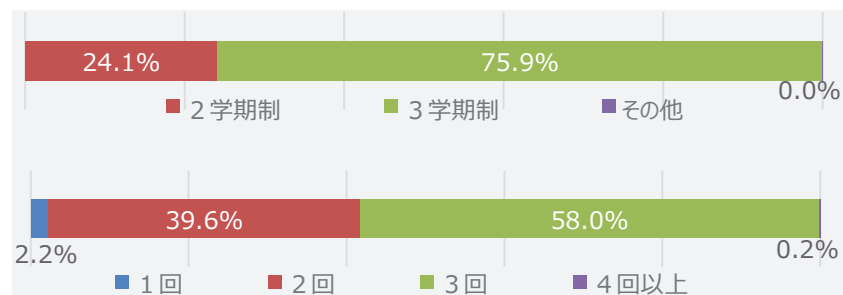
単元計画の重点化の意識が弱い例

学習活動・学習課題 (丸付き数字は授業時数)	学習評価	
	つまずきと支援 (指導に生かす評価)	総括に用いる評価 (記録に残す評価)
①どちらがよく校庭を走ったかを考え、操作を通して「ならず」という意味を理解する		発言内容 (知)
②ジュースの量をならすことを計算で求める方法を考え、「平均」の意味を理解する	記録の回数が増え、ヤマ場のイメージが子供にも湧きにくくなりがちです	発言内容・活動の様子 (知)
③0を含む平均を求める		ノートの記述内容 (知)
④部分の平均から全体の平均を求める		ノートの記述内容 (思)
⑤歩幅を使った距離などの概測をする		発言内容 (知)
⑥歩幅での測定とその活用を図る		発言内容 (知)
⑦仮平均の考えを使って、平均を求める		ノートの記述内容 (思)
⑧外れ値の処理の仕方を考える		ノートの記述内容 (知)
⑨練習問題をやる。既習事項を振り返る		ノート (知)、活動の様子 (態)

- ・毎時間総括のための評価材料を集めることとなり、教師の評価負担が重い。子供にとっても評価材料が多岐にわたっており、単元を通じて育成を目指す資質・能力について子供が意識しにくい。
- ・主体的な学習の調整が必要となる学習場面や、思考・判断・表現の場面が設定されておらず、指導と評価が結びついていない。

- 評定は、学期の区分ごとに作成する学校が多いが、3学期制の学校でも年間2回や、年間1回の学校もある。

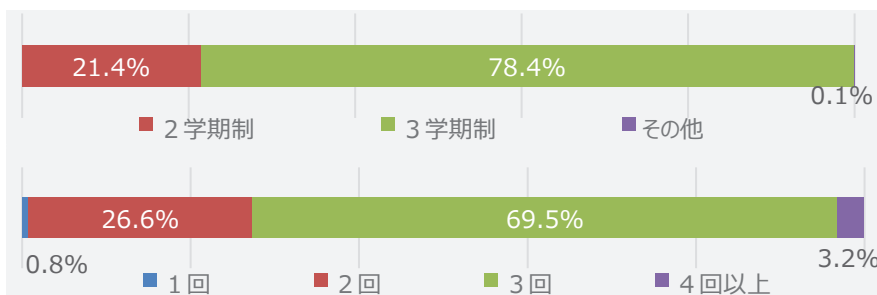
【小学校等】



学期の区分

評定の作成回数(※)

【中学校等】



学期の区分と
評定作成回数の
関係

※ 総括的評価としての観点別評価のみを作成している場合も回数に含めている。

○天童市立天童中部小学校

児童の学習の状況を把握してその改善を支援するための見取りを日常的に行っていくことを重要視し、次の学習活動につなげやすいよう、夏季休業前に評定を作成するのではなく、授業が始まっている9月の途中と、年度末の3月に評定を作成している。

○静岡市立中島小学校

今年度から、児童の学習成果を1年間で見取るため、評定を年度末1回の作成とした。前期終了時の三者面談では、児童が自分で作成した、自分の前期の学習状況をまとめたものを使って、学習の成果を保護者に伝える取組を実施している。

評定の通知回数を減らし、「学習改善等につなげる評価」を充実させている例

静岡市立中島小学校

学習記録を用いた面談とフィードバック

- 児童と教員が学習過程や現時点での学習の到達度を把握し、これからの課題を共に確認し共有するため、児童自らが、日々の授業の中でICT端末を活用して学習記録を作成。
- 従来から実施していた前期終了時の保護者面談の機会を活用し、児童が作成した学習記録等をもとに、児童が保護者と担任に対して自らの学習の成果を報告し、担任がフィードバックすることで、児童が学びを自己調整できるよう支援。
- 評定は年度末に1回作成し、通知表として児童や保護者にフィードバックしている。

【児童が保護者と担任に成果報告をしている例】



【6年生児童が作成した学習記録の例】



福山市立水呑小学校

これまでの学びの過程を綴じたファイルの活用

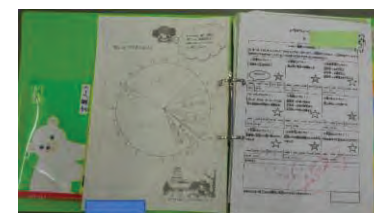
- 児童が自己の学びを振り返り、次の学びに生かすとともに、教師の指導改善等に生かすため、ワークシートや作品等を綴じたファイル「学びファイル」を作成。
- 三者面談の際は、作成したファイルを活用しながら児童・保護者・教師が学びの様子や伸びた点、努力を要する点について共有し、次の学びに生かす取組を実施。

【定期的に持ち帰り保護者と共有】

学びファイル		
()年()組()番 名前()		
※お家の人に見てもらったり、サインをしてもらって、持ってきてください。		
※このプリントは学びファイル(綴じ)の1ページ目にとじましょう。		
月	サイン	お家の人から
月	日	

【ファイルの内容の例】

- ノート、ワークシート
- 観察の記録
- 定着テスト
- 作品 など



「思考・判断・表現」の過程で「学びに向かう力・人間性等」を積極的に評価するイメージ

【指導目標】文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる（思考力・判断力・表現力等）

単元名 登場人物の心情の変化に着目して読み、物語のみりよくを「レビューカード」にまとめて伝え合おう！

6	5	4	3	2	1	
主体的に取り組むことができる「思・判・表」課題 単元を貫く課題 この物語にはどのようなみりよくがあるのだろうか。						
主な学習活動 - 物語の全文を読み（範読を聞く）最も印象に残ったところを考える。 - それぞれの考えの違うから、課題を設定する。（共有ノート） 「みりよく」 - 大まかな設定を確認し学習計画を立てる。 - 大造じいさんの残雪への見方は、どのように変わったのだろうか。 「大造じいさんの行動」と「心情の変化」に着目して物語の内容をまとめる。 「山場」について考える宿題を出す。 - 人物の関係や心情の変化から物語の「山場」を考え、「山場」についての考えを交流しよう。 - 一つの場面から大造じいさんの心情の変化を追う、三の場面について（山場）大造じいさんの心情が大きく変わったことについて考える。 - 考えを交流する。 - 山場の確認！ - 情景描写などの表現について、その効果を考えよう。 - 情景描写などの表現の工夫を見つめる。 - 表現の工夫の効果について考える。 - 物語のみりよくを、「レビューカード」にまとめよう。 - 物語のみりよくをまとめる。 - みりよくがよく表れている部分を朗読する。 - 物語のみりよくを発表し合いい、考えを広げよう。 - 自分の考えた魅力について、グループで発表する。 - 友達を発表した「みりよく」と自分の考える「みりよく」を比較し、改めて作品の魅力を考える。 - 考えた内容を共有する。						
評価の観点・評価方法 - 優れた表現に着目して通読し、自分の印象に残ったところについて考えている。 【発言・記述】 - 物語の魅力伝え合おうという言語活動を理解し、学習の見通しをもとうとしている。 【観察・発言】 ★形成的評価						
知：比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。 【発言・記述】 文章を音読したり朗読したりしている。【観察】 思：「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えてたりしている。 【発言・記述】 友達の考えを聞き、自分の考えに取り入れたり、自分の考えを広げたりしようとしている。【発言・観察・ふりかえり】 ★形成的評価						
思：「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げている。【発言・記述】 態：進んで意見や感想を共有し、学習の見通しをもって物語の魅力伝え合おうとしている。【発言・記述】 ★総括的評価						
個人 ← 一斉 ← グループ (個人)	個人	個人 ← グループ	一斉 ← 個人 ← グループ	個人 ← グループ	一斉	学習形態

「思・判・表」課題の中で「学びの主体的な調整」等の顕著な表出があった場合にそれを加点要素として評価

総括的評価の場面は精選されており、単元終末以外は指導に活かす評価（形成的評価）とすることが明確となっている

「思考・判断・表現」の過程で「学びに向かう力・人間性等」を積極的に評価するイメージ

時	学習活動	指導上の留意点 ★自立した学び手の姿	評価規準・評価方法等
1	○単元の見通しをもつ ○竹取物語についての文学的知識の学習	・目標や学習の流れ、ゴールの姿など見通しをもって学習できるように伝える。 ・『竹取物語』がかぐや姫として今も伝えられていることを確認し、古典に親しむための機会とする。	
2	○竹取物語の序文を音読 ○蓬萊の玉の枝を音読 ○蓬萊の玉の枝のあらすじを捉える	・古文を音読し、古典特有のリズムなどをつかむ。 ・歴史的仮名遣いや古文特有の言葉の意味などを説明し、時代とともに言葉の意味が変わっていったことを留意させる。	[知識・技能]① ワークシート ・歴史的仮名遣い、言葉の意味を学習し、それを活用できているのか確認する。
3	○富士の煙の音読 ○富士の煙のあらすじを捉える ○くらもちの皇子の共感できる点を探る	・古文を音読し、古典特有のリズムなどをつかむ。 ・歴史的仮名遣いや古文特有の言葉の意味などを説明し、時代とともに言葉の意味が変わっていったことを留意させる。 ・くらもちの皇子の共感できる点を全員で探ること、自己調整する際の指標になる活動にする。	
4・5	○どの人物が気になるのか選ぶ → かぐや姫、五人の貴公子、翁 ○選んだ人物のどのような心情や行動が、共感できるのか複数の資料から探る ○互いの考えを交流する ○交流を通して、自分の考えを広げたり、深めたりして自分の解釈を再構築する ○自分なりの解釈をまとめる	・参考図書は図書スペースを設け、参考資料はタブレット上で、いつでも見られるようにしておく。 ・自分の主観にならないように必ず叙述をもとに解釈させるようにする。 ・自分の考えや友達のことを整理することで、次時の自分の考えをまとめる活動につなげる。 ★似ている考えや異なる考えの仲間を自分から見つけ、対話を通して自分の考えを広げたり深めたりしている。 ★自分に必要な情報を資料から収集している。	[思考・判断・表現]④ ワークシート or オクリンクプラス ・場面と場面、場面と描写を結びつけながら自分なりの解釈を見つけているか確認する。 [主体的に学習に取り組む態度]④ ワークシート or オクリンクプラス ・叙述・描写などの根拠をもとに自分なりの解釈をしているか確認する。
6	○友だちと共感できる点について語り合う ○単元のまとめを行う	・様々な考えに触れられるようにし、自分の考えをさらに広げられるようにする。 ・現代との共通点を生徒の発表から見いだせるよう示唆する。	

主体的に取り組むことができる「思・判・表」課題

評価場面は精選されており、毎時のワークシートや振り返りは評価対象とならない

主体的に取り組むことができる「思・判・表」課題

「思・判・表」課題の中で「学びの主体的な調整」等の顕著な表出があった場合にそれを加点要素として評価

時間	ねらい(■)、言語活動(丸数字)	知・技	思・判・表	態度	備考
1 2	■単元目標を理解する。 ■国際協力のキャンペーン広告を読んで、自分たちが貢献できることや願いについて書く。 ①国際社会の状況について知る。 ②教科書の本文を読んで理解する。 ③自分たちが貢献できることや願いについて考え、共有する。 ④自分たちが貢献できることや願いについて書く。 ■仮定法(wish)の形・意味・用法を理解する。 ①教科書本文で出てきたI wishを用いた文章を取り上げ、文の形・意味・用法を理解する。 ②前時で書いた作文に自分の願いをI wishを使って書き加える。				
3 ※	■発展途上国の現状についての英語を開いたり、読んだりして自分の考えや気持ちなどを整理し、自分が貢献できることや願いについて書く。 ①発展途上国の現状についての英語を開いたり、読んだりして、内容を理解する。 ②理解した内容や自分が貢献できることや願いなどを、同じ国を選択した生徒とペアやグループで共有する。 ③共有した内容をもとに自分が貢献できることや願いなどを書く。				
4 5	■カイトとメグの会話の内容を理解する。 ①新出語句について理解する。 ②デジタル教科書を活用し、音読練習をする。 ③教科書の本文を内容理解する。 ■仮定法(if 主語 were)の形・意味・用法を理解する。 ①教科書本文で出てきたifを用いた文章を取り上げ、文の形・意味・用法を理解する。 ②もし自分がアフガニスタンの生徒だったら、どのように勉強するのかが英語で書く。				
6 ※	■発展途上国の現状についての英語を開いたり、読んだりして自分の考えや気持ちなどを整理し、自分が貢献できることや願いについて書く。 ①発展途上国の現状についての英語を開いたり、読んだりして、内容を理解する。 ②理解した内容や自分が貢献できることや願いなどを、同じ国を選択した生徒とペアやグループで共有する。 ③第3時に書いたものや、共有した内容をもとに書くことや願いなどを書く。				
7 8	■国際協力のキャンペーンについてのスピーチ原稿を読んで、支援がどのように役立っているかについて理解する。 ①新出語句について理解する。 ②教科書の本文を内容理解する。				
9 ※	■発展途上国の現状についての英語を開いたり、読んだりして自分の考えや気持ちなどを整理し、自分が貢献できることや願いについて書く。 ①発展途上国の現状についての英語を開いたり、読んだりして、内容を理解する。 ②理解した内容や自分が貢献できることや願いなどを、同じ国を選択した生徒とペアやグループで共有する。 ③第3時・6時に書いたものや、共有した内容をもとに自分が貢献できることや願いなどを書く。 ④書いたものを読み合い、交流する。		○	○	
10 11	ペーパーテスト	○	○	○	

諸外国における学習評価（ブリティッシュコロンビア（BC）州）

- 学習評価結果を報告するフォーマットは記載項目を絞った様式とする
- 学期途中に行う評価報告は、学期早期からの実施を推奨し児童生徒・教員間での目標設定や振り返りを促す

評価の形態と目的

教室での学びの評価（Evaluation in the classroom）に基づき以下を実施

①学習進捗状況の報告（Learning Update）

- 児童生徒が学びを振り返り新しい学習目標を設定できるようにする

②学習の総括（Summary of Learning）

- カリキュラムの学習基準に対する児童生徒の達成状況を評価する

評価の頻度

① 1学年の中で計4回

- 2回は形式を問わず（informal Learning Updates）、学期制を取る学校の場合はゴール設定や共通理解を図るため学期早期からの実施を推奨
- 残りの2回は書面（Written Learning Updates）で、学期の中間での実施が推奨されている

② 年度末

評価の材料

①②いずれも以下に基づく

- テストやクイズへの回答
- 反復的な練習課題
- プロジェクトや作成物
- 児童生徒の作品の例や成果物
- ポスター、図、ビジュアル
- 口頭での応答や報告
- プレゼンテーションやパフォーマンス 等

◆学習進捗状況の報告例

Learning Update

教師の記述的フィードバック

Ryan is a great communicator and enjoys interacting with others to share his ideas. He is sensitive to others and is aware of how his actions and words impact those around him. Ryan at times requires support when uncomfortable situations with peers or staff. He is working on using his strong communication skills to express his thoughts in times of social conflict. Overall, Ryan has developed important skills to be a member of our classroom community.

学習領域	習熟度	Descriptive Feedback
英語	Developing	Ryan makes meaningful connections, which demonstrates his good communication skills. Although reading below grade level, when provided with books at his level he is reading and has helped him grow his reading skills. The next step is to read a variety of books that interest him and practice sound.
数学	Proficient	Ryan is proficient at explaining and justifying his mathematical reasoning. He shows curiosity when solving problems. Ryan is still building his understanding of perimeter and area and can use his strong problem-solving skills to solve problems.
科学	Proficient	Ryan is a curious student who makes keen observations and predicts the outcome of an experiment. He demonstrated proficiency when playing a board game.
社会	Proficient	Ryan has asked great questions throughout our various inquiries and has provided well-constructed arguments to defend his position. He is also able to consider other perspectives beyond his own, but he is still working on this skill.
健康・体育	Developing	Ryan has demonstrated fair play and leadership in all of our physical education activities and could recognize how personal choices surrounding physical activity affect his health and well-being. Ryan continues to develop to some of his skills required to control an object such as a ball. With more practice and patience, he will become more confident and further develop his skills.
美術	Developing	Ryan was able to identify various elements of art used among indigenous art. Ryan required support to create pieces of art. He is a very creative student and with more opportunities, he will become more confident and proud of his work.

コアコンピテンシーと目標設定の自己評価

My goal was to think in new ways this year. This year I had to think creatively and critically about project on anything I wanted and because I really love pretty rocks I decided to study rocks. I had to think about how to group them into categories and characteristics in my presentation. That was the hardest thing I did all year and I'm really proud of it.

I had a goal to get better at communicating my thoughts better. I think I did a lot of growth because I learned how to write a really good paragraph and all about punctuation. I didn't know teacher gave us lots of projects that got us to write and we made posters and presentations. I also wrote reflections like this one to help us understand how we are growing. Many presentations in class too because it's fun to watch other people's and because it helps class. I feel more confident in my communication than in grade 3. I am also working on writing. Sometimes I find it hard when we have a fight but I am learning how to communicate.

いずれもフォーマット1枚で、主に以下の3項目からなる

- 生徒の強みや成長分野、成長の機会を説明するフィードバック
- カリキュラムの学習目標に対する習熟度
- 児童生徒の自己評価

◆学習の総括のレポート例

Summary of Learning

British Columbia Elementary

Student Name: Jared Date: June 2023

Grade: 7 Attendance: 3 absences & 2 late

教師の記述的フィードバック

Jared has been a kind, friendly, and funny member of our class community. He enjoys participating in class activities and discussions and his contributions are consistently interesting and relevant.

He enjoys problem solving and is a curious learner.

He continues to develop his concentration by avoiding distractions in class. He is aware of the things that take him off task and is doing a great job of setting up his learning environment to minimize them. Time management has been an area of growth for Jared. He is doing a good job breaking large projects into small, manageable steps so he can complete his best work rather than rushing to finish at the last minute.

E-ポートフォリオ

In the e-portfolio, you will find specific descriptive feedback about what your child is able to do and where they will be going next with their learning.

学習領域	習熟度
英語	Developing
数学	Proficient
科学	Proficient
社会	Developing
健康・体育	Proficient
美術	Proficient
キャリア教育	Proficient
応用デザイン・技能・テクノロジー	Proficient

コアコンピテンシーと目標設定の自己評価

This year, students have engaged in goal-setting and self-reflection on their learning in relation to the Core Competencies of Communication, Thinking, and Personal and Social. Please see the portfolio post titled "Year-end Late French Immersion Core Competency summary."

Principal signature: _____ Parent signature: _____

Teacher signature: _____

46

諸外国における学習評価（オンタリオ州）

- ・ 学期早期に児童生徒の評価を実施し、児童・保護者・教員間で学習の進捗や強みを共有する
- ・ 学期途中、学期末に行う評価いずれも児童生徒の強みや改善に向けたステップの共有に重きを置く点が特徴

◆進捗報告書例

評価の形態と目的

学びのための評価（Assessment for learning）と学びとしての評価（Assessment as learning）の考えに基づき以下を実施

①進捗報告（Progress Report）

- ・ 児童・保護者・教員間での早期かつ継続的なコミュニケーションを目的に学習の進捗、学習の強みの可視化評価を中心とする

②州公式成績表（Provincial Report Card）

- ・ 学習スキル等の発達状況、カリキュラムの学習基準に対する学生の達成状況の評価を中心とする

評価の頻度

- ① 学期早期（10月下旬～11月下旬）
- ② 各学期末（年2回）

評価の材料

※①②いずれも以下に基づく

- ・ 宿題
- ・ プレゼンテーション
- ・ パフォーマンス
- ・ デモンストレーション
- ・ プロジェクト
- ・ テスト
- ・ 試験 等

The image displays two forms from the Ontario Ministry of Education. The left form is the 'Elementary Progress Report Card', which includes a table for tracking student progress in various subjects (English, French, Math, Science, Social Studies, Health Education, Physical Education, Music, Visual Arts) across four categories: Progressing Well, Progressing Well, Progressing Well, and Progressing Well. The right form is the 'Elementary Provincial Report Card', which provides a detailed overview of student performance in 'Learning Skills and Work Habits' (Responsibility, Organization, Independent Work, Collaboration, Initiative, Self-Regulation) and 'Strengths/Next Steps for Improvement'. Both forms include fields for student information, teacher information, and a section for parent/guardian comments.

◆州標準成績表

いずれのフォーマットも主に以下の2項目からなる

- ・ 学習スキルや行動習慣の状況、強み/改善に向けたステップ
- ・ カリキュラムの学習状況、強み/改善に向けたステップ

諸外国における学習評価（ニューサウスウェールズ（NSW）州）

- 学習評価の中に形成的評価を位置付ける
- 総括的評価では、各教科のシラバスで定めるパフォーマンス基準に対する児童生徒の評価を教科別に5段階で示す

◆総括的評価時のレポート例

評価の形態と目的

①形成的評価

- 児童生徒の学習ニーズを満たすため指導や学習に係る情報提供
- 指導、学びの改善や学習目標の設定等

②総括的評価

- シラバスやパフォーマンス基準に対する児童生徒の達成度を評価する

評価の頻度

- 都度実施
- 各学年のセメスター（計2セメスター）ごと

評価の材料

- 実践的活動への参加
 - 重要な概念を理解するためのスキルの活用状況
 - 未知の状況での学びの適用状況
 - グループディスカッションへの参加
 - チームやグループでの調査・問題解決学習における行動や思考
- シラバスの内容やパフォーマンス基準に対する児童生徒の成果（具体的な材料の記載は特段なし）

以下の5段階から評価

A（優秀）：成績は目覚ましく、様々な新しい複雑な状況で自身をもって知識とスキルを応用する
 B（高い）：高い成績を修め、様々な身近/新しい状況で自信を持って知識とスキルを応用する
 C（期待される水準）：成績は期待水準に達しており、身近な状況で知識とスキルを応用する
 D（基礎的）：成績は基礎レベルで支援を受けながら身近な状況で知識とスキルを応用する
 E（限定的）：成果は限られており、十分なサポートを受けながらいくつか身近な状況で知識とスキルを応用する

以下の3段階から評価

高い：ほとんどの学習活動に積極的に参加し取り組む。常に高い水準で課題を完了し発表するよう努める
 満足：ほとんどの学習活動に積極的に参加し取り組む。定められた水準に沿って課題を完了し、提出するよう定期的に努める
 低い：時々学習活動に参加し、熱心に取り組む。定められた水準に沿って課題を完了し発表しようとするもある

年度 [20xx] 教員 教員名

英語 成果 教師のコメント

数学 成果 教師のコメント

美術 成果 態度

ダンス 劇 音楽

成果 態度

人文社会と環境 成果 態度

地学

成果 態度

個人の発達・健康と体育 成果 態度

発達と健康

成果 態度

科学と技術 成果 態度

science digital tech

成果 態度

NSW Department of Education 年度 [20xx] セメスター [#]

学校名

概要コメント

社会的な発達と学習への取組

	C	U	S		C	U	S
学習へのポジティブな態度を示している	☐	☐	☐	自立してよく動いている	☐	☐	☐
他者の権利や財産を示している	☐	☐	☐	率先力ややる気を示している	☐	☐	☐
クラスや学校のマナーを尊敬している	☐	☐	☐	他者を助けたり励ましている	☐	☐	☐

C- 常に U-たいてい S-時々

追加活動

[insert activity] [insert activity] [insert activity] [insert activity]

[insert activity] [insert activity] [insert activity] [insert activity]

出席状況

全日欠席 間 一部欠席 間

諸外国における学習評価（英国（イングランド））

- ・ 学習評価の中に形成的評価を位置付ける
- ・ 国の教育制度に基づき全国一律で実施される法定総括的評価では、児童生徒が達成すべき学習目標への達成度を測る

◆総括的評価時の評価シート例（英作文）

評価の形態と目的

- ① 形成的評価
 - ・ 教育指導における情報を継続的に収集するため
- ② 学校内総括的評価
 - ・ 教育期間の終わりにおける生徒のパフォーマンスを理解するため
- ③ 法定総括的評価
 - ・ 全国的な期待値と生徒の成績を比較し把握するため

評価の頻度

- ① 都度実施
- ② 単元終了時、学年末試験
- ③ キーステージ終了時

評価の材料

- ①
 - ・ 図面、レポート、写真、ビデオや図作品等の成果
 - ・ 観察評価
 - ・ 定期的な短い復習クイズ
 - ・ 授業中の質疑応答
 - ・ 生徒の学習成果の採点
- ② 単元終了時の短期テスト、学年末試験
- ③
 - ・ 国家カリキュラムに基づくテスト
 - ・ キーステージ終了時の教師による評価*

End-of-key stage 2 statutory assessment – 期待される水準の中でより深い理解に到達							
Name: Morgan	A	B	C	D	E	F	Collection
児童は以下ができる（学習目標）	Short story	Recount	Letter	Short story	Balanced argument	Science investigation	
・ 目的と読者に応じた効果的な文章を書き、読書経験から構成や表現技法を取り入れられる							

End-of-key stage 2 statutory assessment – 期待される水準に到達							
Name: Morgan	A	B	C	D	E	F	Collection
児童は以下ができる（学習目標）	Short story	Recount	Letter	Short story	Balanced argument	Science investigation	
・ 様々な目的や読者に応じて効果的な文章を書き、読者に配慮した言葉選びができる（例：日記では一人称、説明文では直接の呼びかけ等）	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
・ 物語文では、場面・人物・雰囲気を描写できる	✓	n/a	n/a	✓	n/a	n/a	✓
・ 登場人物の性格や物語の展開を示すために会話文を取り入れられる	✓	n/a	n/a	✓	n/a	n/a	✓
・ 必要に応じて文法構造や語彙を選んで使い分けられる							

End-of-key stage 2 statutory assessment – working towards the expected standard								
Name: Dani	A	B	C	D	E	F	G	H
児童は以下ができる（学習目標）	Non-fiction	Letter	Prediction	Description	Balanced argument	Narrative	Biography	Description
・ 様々な目的に応じた文章を書くことができる	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
・ 段落を使ってアイデアを整理できる	✓	✓		✓	✓	✓	✓	✓
・ 物語分では、登場人物や場面を描写できる	n/a	n/a	n/a	✓	n/a	✓	n/a	✓
・ 説明文などの非物語文では、見出し、箇条書きなどの簡単な構成要素を使い、読み手の理解を助けられる	✓	✓	✓	n/a	✓	n/a	✓	n/a
・ 大文字、ピリオド、疑問符、リストのためのカンマ、省略形の Apostrophe をおおむね正しく使う	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
・ 小学3・4年生の語彙リストの単語の多く、5・6年生の語彙リストの一部を正しく綴れる	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
・ 文字を読みやすく書くことができる	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓

※：法定総括的評価に関して、keystage1（1～2学年）では実施されない。読解（Reading）と数学（Mathematic）は全国共通の外部テスト（SATs）で、英作文（Writing）と理科（Science）は教師評価で行われる。

（出典）イングランド教育省「[Key stage 2 teacher assessment guidance 2025](#)」Webサイト（2025年5月28日最終閲覧）